
その身に宿すは月の意思

すぷれえ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

その身に宿すは月の意思

【Nコード】

N0546U

【作者名】

すぷれえ

【あらすじ】

繰り返される日常が退屈　　そんな涼〇ハルヒ的思考の少年が型月世界へ行きます。憑依先は最初の真祖？そんないきなり人外化とした少年のお話。注）彼のSOS団団長様ほどぶっとんではないません。この話のご都合主義、型月世界設定に対する自己解釈や設定捻じ曲げが含まれています。そういうのに嫌悪感をお持ちの方は回れ右をよろしく願います。申し訳ありませんが、作者は初心者&処女作であることをご理解ください。

一話 転生と誕生（前書き）

初めまして。すぶれえと言います。

処女作です！

二次制作、原作ブレイク、オリ主などが含まれます。

こつというのが苦手な方は見ないほうがよろしいかと思われませう。

それでも！という方々はどうぞ！

これからよろしく願います。

一話 転生と誕生

「今朝のニュースです。本日未明、 県 市の住宅地で火災が発生しました。近くを通りかかった男性から『アパートの一室から火が出ている』と、119番通報がありました。住宅が密集しており消火作業は難航。火は先ほど消防隊によって消し止められました。中から十代後半から二十代前半のいずれも男性の遺体が二人分発見され

拝啓、お袋さま

目が覚めたら、のっぴきならない事態になっています。あなたが私

に教えた『いつでも困ったら人に聞け』という教えも役に立ちそうにありません。

どうすればいいでしょうか。

・・・落ち着け、そして考えろ。

思い出すんだ、昨日までの暮らしを。そう、ただの平凡人間な俺はいつものようにベッドに寝っ転がった。

次の日も起きて朝食をとり、学校へ行き、帰ってからはテレビを見て夕食を食べ、パソコンして寝る。そんないつもと変わらない日常を過ごすと思っていた。

これでも小さい時は毎日が楽しくて、テレビの中にいるヒーローを信じ、絵本の世界に憧れ、世界は輝きに満ちていた。

自分も大きくなったらああなりたいと、そうなるものなんだと思っていた。

成長するにつれてそんなガキな夢を見なくなって、つまらない毎日の繰り返し。そのまま大人になって、じじいになって、死んで何もなくなる。

だけど、俺は心のどこかで非日常を望んでいた。

なにか今日はあるんじゃないのか？そんな希望。だって、死んじまえば自分が自分で無くなる。

そして自分はそれに気がつけない。

・・・なんて無駄な人生なんだろう！結局何もなくなるのに、何故この時、この瞬間《生きている自覚がある時》位は楽しくないのだろう！

だったらなんかあってもいいじゃんか！！『生きることは劇的だ』とおもわせるような、アニメとか、ネットにあふれてる二次小説のような世界があっても。

そして結局何もなのまま、一日を終える。

目が覚めたらまたつまらない一日の繰り返し・・・のはずだった。

「JJJJ、JJJJ?」

目が覚めたら、知らない天井だった。そして、知らない部屋。

自分が寝ていたのは確かにベッドだったが、床は見慣れたフローリングなんかじゃなく、石の床だった。

あれだけ非日常を望んでいたのに、俺には喜びなんかなく、困惑し

かなかった。

よく見ると、短い黒髪だったはずの俺の髪は、今や腰まで届く長い金髪になっていた。

「なんだこれ……」

『もし転生したら絶対言ってやるんだ!!』と前に意気込んでいたお約束の言葉を言えなかった悔しさより、自分がどうなってしまったか知りたかった。

その前に転生なのか？コレ。

落ち着け俺、k o o lになるんだ、c o o lに！

……部屋の中には誰もいそうにない。母上の教えに従いとにかく人をさがそう。

……べ、別にマザコンなんかじゃないんだからねっ！ただそれが正しかったことが多いだけなんだから！

・・・うん、やめよう。見回しても、何も無い部屋。自分の寝ていたベッドしかない。

俺はおもむろにベッドから立ち上がり、石の床の冷たさに痺れながら部屋を出ると、そこは長い廊下だった。

平凡な家庭の俺が学校でしか見れないような長さ。

天窓から見える空は暗く、朱い月がぼっかり浮かんでみえた。

(赤い月は次の日不吉なことがあるって言うけど・・・まさかな)

なんてこと考えながら階段を下りて、目の前にあった扉を開ける。

と、外にでた。澄んだ空気が俺をつつむ。

後ろをみると、さっきまで中にいた建物がある。近すぎてわからない

いけど、大きな城みたいな、威圧感のある建物だった。

城（仮）には明かりがついていないので、誰もいないみたいっぽい。

え、なにここ？誘拐なら普通廃ビルとか、森の中の一軒家だし、手錠してガムテープか猿轡で口ふさいでるんじゃないの？

そもそも俺の家に身代金払えるような財力なんかない。

じゃあなんだ、あれか？二次創作でよくあるあれなのか？このあと神様がでてきて黒い落とし穴なのか？

だがしかし、駄菓子菓子。

テンプレは白いまっさらな空間と決まっている。さらに言えば、余りにこの世界はリアルすぎる。さっきの朱い月だって、この城だつて、いま立っている土の感触だつて。

つか痛っ！俺裸足かよっ！

・・・ちよつと余裕が出てきたようだ。

これからどうする？城を見上げながら考える。この城に人はいなさそうだ。

となると、とりあえず歩いてみよう。散策してたらなんかでてくるだろ、そう思って振り返った瞬間

人がいた。

腰まで届く金色の髪は絹のように光沢を放ち、こちらを見る紅い瞳は彼の後ろに浮かぶ朱い月のようだった。まるでこの世の人間じゃないような幻想的な雰囲気そのいつに、俺はしばし見とれていた。男、いや男かどうかも分からないが、周りの景色なんか吹き飛んで、俺はそいつしか見えなかった。

『キキイッ』

どこかで動物が鳴いた。俺はハッとして当初の目的を思い出す。そうだ、こいつにいろいろ聞かなければ。そう思って何から聞くところか迷っていると、

「やあ、気分はどうだい？」

「これが俺とあいつ、
朱い月のブリュンスタッド
の出
会いだった。」

「……様……兄様！」

「ん、どうしたんだ？アルト？」

「またお月見をしているのですか？」

「ああ。今日は満月だからな。なにかあったのか？こんなところ（屋根の上）まで来て」

「あ、いえ・・・特にないのですが、その・・・私も一緒にしてもいいですか？」

「ハハッ。かまわないよ、おいで」

「は、はいっ！」

そうやって我が愛しの妹は俺が伸ばして座っている脚の間に腰をおろし、俺の両腕を自分の前にまわさせて抱きつかせるようにし、さらにその俺の腕を抱きしめた。肩越しに見える、緩んだ頬は幸せそのもの。

やれやれ、いつの間にこんなブラコンの妹に育っちゃったんだろうか？

いや、確かに俺もなついてくれていてくれる方がうれしいけどさ・・・。

「えへへ〜」

アルトルージュリブリンスタッド、死徒二十七祖序列第九位であり、《血と契約の支配者》と称される。彼女に付き従う者は多く、今や死徒たちの中での最大勢力を率いている。

そんな大層な肩書を持つ妹であるが、今俺の腕の中にいる彼女はともそんなふうには見えない。

「兄様はさっきなにを考えていたんですか？」

「あいつとの出会いをね……。ちょうどこんな満月の夜だったから」

もう1200年も前のことだ。人間だった頃は考えられない人生だ。当然記憶は摩耗する。でも、あの時のことは色あせずにはつきりと覚えていることだった。

「ああ、あの人ですか……。兄様も知っていると思いますが、私

「はあの人嫌いでした」

「そうだったね。すまない・・・」

「いえ、いいんです。あ、そういえばですね・・・」

千年城の屋根の上、2人の吸血鬼の談笑はまだ続く・・・

一話 転生と誕生（後書き）

・・・というわけでドキドキです。第一話目でした。いかかだったでしょうか。誤字脱字はお受けします。ですがあまりに厳しい批判などはすいません。作者のガラスのハートが木端微塵に粉碎されますので。

裏話としましては、主人公が死んだ理由を地震にするつもりでした。迷信ですが、「赤い月が出ると次の日は地震が起きる」と子供のころ教わった記憶があるからです。主人公が死んだ地震と、朱い月をそこでつなげようとしたのですが、先の地震で設定を変えました。この話が完成していた後に地震が起きたので、そのところの無理やり感があるかもしれません。

では、また次の投稿で。感想お待ちしています。

一話 説明第一夜（前書き）

一話目です。どうぞ！

二話 説明第一夜

「やあ、気分はどうだい？」

そいつはよく響く澄んだ声でそう聞いてきた。

「あ、いや、大丈夫ですけど、ここどこなんですか？」

俺はいきなりの質問にそう答えながら第一の疑問をぶつけた。

するとやつは目を丸くして、その後急にうつむいたかと思うと、なにかぶつぶつ言い始めた。

(あれ・・・俺、今なにか間違えたんだろうか・・・?)

「やはり・・・」

「・・・失敗・・・」

「これでは・・・星・・・」

なんか言ってるのは分かるのだが、何言ってるのかほとんど聞こえない。

それにしても、あまりに自分の世界に入ってるっしやる。

なに、放置プレイ？そんな時は・・・

(さっきのこいつのセリフって誘拐の時の犯人が人質起きた時によく言っよな・・・)

現実逃避！！

イカンイカン、戻ってこい俺よ。そして良く考えろ。

やつは王族が着るようないかにもセレブっ！な恰好をしている。どうも犯罪どころか運動すらできそうにない。

とうるかする必要がなさそうな御身分なのだが……。これはホントに誘拐なんだろうか？

まあ、いざとなれば逃げるか……。と服装だけであれこれ考えていると、

「すまなかつたな。君の自我が余りにも発達しているから驚いてしまったね。私は朱い月のブリュンスタッドだ」

いきなり立ち直り自己紹介！急すぎて付いていけないぜ！

「は、はあ・・・えっと、俺、あ、いや僕は・・・」

なん・・・だと・・・？

名前を名乗ろうとして、できなかった。なにかおかしい。

つい昨日まで使っていたはずなのに、自分の名前がでてこなかった。まるで霞がかかったかのように、そこだけがおぼろげだ。昨日まで自分が何をしていたか、他の知識や記憶はあるのに自分の名前を覚えていない。

どうなっちまったんだ・・・

「ああ、かまわないよ。君には名前がまだなかったね。私の初めて

の投影品、この星に来て最初の眷族。うん、私がつけてあげてもいいけど、それだけ自我が発達しているなら君の名前は君が決めなさい」

などとのたまった。てか投影『品』って……。

はあ……まあいいけどさ、名前忘れちゃったし後で思い出すまでの暫定的なのを考えよう。

それより今は状況確認。とにかくここはどこで今はいつで、いろいろと知ってそうなコイツにたずねることにしよう。

『失敗』に関しては……触れちゃいけない気がする。

城のなかにつれられるまま入ってきて、さっき俺が寝てた部屋とは別の部屋に入った。

城内に入ってから、誰ともすれ違わずに。ベッドや食器があったりするから、どうやらここがこいつの部屋らしい。

大きな窓からは朱い月の光が入って来る。電気をつけなくてもかなり明るい。

やつは椅子の一つに俺を座らせて、自分も席に座ると、

「 私は朱い月のブリュンスタッド。あの月の王だ」

なんですと

？

「つまり俺がここまで自我をはっきりさせていたのがあなたの言う失敗だと？」

「そういうことになる。そこまでの自我をもってしまつと君の精神を肉体からはがすことは困難になる。また、乗っ取ることも難しい。へたをすれば肉体を傷つけてしまふ。それは困るからね」

説明を要約すると、こいつは自分の領地 月 を捨ててきたのだつた。

信じられんことだが、この星 地球？ が人間によつて自分が破壊されるのを怖がり、『人間ができたからワタシコワイ』とかいってSOSを出したらしい。

・・・たしかに温暖化とか嫌だろつ。

自分の領地が荒廃していたこいつはそれに乗ったのだった。月という、星の代弁者 タイプ・ムーン として。

だがこいつはしょせん月からのよそ者。この星という呼びよせた本人（？）から、いづれ排除されるに違いない……

そう考えたこいつは、自分がこの星で生きていく為に俺の肉体を生み出して、そこに転生しようとした。

だがなんか知らんが、俺という精神 魂 がやどってしまった。なんでだろうねえ、まったたく。

で、星と契約したこいつは星の精霊となって、生命力的な何かを星自身から与えられる代わりに、星に危険が及ばんように害虫退治するのが仕事。

さらに言えばこいつは吸血種らしい。その眷族の俺も当然同じ。いわゆるヴァンパイアってやつですね……ああ、厨二。

力の大妖 と称されるように、その力はまさに怪力というのがふさわしく、数多く存在する西洋妖怪の中でトップクラス。その身は不老不死で、動物に変化することも可能。水、銀、十字架に弱く、これらに触れると大ダメージを受けるといふ。

また、光を浴びると消滅してしまう、なんてのが吸血鬼伝説の一般的なもんだらう。

だが、一番の特徴は血をすするといふことだろう。血を吸われた人間はアンデッドとなり街をさまよう。吸血した人間を使役することもできるといわれているが。

しかしやつは、俺もそうだが日の光にあたって『なんかダルイ』程度で済むらしい。水も大丈夫みたい。もちろん不老不死で、吸血した人間は運がよければ吸血鬼になると言われた。

その場合その吸血鬼は自分の眷族となるらしい。その場合は俺が吸ったからといって、日の光にあたって大丈夫というわけではないよーうだが。。。

一番の心配の吸血衝動は、俺の今の器（肉体）をかなり抑えめでいように朱い月がつくつたらしく、当分来ないだろうと思われる。

ああ良かった、俺血液検査の時そっぽ向くくらい血嫌いだったからなあ……。

あの生々しい鉄臭さがどうもねえ……。実際この身体になったら認識変わるのだろうか……？

それにしても、寝て起きたらいきなり人外って……非日常体験したかったからってこれは……。

「というわけで私としてはもう君をどうこうするつもりはないんだよ」

「じゃ、じゃいすんですっ。やめにするんですか？」

「いや、このまま終わるつもりはないよ」

「でしようね。まあがんばってください」

「うむ。君はどうするんだ？ここにいっても構わないんだが・・・」

「じゃあここにいさせてもらって、なにしたいか考えます」

「そうか。ではあらためて歓迎しよう。ようこそ、千年城ブリュンスタッドへ」

良かった、責任取れとか言われんくて。あまりにも突拍子もないこと言われて頭がオーバーヒートしかけているが、それでも理解できたことはある。

とりあえずの、『精神と肉体をはがされる』っていう生命の危険は無くなったってことだ。あと、この人はなかなか良い人みたいだ。寝るところもくれたし。

sondeこの体は不老不死、まあ元々やつが使うはずだったんだ。

そのスペックをつみたがるのは分かる。しかしこれで俺も人外になつてしまったわけだ。

うーん、困った。いきなりすぎる。心構えくらいはしたかったぜ！

だが、日頃から非日常を経験したいと思っていたから、この状況を楽しんでる部分もある。

これがすべて俺の夢・・・とも考えたが、それはそれでいいのかもしれない。

それに夢じゃない気がする。ブリュンスタッドに見入っていたのも、はだして地面を歩いた感覚もあまりにリアルすぎた。

となると、これが夢かどうかを考えるより、明日からなにをするかを考えたほうがいい気がする。

それに、そっちのほう楽しい。

・・・だがもしこれが転生だとすると、あれか？

俺の知らんところで二次小説のように神様が勝手にやったのか？

じゃあ俺は寝ころんだあの後死んだのか？

だったら最後穴に落としていいから一回現れてほしかったね！テンプレなんか言い換えれば王道なんだからさ！

・・・つかなんだよこいつもさ。『ちよつと明日のデート用の服買ってきます！』のノリで人一人つくってんじゃねえよ。

肉体換えるとかもう姐さんじゃん。まあ月とか地球とかスケールがでかいのは認めるが。

というより『星の意志』ねえ・・・ここはほんとに俺の知る地球な

のだろうか？

そんなことをおもいながら、『好きに使っていい』と言われたので
ベッドのある部屋を探し、みつけたベッドにもぐって明日からの生
活を想像しながら、眠りについた。

二話 説明第一夜（後書き）

というわけで二話目です。

最初にも書いたように、この話はご都合主義です。

あと型月の設定を捻じ曲げてしまっています。ご了承願います。

この話は説明でした。主人公と、読者様に対する。

主人公の名前は、高校の世界史の資料集から歴史上の人物からとりました。が、まだ出ていませんね……。

ちなみに、闇の六王権さんは出ません。よくわからない存在なので死徒27祖も朱い月の従者として生み出された感じですが、その中に自分も入っているのです、よくわからない。というわけで、無視させていただきます。申し訳ありません。

そんなわけでした。感想お待ちしています。

三話 主人公育成計画（前書き）

こんにちは。 出来上がり投稿します。

すでに何人かにはお気に入り登録していただいたようで・・・

うれしい限りです。これからもよろしくお願いします。

三話 主人公育成計画

「知らない天井だ・・・」

朝起きて一番初めに言った一言。やったよ！俺、今日は言えたよ！

・・・やっぱり夢じゃなかったらしい。俺は昨日あいつに言われた通り、あいつがつくった肉体のなかにいる。腰まで伸びた髪からわかる。いろいろと複雑だ。昨日はテンパってたが、一晩寝て整理がついた。・・・俺は人じゃ無くなった。

これがあまりに大きすぎるためか、ピンと来ない。そのうち自覚していくんだろっか？自分の名前もまだ思い出せない。前世の（？）記憶は、夜に床に就いたところで途切れている。

起きたら「お前の身体、人外だからア」と言われた。昨日のイケメンが作った身体の中に『俺』は居る。本体・・・と言おうか、二晩前までの俺の身体は今なにしてるんだろう？今の『俺』は一体何なんだろう？

だが、夢じゃないっぽいな・・・。もし夢だったら自分の妄想力を褒めねばならんだろう。そして自己嫌悪に陥る。分かっているんだぜ・・・。

「はあ・・・」

なにせよまずは顔を洗おうと、洗面台をさがす。さっぱりしたいしね！

「………広すぎっ！なんだこの城！しかも何にもない部屋ばっかだし。やっぱりこの城、人氣がほとんどない。昨日外から見た時間も明かりついてなかったし。あいつ、一人で住んでんだろうな……王様なのに。メイドさんとか居ないんだろっか？見たかった！リアルメイド。あの絶対領域はたまらんです。」

「もはや、俺の顔を洗うという行動は成り行きでちょっとした探検（メイド探し、後洗面台）になっていた。だが、広い。よく昨日簡単にベッド見つかったな……。」

「……ん？やあ、どうしたんだい？こんなところ？」

「そうして俺が迷っていると、昨日のあいつが部屋から出てきた。どうやら昨日話した部屋の前まできていたらしい。」

「顔を洗おうと思ったんですけど、洗面台が見つからなくて」

「水が欲しいのか？なら、昨日私と君が出会ったところに行けば近くに池がある」

「池？そんなんですか。どうもありがとうございます」

（洗面所、ないのか？こんな広い城なのに・・・）

「礼には及ばんよ」

そういつて朱い月と別れた後、あいつに言われるままときどき間違えながらも昨日の扉の前まで来る。そんなで来たんだが・・・

（なんだ、このバカでかい扉？俺こんなの開けたのかよ・・・。昨日は薄暗くて分かんなかったけど・・・）

それは人一人が開けられそうにないほど大きく、重厚な雰囲気だった。木と金属でできているそれは、非力と自負していた一昨日までの俺は開けようとすら思わなかっただろう。だけど、今の俺は人外じみた（実際人外）力がある・・・はず。

（昨日も開けたんだ。ひとまずやってみよう・・・フンッ！）

『ギギイイイッ』

「おお、開いた・・・」

あまりにもあっさりと、扉は蝶番に当たる部分をきしませながら開いた。気圧の変化と遮断物がなくなったおかげで、外から風と光が入ってくる。

（あゝっ・・・こういうことが・・・）

風は大丈夫だったが、朝日が身体を貫いた瞬間急に身体が重くなった。眠っていた身体を起こすのに一番のはずの朝日がつらい。まるで彼女に振られて飲んだやけ酒の次の日の二日酔いのようだ。……。あれはつらかった。光に弱いのはこの身体（吸血鬼）になつての弊害だろう。

さっき使ったバカみたいな力の代償ということだろうか？吸血鬼伝説にあるように消滅するわけでもないし、『そのうち慣れる』って言われたからしばらくの辛抱だろう。気分はコンタクト初日といった処だろうか。

朝日と戦いながら、外を一望する。昨日は夜でよく分からなかったが、この城、山の中に建っているようだ。山の中腹から眺める景色はなかなかのもので、山の間から見える朝日がまぶしかった。そしてだるい。

「いいところだ……」

だるいのを我慢しながら、右に見えた池に向かっていく。水質は大丈夫だろう。水面の朝日はきれいだったし、仮にも王であるあいつ

が変なところをすすめるとは思えない。手をつっこみ、水をすくって顔を洗う。冷たい水が、眠気を吹き飛ばしてゆく。一通り終えて手でぬぐった後、何気なく見た水面に自分の今の顔が映っていた。

(そつえば初めてだったな・・・)

瞳は朱い月と同じ紅色。髪が腰まで届く金色なのはわかっていたが、右こめかみにかかる一房の髪が白銀なのは気がつかなかった。

「ふむ、やはりイケメンの子はイケメンということか・・・」

俺の顔は整っていた。やつが自分用につくっていたから、やはりどこかあいつに似ていた。

あきらかに顔偏差値が20はあがっている。正直うれしい・・・。前はお世辞にもほめられた容姿ではなかったからね！

・・・しかし、ここまで立て続けにいろんなことがあると、自分の体が前とは違うことを再認識せざるをえない。異世界か・・・ようやく実感できてきたな・・・。

自分は晴れて人外になった。不老不死といったアイツの言葉が正しいなら、よっぽどのことがない限り死ぬことはないだろう。今死んだら自分はどうなるんだろうか。

前のつまらない生活に戻るのか、そのまま消え去るのか、仮にここが転生先として、今みたいに違う人生を歩むのか、わからない。凄く怖いのは確かだが。

それに、ここが人外魔境の世界でも、元の人間のいる世界でも、自分の身が危ないのは明白だ。

人外魔境は危険がいっぱいだろうし、元の世界によく似た世界でも、危なくないように見えて凄く危ない世界だ。不老不死なんか人間の格好の研究対象だし、それでなくても魔女狩りとかいうように、『異能』を排除したいのが人間だ。絶っ対狙われる。

ならば何をしておいてもまず力をつけるべきだろう。生きていく上で何があるか知らないが、ちょっとしたことでは動じないような余裕を。

そして今ここで頼れるのは一人しかいないわけで・・・

「稽古をつけて欲しいだと？」

「ええ、生きていくのに必要なので。」

「下界にいる並みの奴らには君の身体能力で十分だろうが・・・私

も最近^{最近}は研究で籠りっぱなしだったしな。いいだろう、引き受けよう」

「あの、研究って？」

「失敗作が私の目の前にいるが？」

「あ……やっぱり……」

そんなわけで鍛錬開始！

「フハハハハハハハハハハッ！！そらそらどうした！？この程度では私に傷一つつけられんぞ！君に与えた力はそんなものじゃないだろっ！」

『ズガガガガガッ！』

「グフツ！ガハッ！……ハアハア……」

……どうも。あれから1週間、不眠不休で戦いっぱなしです。正直なめてました、ハイ。

そもそも、朱い月はタイプ・ムーン。つまりは星の王者、絶対種。

まさに最強の個体なんです。なんとというチートスペック。おんなじだけのスペックを積んでいるこの体でも、確実に戦闘経験は向こうが上。いくらハードが凄くても、ソフトが追いつかなきゃ意味がない。

つまり今俺はマリーさんが動かしてた時のふらふらスト○イクではない。そんなんではXシリーズ最高スペックでもジ○にすら勝てんのです！

しかもあいつ、カマかせにテレフォンパンチ打ってくるからシンプルすぎて逆に強い。直線だからよけられそうに思えても、速さがハンパじゃないし音速超えて壁できるし、あたったら衝撃ものすごいしぶつとび率やばいし、まさに圧倒的な力の差では小手先の術なんか見戯に等しい感じである。

なんとというチートスペック。大事な事なので二回言うんです！

さらに言ってしまうえば、なまじ身体のス펙がいいもんだから高速再生して休む暇なく撃ち込まれる。おんなじ星の精霊として供給受けてるせいで怪我の度合いに対しての回復にかかる時間を知っているから、回復し終えるのと同時に撃ち込まれる。

さすが朱い月、無駄がない。そこに痺れる、憧れるうううっ！

さらに、眠くもなりにくいし、長いこと食事を摂らなくても死にはしない。朱い月は吸血種らしいけど、俺はこの星に合う器 肉体として全力で奴につくられたから吸血衝動を極限まで抑える安心設計に加え、精神が元人間だから、吸血衝動が消えたっばい。

あいつの攻撃で自分の血を見たけどやっぱり見ていて気持ちのいいもんじゃかった。まして飲みたいとも思わん。んで、「特訓中を考え事か？いいだろう、まだまだ余裕らしいな。ギアをあげていくぞ！」

んに高速回復を始める俺の身体。砕け散った骨が接合し、断裂した筋繊維がまた形成される。そして、治った瞬間に始まる暴風のような攻撃。

特訓開始から比べると、格段に防御と回復力は上がってるはずなんだけど、それを上回る攻撃力の上昇の前になすすべもない。たまに読みがあたって攻撃を回避して一矢報いようとするんだけど、それさえも読まれてカウンターくらうのがオチ。

ガードしても痛いし避けても避けられんし、もういや……。あ、蹴りだ……。

一年後

「いつまでやるんすか!?!もう一年は経ってますよ!?!」

「なんだね、その数え方は？この身は不老不死！たかだか私が放浪するくらいの期間しか生きておられん脆弱な人間どもとは違うのだよ！」

そついうことかよ・・・！くそつ！時間にルーズすぎんだよつ！無限にあるからって！サラリーマンは電車の5分の遅れが命取りなんだぞ！

五年後

「なんでこんなにギリギリなんですか！あなた俺のこと嫌いでしょう！？」

「特訓を申しこんだ身でなにをいっておる！それにお前という器

肉体 はレプリカとはいえ、私が全身全霊を込めて完成させたもの！それを使いこなさんようではお前はいずれ負ける！お前が負けるということは私が負けるも同然！それを許すことなどどうしてできようー！」

「そうかよー！じゃあやってやるよー！」

「良く言った！私の拳をよけてみるー！」

『ズオン！ダダダダダダダダダダダダダダダダッ！』

「性格変わってんだよー！この腹黒吸血鬼ー！」

「何を言う！私こそ、貴様がはっきりと返事をした時に落胆したのだぞー！あの時の問いかけなど、答えがないものと思っておったのに！あげておとされる私の身にもなってみるー！」

『バゴオオオオオンー！』

「八つ当たりかよこのやろおおおおおおおっ！」

ああ、俺、生きて帰れ……。るな、チートスペックだし、精霊扱いだし。五体満足で終わ……。れるな、回復力と生命力は星持ちだし。

なんだよ、無事が分かってるからあいつ手加減しないのか。そうか……。

……。え？じゃあ死なないけど致死の痛みは断続的に喰らうつてことだよな……。そしてあいつは俺に対して絶賛八つ当たり中……。あれ？詰んだ？

三話 主人公育成計画（後書き）

第三話です。 いかかでしょうか。

まだ主人公の名前は出てきません。 ええ。

基本的に主人公は非日常を体験したがつていますが、危険なことはしたくないヘタレです。

そんなところを表現できればいいのですが・・・いかんせん文才がないもので・・・。

更新については、毎週月曜更新を目標にしています。

遅れることもあるかもしれませんが、気長に待っていてもらえればうれしいです。

ではまた月曜に。感想お待ちしています。

四話 旅立ち（前書き）

四話です。6000PVを越えました。

こんな拙作を読んでくださる読者様には頭が上がりません。

本当に、ありがとうございます。

これからもよろしくお願いします。

ではごっげー！

四話 旅立ち

どこかの険しい山の中、きりたった崖の上に建つ中世ヨーロッパを
思わせる城の前で、2人の人外が修行という名の殴り合いをしてい
た。

『ズガンツ！バシユウウウウ・・・』

互いが繰り出した右ストレートは寸分の狂いなく相手の拳にあたり、
常人からは目に見えないであろうそのスピードも相殺された。

拳圧によって発生したであろう風が、二人の間を流れる。

「やっと使いこなせるようになってきたな・・・」

「当たり前だ。私とここまでやっておいて進歩していなかったなど
認めん」

はい、どうも。あれからずっと戦い続けています。

あの後やっとテレフォンパンチに慣れたと思ったら、今度は爪による斬り裂きに変化しました。おかげで最初のうちは切り傷だらけ。血が流れると今度は朱い月の目があやしくなって、本気で怖かった。

それもなんとか捌けるようになって、また特訓。5年程。

途中でエスカレートした八つ当たりを喰らい、その後愚痴（研究の難しさ、世界の姑息さ、俺の身体etc・・・）を吐かれ、やっと朱い月の動きに付いていけるようになった後、殴り合い。

なんだかんだありながらも、最終的には仲良くなれました。

肉体言語とは良く言ったものだ。ボロボロまで肉体言語で『お話』した後、それに引きずられるように殴り合いの中での本音トーク。

最初に会った時の優雅で高貴なイメージが根底から覆されるような衝撃を受けた分、なんか親近感がわいた。

で、今に至る、と。

「もういいだろう。まだまだいじm・ンンツン、修行が足りんと思うが・・・ここまでならそうそうやらねえだろう」

「おいしいいい！今いじめて言っただろう！やっぱりそうだったんだな！お前八つ当たりだったんだろ！」

「そんなことはどうでもいいのだ。「よくねえよ！」私はこの間言ったように研究に戻る。お前が何をしようがかまわんが、どこの馬の骨とも分からんような連中どもにやられることだけは許さんぞ。私の為に」

「はあ・・・。わかったよ。（性格変わり過ぎなんだよこの腹黒）」

「なにが言ったか？」『ギヌロツ』

「イイエナニモ」

ではな、そう言うとき朱い月は千年城へ入って行った。それにしても10年近く修行してたのに、それを『この間』で済ますとは……。

やはり不老不死は時間に疎いということが本当だったということか。最初に会った時に『いつ』か聞いたなら『知らん、どうでもいい』って一蹴されたからな……。

そっか、まだ名前決めてなかったな……。肉体的にはあいつの子供になるわけだから、ファミリーネームはブリュンスタッドになるのか。

ファーストネームはそれより前だから、それに合う名前となると……リシュアン、リシュアンIIブリュンスタッド。うん、もうこれでいいや。名前なんて適当で。いつかホントの思い出すかもしれないし。

さて、これからどうしよう。というか、俺にはここがどこなのか、今がいつなのか、何しひとつ分かっていない。それを知るのをほっぽりだして修行し始めたからな・・・うん、後悔はしていない。

最初俺は、朱い月というぶっ飛んだ存在がいることで、もしかしたら俺は前の世界で読んでいたSSに出てくるいろんなオリジナルのキャラのようにどっかの世界に入ってしまったのかもしれないと考えていた。

だけどSSのように、幼女や美女や老人などの自称神を名乗る御方たちも俺の前には現れてないし、一緒に戦ってくれてたまに状況説明してくれるリリカルな世界のデバ スもないし、どの世界か判断するための所謂『原作キャラ』も会っていない。

というか今のところこの世界で、俺が知ってるの朱い月だけ。あいつがもしかしたら何かに出てくるキャラかもしれないが、俺が知ってる前の世界での漫画やアニメやゲームには出てこない。というかそいつった知識が十年も戦っていたせいで摩耗してきているというもある。

それに、もしかしたらそんなことないのかも知れない。ただ異世界に飛ばされただけ、ただ前世の記憶をもって転生しただけ、そうなのかも知れない。

だけど、それはそれでもいいと思う。今俺はこうして生きて、呼吸をし、大地に立っているんだから。ならば、ここで生きていくだけだろう。

やっと、何も無い世間のしがらみから外れた存在になれたんだ。危険から身を守るために特訓もした。この身は『不死殺し』で消される以外、死ぬことはない。悠久の時間を俺はただ自分の為に使えるんだ。これがどれだけ素晴らしいことか！！

まずは旅に出てみよう。幸い時間はたっぷりある。不老不死だし。

もしかしたら、歴史上の事件や人物とかを見れるかもしれない。そ

したら、今が何時なのかも分かると思う。そう考えて俺は、簡単な身支度　　といつてもボロボロの服を着替えてコートみたいなものを拝借し、金目のものを盗むぐらいだが　　をし、千年城を後にした。

さあ、どこに行こうか。

四話 旅立ち（後書き）

というわけでした。今週は短くてすみません。

ついに主人公の名前が！いやぁ・・・今まで出せませんで・・・。
長かった！

名前の由来は前々回ぐらい前に書いた通り、高校の世界史の資料集から、ブリュンスタッドに合う名前を探しました。ネーミングセンスがないのは自覚しているので勘弁してください。

もし、他の作者様がお使いになられているのならば、申し訳ありませんがお声をかけてください。

では次回は予定通りにいけば、一週間後の27日に第五話を上げさせていただきます。

五話 十字架と魔王と時間軸（前書き）

遅くなりました。予定通り、第五話投稿です。

お気づきかと思いますが、第二話からしばらくは回想が続きます。

ではこのへらへらっつて。とびとびー

五話 十字架と魔王と時間軸

『ぞわ……ぞわぞわ……』

「これより、我が帝国に仇をなした反逆者達への刑を執行する！」

人ごみの間から見えるのは、十字架にかけられた3人の人間。両手は杭によって打ちつけられ、身につけているものはボロ布、全身に数多くの打撲がみられ、真ん中の人は片目がふさがって隻眼になっている。

どうもお久しぶりです、リシユアン＝ブリュンスタッドです。いきなりの展開で混乱している人も多いと思うので、回想します。

では・・・回想ドンッ！！

俺が、ブリュンスタッド城を飛び出して早十数年。途中オオカミとかに遭遇したり、山賊と言おうか、『ヤの付く自由業の原点』などと言い表せそうな人たちに絡まれたりしたが、文字通り持ち前のチートスペックを誇るこの身体で、肉体言語で『お話』したら道を快く譲ってくれました。この世界の人たちは皆いい人（動物）のようです。

そんなこんなで順調に旅を続けていたら大きな河にぶち当たった俺は、沿岸にすむ人間と出会った。その人たちの身なりは『腰にただ布巻いただけ』なんて、かなり原始的なものだったし、お金なんでものを介せず物々交換なんかしたりしてて、それを見た俺は前に見た山賊モドキで半ば予想していたものの、

(ああ、そうとう昔に来てしまったみたいだ)

などとかるく絶望を感じていた。まあ、それは仕方ないとして、そこにいる人々を観察していたんだけど、そこに住んでいる人たちは色素の薄い目や金髪、色白の所謂コーカソイドっていう人種で、そんなわけから『自分が今いるここはヨーロッパに該当するのではなにか』、とあたりを付けていたんだけど、確信が持てずにいたんだよね……。

そんなある日、仲良くなった町の人の一人ゲンさん(仮名)とパンの祖先と干し肉の物々交換をしていたら、

「おい兄ちゃん、最近噂の聖人様の話を知ってるか？」

「なんだ？ゲンさん、聖人様って。．．．おい、もうちょっとパンもどきよ」せ」

「なんでも言うことなすことが素晴らしい、神の言葉を聞いた人なんだってよ。．．．てめえいつもより肉の量すくねえだろうが。我慢しろ」

「チツ．．．わかったよ。ケチいな．．．（だから頭ハゲンだよ）」

「おい！聞こえたぞ、頭関係ねえだろ！」．．．今そんなんが居るんだな。どこにいるんだ？」

「無視かつ！！．．．．．兄ちゃん、興味あんのか？他の奴らに聞いたのは獅子宮の方角の町だってよ」

（聖人様、ね．．．。そいつが歴史上に残る人間だったらそこから世界の時間軸が分かるかもしれない。一目見てみようかな）

「そっか、分かった。ありがとう」

「おう、じゃあ元気でな」

なんてやりとりがあった、俺は南東に向かったんだ。

そんなわけで今流行りの聖人様が居ると聞いた町に来ているのだが・
・そいつは先日ここらを支配する帝国に反逆したとして捕まっ
たと聞いた。残念がっていた俺をみて、そのことを教えてくれたおっ
さんが、

「明後日、刑が執行されるからもしあれだったら見にいってみれば
いい」

と親切に、だが顔を歪めながら教えてくれた。どうやらその人の教
えを受けて感動したらしく、その人が捕まって処刑されることに憤
つていららしい。まあ、ただ自分の理想を教えて回ってただけみた
いだしな・・。弱者は力あるものに虐げられるのは世の常だし、
古い時代になればなるほどそれは顕著になる。・・・・・なんて

ちよつと国を憂いた頭いい人になってみ（ククク、最後ので全部台無しだなっ！クククっ！）る……。

（おい朱い月！何勝手に頭ん中覗いてんだ！仕事しろよ！無駄に星にアクセスしてんじゃねえ！）

（弱者は力あるものに虐げられる・・・君にシリアスパートは似合わないよ）。よくそんな恥ずかしいこと真顔で言えるねえ。私は絶対ムリっ！アハハハッ！！）

（あああああつ！もう消えろ！仕事してろよ！じゃあな！……………
……………やつと消えたあの野郎……………）

……………といつても別に助けようとは思わない。いろいろ面倒だし、小さい出来事ならいいけど、もしこれが大きな史実だったら、なるべく変えちゃいけないと思う。十年経つても変わらない外見で、もう自分は人間とは別の種っていう自覚もあるしな……………。

そして次の次の日、朝から町は騒がしかった。人々がある場所に足を向けている。一昨日おっさんに具体的な場所を聞かなかったがこ

の分なら問題ないだろう。
そうして人の波に流されるまま来てみたのだが・・・

「この者、イエスは・・・・・・・・・・」

ちよつといい服着てる役人と思しき野郎がそんなことを言い始めやがった。俺の聞き間違えか・・・？
いや、聖人という分類筆頭の人物だし・・・。

・・・俺は『クリスマスは楽しむけどクリスマス教徒じゃない』元・現代日本人だったから詳しいことは知らん。けど、『西暦がクリスマス
の生まれたとされる年から始まっている』事ぐらいは知ってる。

つまり、目の前で磔にされている30くらいの男が本当に俺の知る
イエス・キリスだとするならば、今この時間は俺が生きていた時
代から約二千年も前だったことだ！

さらに言えば、イエ という人間がいることはここが今ところ俺の住んでた世界とほぼ同じ歴史をたどってるっていうこと。これは俺にとって少し安心できることだ。

吸血鬼なんていう厨二じみた存在に会って、さらには自分も同類になっちゃったが、どっかの子供先生の世界よろしくバンバン魔法の矢を放ったり、稲妻傷のメガネがいる龍とかユニコーンとかいう幻想種が普通にいるファンタジックな世界ではないだろう。むしろ、俺が元いた世界に近いと思う。まったく同じではないだろうが。

しかし、噂に聞くロンギヌスの槍をみたけど最初見た時はどこにもありそうな槍だったね。じゃあ、あの執行人がロンギヌスさんなのかな？あれ、ロンケーさんだったけ？

・・・それは置いておくとして、普通の槍だとおもってたんだけどキリストさんの血に触れた瞬間になにかが変わり始めたんだよ。なにかは分かんないんだけど。だけど、某汎用人型決戦兵器のアニメに出てくる奴ほど禍々しくはなかった。うん、こんな時代にあんな赤紫色のあんな螺旋デザインの槍なんか作れないよね。

(けど、これで後世まで語り継がれる処刑は終わりか……。あまりにあっけなかつたな。時間軸と場所と世界の確認もできたし、一度城へ帰ろうかな……。)

そう考えた俺はこの世界が今まで俺がいた世界となんら変わりないと勝手に決め付け、ロンギヌスの槍を放置したまま処刑場を去った。このことを俺は非常に後悔することになる。

朱い月や俺自身というぶっ飛んだ存在が居て、意志をもっているこの世界を、元の、あの何もない平凡な世界と決め付けたのがそもそもの間違いだというのに

最近、朱い月の研究がはかどってきたみたいで、俺やあいつと同じ紅い目をした奴らが出始めたらしい。行く街先々で噂している。

俺と同じように、失敗作は自由にさせてあるんだろう。『紅い目をした奴らは怪力をもち、人の血を吸い、吸われた人間は狂う』なんてまさに俺たち吸血種　ヴァンパイア　の特徴をそのまま表した話をこの町に来る途中に聞いた。なぜだか知らんが、俺と同じ失敗作たちは吸血衝動があるらしい。

正直いい迷惑だ。俺は血を吸う必要のないにそんな噂が飛び交い始めたせいで、同じ紅い目をもつ俺まで避けられるようになった。まあ確かにそいつらとは同族だし力は人間の何倍もあるけどさ……。

盗つて……ゲフンゲフン、持ってきたコートにフードが付いていてよかった。これなら顔も隠せるし、力は旅を始めてすぐに加減を覚えたから大丈夫だろう。……見た目のあやしさ爆発だけどこないだ町歩いてただけで小さな女の子に泣かれたしなあ……世の中理不尽だ。

・・・それにしても朱い月はなにやってるんだろう。俺（失敗作）よりさらなる劣化物を作るなんて。そいつらは人間たちからは 真祖 なんて言われているみたい。まあみんなあいつに聞けばわかるだろう・・・。

「たっただいまあゝ。最近調子どうよ？元氣ハツラツウ？」

道中特になく、無事に千年城ブリュンスタッドに帰還。帰り道は星に聞いた、というか帰ろうと思ったら勝手に頭に浮かんできた。地理的にこの城は、約二千年後のドイツ領にあるようだ。この世界に 来て十年以上になるけど、初めて知った。

帰ってくるなり、この世界に来て初めての日の、俺の身体に関する
ことをきいた朱い月の私室と思われる部屋にノックもせずに入し、
研究中の朱い月に話しかける。

「ああ、君か。成果だと？分切り切ったことを聞くな。あんまりふ
ざけたことを言っているとその肉体返してもらおうぞ？それとオロナ
ンことでも答えればいいのか？ここにはないがな」

久しぶりに会った朱い月は、すこしばかり覇気がないようにみえた。
最初にみた時に感じた、神々しさというかなんというか、人目を引
きつける魅力が失われている。器（肉体）の形成はこいつにとつて
死活問題だから、成功していないという事実からあたり前かもしれ
ないが。

・・・そしてお前がなぜそのCMを知っている？

「できたのって吸血衝動付きの欠陥品でしょ？俺も下界（人間世界）
で聞いたよ、」 真祖 達が人を襲ってる』って」

「ほう・・・あ奴らはその名で呼ばれているのか。それは私と星で

決めた名だ。真祖たちによって堕ちた人間は 死徒 と呼んでいるが

「へえ、そうなんだ。で、欠陥はどうして？」

「それこそバランスというものだ。加減が難しくくてな。余りに脆弱な器 肉体 では私に合わんし、入りたくもない。しかし強力過ぎる肉体は星が難癖をつけてくる。『世界の抑止力を働かせる』とまていつてくるからな。そこにリシユアン、君の時に失敗した精神《魂》の分野まで絡んでくるから非常にややこしいのだよ」

「吸血衝動は抑えきれないの？」

「仮にも私の身体として生み出したのだ。お前ほどではないが、かなり抑えてある。吸血衝動を抑えるのに自身の力を割きたくないからな。だが最近それに身をまかせて戯れに血を吸う輩が出始めてな。・・・。そういつた『堕ちた奴ら』は衝動を抑える為に力を使っていないから全力を出せる。つまり、他の真祖たちでは太刀打ちできない。それこそアルティメット・ワンの私が、吸血衝動の消えたバグのお前か。あ奴らめ・・・自身の欲望に身をまかせると・・・。欠陥品とはいえ、奴らは私の眷族。奴らの存在は私に泥を塗る。というわけで、リシユアン。行って来い」

「んなあ！？何言つてんだてめえ！自分の後始末くらい自分でやれや！」

「何を言つ。お前も私の眷族だ。それくらい引き受けたらどつだね」

「ふざけてんじゃねえぞこの野郎！」

そうはいつでも、意外とやる気だったりする。なんだかんだ言つて今の身体の生みの親はこいつだし、退屈していたつまらない日常から出してくれた恩は感じている。

さらに言えばこの世界の知り合いは精霊として契約している星を除けばこいつしかいないのだ。下界にいる人間とはそれなりに話した奴らにはいるにはいたが、元人間とはいえやはりどこかに違いを感じていた。最初こそまさに王様のようにどつつきにくかったけど、なんだかんだいって修行も付き合ってくれたし、なにより気がねなく話せるこいつは好感が持てる。

ただ・・・まあ。もう俺が出動するのはアイツの中で決定事項のようだ。もう覆りはしないだろう。本当に、仕方のない奴だ。

「はぁ・・・わかったよ。これでも多少の恩義は感じているんだ。報いるとするよ」

「そうかそうか、私の為に奴隷のように働くがいい！」

前言撤回。やっぱりこいつ嫌いだ。

「でも、相手も不死でしょ？俺に一生戦えってんの？」

「吸血衝動に堕ちた時点で星との契約は切れる。だから残るのは血液で強化され、力が解放された生身のみだ。堕ちたら二度と戻ることはできんしな」

「そ、わかった。武器かなんか持ってっついていい？」

「かまわんよ。武器庫はここから3つ隣の部屋だ。堕ちた真祖たちの場所は・・・星が教えてくれるだろう」

「そうかい・・・（丸投げしたなコイツ・・・）。じゃあ行ってくるよ、てめえもあんまり籠ってねえでたまには息抜きしろよ」

「余計な御世話だ・・・任せたぞ。リシユアン」

というわけでやってきました！武器庫。見渡す限り剣やら槍、坤、戟、斧などありとあらゆる種類の武器がある。それにしても三無双の某飛將軍愛用の十字戟があるってどういうことだ？あれは空想の産物だったんじゃ・・・？そう思いながら一番奥まで進んでみる。

そこには鞘に納められた一振りの西洋剣が透明なケースの中に置いてあった。俺は何かに引きつけられるようにそばに駆け寄り触れようとしてみたが、手は剣に触れる前に何かに阻まれる。

(結界の類か・・・？)

鞘に納められていながらも圧倒されるような存在感。白銀に輝く柄や鏝、鞘の豪華な装飾は決して剣本来の機能を損なうことを感じさせない。鞘から引き抜いてみたい、と思ったのと同時にこの剣が自分に扱える代物ではないことも感じていた。

(この剣はやめておこう。いつか俺がもっと強くなった時に刀身にお目にかかろう)

ひとまずこの剣は置いておいて、振り返ってもう一度部屋を見渡す。元々の数も多いが、その一つ一つが圧倒的な存在感を放っている。部屋がよけい狭く感じられる。

さて・・・たくさんあるがどうするかなあ。この力ならやっぱり打撃系がいいんだろうけど・・・力だけは無駄にあるからね。鈍器振り回せばそれなりになると思うんだ、いくら相手が同族だとしても。

ん・・・あれっ？これ日本刀じゃねーか！？なんでこんなところ（西洋）にあんだよ！？・・・まあいいか。ここにあるのは皆あいつの持ち物だ。あんな非常識の塊がなにしてたっておかしくない。

・・・やっぱり日本人だもんね。憧れるよね。日本刀だよ？東京タワーで模造品売ってるぐらいだよ？日本刀の切れ味は世界一！そこに痺れる、憧れるう！

・・・よし、これにしよう。というかさっきの西洋剣見た瞬間に俺の中で剣一択なんだよね。もはや一番適してると言われても鈍器なんか使う気にならん。

そして日本刀を抜く。刀身には刃文と樋。これぞ機能美、It's

a JAPAN！さっきの剣みたいに派手な装飾はないけど、綺麗な刀身はやはり美しい。鏝近くに、伊都之尾羽張剣 と刻まれている。これがこの刀の名前だろう、なんか立派だ。

よし、これ使って頑張るぞ！

五話 十字架と魔王と時間軸（後書き）

以上です。いかがだったでしょうか。

今回は多分戦闘描写がメインになるかと思われます。

リシユアン君が本格活動し始めたのが、紀元後すぐ、とさせていた
だきました。

本当にいつか分からなかったので、こちらの都合で決めさせてもら
いました。

まあ、何個は根拠、と言おうか・・・闇雲にきめているわけではな
いですが、適当であることは認めます。すいません。

話は変わりますが、感想がユーザー様のみ書き込めるようになって
いた制限を外しました。今まで制限かかっていたのに気が付きませ
んでした。申し訳ありません。

是非、これを機に感想をいただけるとうれしいです。

では、次の更新は一週間後の月曜日、来月4日予定しています。よろしく願います。

六話 初戦闘（前書き）

一週間ぶりです。

感想いただきました。狂喜乱舞しました。

返信が遅れてしまい、申し訳ありません。

では六話です。
どうぞ。

六話 初戦闘

「ひどいな・・・」

星に導かれるまま、墮ちた真祖を討伐するため俺はとある半島の一つの町にやってきた（途中修行しながら）んだが・・・、遠路はるばるやってきたのに、ここを旅行の目的地とするなら割に合わない。

正直長居したくない町だ。空気は淀み、いたるところから死臭がする。まだ昼のはずなのに心なしか空は暗く、町には活気がないどころか人っ子一人みあたらない。まさに 死都 と呼ぶのがふさわしいだろう。

（皆血を吸われて死徒になっちまったんだらうか・・・）

だけど朱い月が言うには、『死徒になるのは資質がある人間だけだ』だということだ。つまり死徒にならない人間の方が多いだらう。だとすると、資質がない人間はどうなるんだらうか。町には確かに死臭がするが、死体は見当たらない。

(・・・考えるのは後だ。先に真祖 元凶 を倒してこの町から出よう。もうここには居たくない)

町の中心の大通りの終わりに、ひときわ大きな館がある。ここらあたりの領主の館だろうか。近づくにつれて、一段と臭いがきつくなる。・・・絶対ここだ。

館の中にも誰もおらず、人気がない。むせかえりそうになる臭気の中、奥へ、奥へ。ダンジョンのラスボスがいるのは最深部と決まっている。そして他より豪華な扉と開けるとそこには

「ようこそ、お待ちしておりました。同志よ。我が名はウルコラク・イストリアと申します」

ニヤニヤ顔のいけすかない野郎が、装飾を施された大きな椅子に座っていた。

「リシユアン＝ブリュンスタッド。俺が来た理由、分かってるんだろ？」

「まあまああわてずに。まずは私のコレクションなどいがかですか？
つい先日この町で取った生娘の血など。鮮度もばっちりですよ？」

そう言つて、目の前の真祖は赤い液体の入ったグラスを差し出してくる。水をすすめられてるんじゃないかと思うほど気安い。すぐにも殴り倒したいが、そんなことできる相手ではない。一步一步、自然な足取りで間合いを詰めていく。

「(どこまでも腐ってやがるな・・・)いらん。俺は血を飲みたくないんでな」

「またまたご無理をなさつて。吸血衝動は最初は抑えられていても生きている間蓄積され、やがて耐えられないものとなる。どうせ飲むなら最初から楽しんだほうがいいと思いませんか？」

「(・・・こいつ勘違いしてないか?)だまれ。俺は血を飲まん。飲みたいとも思わんからな」

俺がそう斬って捨てると、目の前のくそ野郎は会ったときから浮かべていたニヤニヤとした笑みをやめて驚きに目を見開いた後、立ち上がり拳を震わせながら激こうし始めた。

「なつ・・・!ではまさかあなたは・・・バカな!?そんなことがあってたまるものか!!吸血衝動のない真祖など、そのような完成された存在などいてたまるか!!」

怒気を含めながら一歩一歩近づいてくる。俺の特異性 バグ がど

うやらお気に召さないらしい。双方から近づくと、自然と互いの距離はどんどん無くなっていく。

「事実だ。もつとも、もうすぐ死に行く貴様には関係ない話だがな・
・。御託は終わったか？言い訳の準備は？もう待たん。行くぞっ
」！

「くっ・・・！ならば！貴様の血を一滴残らず吸い取ってやろう！
！完成された貴様を取り込めば、私はまた一步最強に近づく・・・！」

「ハアアアアアッ！！」

先手必勝とばかりに一気に肉薄し右ストレートを放つ。続けて左、右、水面蹴り、屈みながらの肘鉄。そこいらのゴロツキなら一撃必殺の拳でも、当たらなければどうということはない。ヴルコラクはバックステップで俺の攻撃を悠々とかわした。

「ナメた口きくだけのことはあるってことか・・・」

「あんまりナメられても困るのですが・・・その腰にぶら下がっているのは飾りですか？抜かなくてもよろしいので？」

「チツ・・・言われなくても!!」

伊都之尾羽張剣を抜き放ち、大上段から袈裟がけに斬りかかる。その間にヴルコラクは一気に俺に肉薄し、拳をふるう。

(いける、俺の方が速い!)

『ドゴツ!ズガガガガガッ!!』

しかし次の瞬間急に息苦しくなり、動きを止めた一瞬に何十という拳を腹に叩き込まれる。最後はどてっばらに膝蹴りからの喧嘩キック。体が吹き飛び、床にたたきつけられた。

(な・・・なになが・・・)

混乱しながら必死に体を起こす。みぞおちの打撲と、あばらが3本ほど折られている。いくら高速回復でもそれ以上に破壊されれば時間もかかる。唯一の救いはヴルコラクが追撃をかけてこなかったことだろう。俺が握っていた刀はあいつの左腕で止まったままだった。ヴルコラクは刀を捨て、ゆっくりとこちらに向かってくる。

「フフフフツ・・・アハハハハハハッ！やはり、やはり予想通りでしたね。あなたはあれ(刀)に慣れていない。戦いの経験値もそれほど多くない！いたぶってあげますよ・・・じわり・・・じわりとね・・・」

(チツ・・・そういうことか・・・ナメてるのはこちらの方だった・・・)

心の中で自分の甘さに毒づく。実戦経験もやつの方が上だろう。俺バグの存在に確かに熱くなったが、最初に攻撃をかわした瞬間落ち着きを取り戻していた。俺がやつという言葉に踊らされたのも事実。

さらに失念していたが、日本刀はしかるべき角度でしかるべき力の入れ具合をしないと真の切れ味が出ない代物だ。良くテレビで巻藁を達人が居合いで切ったりしているが、あれはまさに達人芸であって初心者が力まかせに振って出来るもんじゃない。

(やらなければ・・・やられる・・・あばらも治ってきた。いくぞ！)

瞬間、駆け出す。一瞬目を見開くウルコラク。しかしすぐさまニヤけ顔に戻り、右の拳を繰り出す。

「次は、こっちの番だぁー!!」

合わせるようにして左を出す。顎狙いのクロスカウンター。決まったっ！仰け反った体を蹴りで打ち上げ続いて回し蹴り!!

『ズザザザザッツッ』

吹っ飛ぶヴルコラクに追撃をかける俺。もう一度蹴りあげようとしたとき、ヴルコラクの紅い目がカツと見開いたかと思うと、次の瞬間やつの水面蹴りでこかされて、おれは再び床に這いつくばっていた。

「ぐあっ！」

「ふふふ・・・今はやられましたよ。貴方どころか私まで油断してましたねえ。ですがもう終わりです。もういい、さっさとやられて私の糧になるがいい！」

そして腹を蹴られる、蹴られる蹴られる蹴られる、蹴り飛ばされる。俺の身体は小石のように宙を舞い、床を滑った。

「グ……………うっっ……………」

(詰んだな……………あばらどころか内臓までやられてやがる……………
……………)

勝利を確信し、ゆっくりと近づいてくるヴルコラク。静かな部屋の中で良く響くその足音が、俺の死へのカウントダウンのようだった。

(クツ……………体が動かない……………。足音が近くなってきた……………もうすぐ殺されるんだろうな……………)

死を覚悟し、目を閉じる。体は致命傷の上、すでに心は折れている。ヴルコラクの足音だけが、良く聞こえた。

・ ・ ・ ・ ・
なにかが聞こえる。頭の中で響く。その声はどこか脅迫じみでいて
・ ・ ・ ・ ・あきらめた俺の心にはたらきかける。

ナゼコンナコトニ？
ナゼアキラメル？
ナゼアガカナイ？
ナゼタエル？
ナゼコラエル？

・ ・ ・ このまま喰われる？
・ ・ ・ 殺されて奴 アノバケモノ の糧となる？

いやだいやだいやだ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ！！！！
(

死にたくない

！

その一心で鈍っていた思考の回転を最速までもっていく。どうすれば勝てるか。どうすれば死なないか。あきらめていた間の時間を取り戻すように。

近くに落ちていたエモノをとる。それは最初に止められた一振りの日本刀、あいつ 朱い月 からの贈り物。

刀を杖代わりにしてなんとか立ち上がる。左手はわき腹に添えられ、足は若干ひきづつている。満身創痍と誰が見たって分かるほど、大砲のような真祖の一撃を何度も喰らい続けて体はボロボロ。高速回復も間に合っていない。

「おや・・・？アハハハハハハッ！血迷いましたか？それはあなたに扱えなかったでしょう？・・・いいでしょう、もう楽しんであげます。そして私の中で眠れ！」

そう言い放ち、ヴルコラクは一気に間合いを詰めてくる。

できることは

（信じる・・・あいつのどこから持ってきたんだ、そうとうなモン（名刀）に違いない。

その刀はしかるべくその形をし、

その刃はしかるべき一撃を与えるために造られた。

感じる、刀と一体化し、

おのれ自身の一部とし、

またおのれを刀に投影しろ。

そうすれば見えるはずだ、この剣が一番映える姿が！

この一撃に

全てを！！

刹那　中段にかまえられたそれは、迫るブルコラクの左
わき腹から右肩へ、繰り出された左腕ごと斬り裂きながら逆袈裟の
軌道を描き

残ったのは、

「　　でき、た」

血の滴る刀をもったリシュアンと、

「ばか、な・・・」

左腕の肘から先が消え、胸に一筋の赤い軌跡を刻んだヴルコラクだった。

「終わった・・・」

倒れたヴルコラクに詰め寄り、心臓にとどめを刺した後ヴルコラクが黒い塵となって霧散していくのを見届けてから、俺はその場に倒れこんだ。精霊たる真祖の最後があまりにあっけなかったことなんか気にならないほど精神、体力ともに消耗していた。

(俺は弱い……)

結果的には勝ったが、はっきり言って負けたに等しい。体はボロボロ、気力もほぼ残っていない。最初に吹き飛ばされた時、ヴルコラクが詰めていたら確実に今、俺はあいつの腹の肥やしだったろう。あいつが遊んでいなければ……そう考えるとゾツとする。

……真祖を一人殺したことによって、もう戻れないところまで来てしまった。これで次は、あいつが負けたことによって墮ちた真祖たちが俺を狙って来るかもしれない。それかヴルコラク同様、俺の『吸血衝動がない』というバグを求めてくるかもしれない。

墮ちてない真祖すら敵にまわしたかもしれない。今はあまり知られていないようだが、時間の問題だろう。次にそなえてもっと強くならなければ……このままじゃすぐ死んでしまう。

(それはまた考えるとして……とにかく疲れた……)

最後の気力を振り絞って、伊都之尾羽張剣についた血をヴルコラク

の服でぬぐうと、俺の意識は闇に沈んでいった。

「ハツ……生きてる……」

目を覚ますと、さっきまで死闘を繰り広げていた大広間だった。あれだけ重症だった傷はほとんど治っている。あ

さすが星、

流石は真祖、

チートボディ。

・・・即興にしてはなかなか？

「うっ・・・」

余裕が出てきたと思ったら、急に鼻にくる臭気。やはり元凶を倒したからといって、ゲームのように町が浄化されるわけではないようだ。やっぱり吸っていて気持ちのいい空気じゃない。早いところ、この町から出るとしよう。

「なんだよ・・・これ・・・」

館を一步出た俺が目にしたものは、人、人、人。昼間来た時は誰もいなかったのだが、寝ている間にすっかり夜となった今、町には人があふれていた。

・・・そこまではいい。だけど、その光景は異常だった。皆が皆、目に光がともっておらず、誰も何もしゃべらない。まるで人形のように町をうろつくだけ。話し声や足音、喧噪などが何も聞こえず、人の多さに反して、あまりに町が静かだった。

(なるほど・・・そうなるわけか・・・)

俺がこの町に来た時に抱いた『この町の住人はどこへ行ったのか』という疑問。大多数の死徒になる素質がない人間が、真祖に血を吸われた時にどうなるのか。その答えが目の前にある。

(死者 リビング・デッド。すでに人の理性は失っており、死にながらにして生かされている存在。堕ちた真祖 ヴルコラク の下僕で、人間を襲い奪った血 生命力 の大半を親元に送るってことか・・・まさに人形だな)

星から得た情報に自分が見ている光景を重ねる。

(日中では生きられない)消滅する(から出られないってことか・・・)

・。昼の内に討伐を仕掛けて正解だったってわけね……。生気がないから存在も希薄だし……。道理で気配が感じられないわけだ。

親 ヴルコラク を失った亡者たちは当てもなくさまよっている。
・。奴らはもう死んでいる。

このような考えはあまり好かないが、こいつ 伊都之尾羽張剣 の修行に付き合ってもらおう。

「いくぞ……。そのままでもつらいだろうから……。彼の魂に安らぎを」

町の住人はおよそ千。死者は死者を作り、人間を搾取していく。もう生者はいないだろう。さまよう死者を片っ端から片付けていく。心臓を突き、首を刈り取る。一振り一振り、死者への甲いを込めて。しかし、自分のことも忘れない。最適な刃の角度を探し、最適な力の入れ具合を見つけ、反復することでそれを身体にしみこませる。

そうして約一時間後、死者は町から居なくなつた。

「一度城に帰ろう……。自分たちがどんな存在なのか考えなきゃ……。朱い月や俺は人間とはやっぱり違う。そしてこの町がこんな風になつたのは俺たちの同類の仕業……。元人間として、真祖として、俺はどうすればいいのかな……」

元人間の真祖は自分のありかたに疑問を抱く。今の自分は人間（元の自分）の敵なのか。ただ気ままに生きていた毎日を終えた今、自分はい体どこに向えばいいのか。

六話 初戦闘（後書き）

初戦闘と、初戦闘描写でした。

うん、無理。今回乗せたのが、私の限界です。

裏話としては、一話だけのかませ役、ウルコラ君の名前を決めるのに、またもや世界史資料集を使ったことでしょうか。

30分ほど眺めていました。

あとは、ウルコラ君のセリフがやけに厨二くさかったことに後で気づいて自己嫌悪したり。

「これは俺がそうなんじゃない、ウルコラ君が中二なんだ！」

と一人言い訳したりしたのはいい思い出。

後、カタカナ言葉のあれは、まあ・・・アレです。
型月世界で重要な・・・おっと、ネタバレしてしまう。

今回は、一週間後の11日をよとえいしています。

次は、久しぶりに朱い月のご登場。あと、愉快的仲間たちが出てきます。たぶん。

ブラコンアルト様とワンコはまだ出てきません。ごめんね！

・・・感想お待ちしています。

七話 三従者（前書き）

遅くなつてしまい、本当に申し訳ありません。

以後気を付けますので・・・

七話 三従者

・・・城に戻りながら考える。自分は一体何者なのか。心は人間、身体は真祖。相反する二つの種の両方を受け継いだ自分。真祖によって変えられた人々、町。あの光景を見てしまったからには、もう見ないふりをしてのうのうと過ごすことはできない。

この世界の指針（原作知識）がない以上、自分イレギュラーは身の振りを考えてもしょうがないということだ。『自由には責任が付きまとう』なんていわれるけど、自分はどう世界と付き合っていくべきなのか。人間の為を思って、堕ちた真祖を殺しに行く事（同志討ち）を続けても、人間からは偽善にしか思われないだろう。

それどころか、今度は自分が狙われる可能性が高い。俺はそんなに出来た人間（心）じゃないから、人に嫌われてまでやりたいものでもない。・・・もう遅いかもしれないが。

でも、堕ちた真祖は見過ごせるものじゃない。ヴルコラクは戯れに人を襲い、町を殺した。

それはやっぱり元人間としては見過ごせるものじゃない。ここに何を

しに来た」

・・・え？

「これより先は我が主の城。侵入者よ、もう一度問う。何をしに来た」

考え事で歩みは遅くなっていたが、それでもいつの間にか千年城の近くまで帰ってきていたらしい。そして目の前にいる白いローブの男。目は紅いから吸血種であることは見て取れる。星にアクセスして、この先に見える城が千年城ブリュンスタッドであることは間違いないこともわかった。

で・・・誰？こいつ。

「あんだ、誰？ここは俺と朱い月」。「我が主を呼び捨てにするか。いい覚悟だ、殺してやろう！侵入者よ」聞けよっ！

男はそう言うが早い指から光弾を打ち出しながら接近してくる。
ドド パか！？それとも霊 なのか！？少年たちが憧れそうな攻撃
を、俺は素早く抜刀して、迫ってくるそれがあるものは弾き、ある
ものはかわした。

「ほう、我が攻撃をかわすか。侮っていたぞ、侵入者よ。弱き者な
ら良いが・・・貴様のような強き者は見過ごせん！全力で排除させ
てもらおう！..!」

「ちったあ人の話聞けってんだよ・・・あのな、何か勘違いしてる
みたいだがなあ「なにしてるの？ボクもまぜてよ！」うあつとお！」

急に右から気配を感じ、とっさに刀をかざす。飛びかかってきた黒
犬の牙をしのぎ、突き飛ばす。

「アハハッ！お兄さん良く避けたね。この子が防がれたの初めてだ
よ！」

もう一人出てきた。十二歳くらいの少年で、吸血種を示す紅い瞳。
さっきの黒い犬はあいつの飼い犬らしく、今は少年の足元でこちら
を警戒している。

「なんだってんだ……一体……」

もうすぐ城なのにわけわかんねえ奴が出てきたと思ったら、今度はガキまできやがった。ペットはよだれダラダラだし。うわ、キタネ。

「メレムか。こ奴は強い。我が主の害になる為、容赦するな」

「トラフィム、君とは話してないよ。ボクは今お兄さんと話してるんだ。邪魔しないでよね」

二人は俺をおいて話し始めたが、雰囲気はあまり宜しくなさそうだ。

(仲間割れか……？結託されるよりはましたが……)

「メレム、貴様……どうやっても相容れないようだな……」

「ボクもホント、君にはうんざりしてるんだ。あの方に仕えるのはボクが一番なんだ！もういいよね……ボク我慢したよね……や

「っちゃうよ？」

（おいおい・・・いいのか？ほんとに同志討ち始めそうだな・・・。ならば今の内に城にいd・・・。「待ちたまえ！」ゲツ・・・みつかつた！またかよっ！）

一触即発の白ロブと悪ガキをしり目に、こつそりと抜け出そうと思つたのだが・・・見つかってしまったらしい。しかも声からして三人目。俺は声をかけられた方に素早くむきかえつたのだが・・・

「我が主がお呼びです。どうぞ中へ」

・・・大きな黒い鳥がいた。・・・なんだよ！今度は喋る鳥かよ！アラバ　タか？アラバ　タの守護者なのか！？・・・イカン　イカン、この状況は三対一。内、同志討ちで二人が戦闘放棄とはいえ、いつ戻ってくるか分からない。一瞬も気が抜けないぞ・・・。

「聞こえなかったのですか？さつさと中に入ったらどうですか？」

ん・・・？あれ、入っていいのかな・・・じゃ、遠慮なく。

「たっだいまあゝ」

「おかえり、リシュアン。無事 魔王 を倒したみたいだね。ごくろつさま」

城に入った俺を、朱い月が出迎えてくれた。いやあ、最後の最後で

足止め喰らったから、こいつの顔がトクベツ懐かしいぜ。俺の今の親ともいえる朱い月。今の家ともいえるブリュンスタッド城。あの死闘の末に、またここに帰ってこられて嬉しい。ウルコラク戦のあの時あきらめないで（・・・）良かったと思う。

だけど・・・

「ねえ、あいつら一体何なの？」

そう、俺がここに辿りつくまでの最後の邪魔。番人のようなあの存在。朱い月のことを『主』と呼ぶほどの敬愛。まさか・・・コイツ困ってるんじゃないだろうな・・・。

「ふむ・・・なにか失礼なことを考えていないだろうか。まあそれは置いておくとして、あの子たちは休憩の時の戯れで、数年前に拾ってきたんだよ。そして私の眷族にした。こないだ君が帰ってきたときに会わなかったのは、まだ覚醒前だったからね。まだそこ（死徒）までは至ってなかったんだ」

「眷族・・・要するに死徒ってこと？」

「そうだ。君も死者リベング・デッドは見たと思うが、素質ある死者は数年の時を経て死徒になる。三人ともまだ成りたてだがね、なかなか素質がいい」

「なるほどね・・・分かったよ。それで、魔王 ってのは墮ちた真祖のこと？」

「そつだ。私と星できめた。あれは排除の対象であることも」

「そつ。分かったよ。じゃあ俺は「主様あつ」」

『バフツツ!』

「グハツ！」

「・・・なんて言うか、かなり懐かれてるね・・・」

「・・・ああ」

部屋に戻って身体を休めようと思ひ、そのことを朱い月に言おうと

した時、さつきの少年がオリンピックピック選手真つ青の走り幅跳びをみせ、砂場がわりに朱い月にダイブした。あれだけの衝撃はかまえていないと厳しいだろう。

実際朱い月むせてるし。

「メレム、我が主から離れる！」

「うるさいなあトラフィム！主様はいいって言うてくれるんだ！ね！主様！」

「あ……ああ……」

なんとというか、ご愁傷様だ。朱い月は少年の意志に反して苦手なように、顔には苦笑いがはりついている。修行という名のフルボッコで、気に食わないもの（俺）をぶっ飛ばしてたあいつが懐かしいぜ。え？今は仲いいよ？

「なあ……朱い月。なんなんだ、そいつら？できれば紹介してほしいんだが……」

「あ、ああ。そうだな、紹介しよう。まずはこの子がメレム・ソロモン。ある村にいたのだがな、気まぐれで連れてきた」

「よろしくねっ！」

十歳くらいの男の子がメレム・ソロモンね。まあ目が輝いてますよ、キラッキラに。なんだろうね。

「あとで殺しあおうねー！」

・・・ワオ！斬新なあいさつ。

「で、その隣がトラフィム・オーテンロッゼ。私の最初の従者だよ」

「私がトラフィムだ。真祖よ」

最初に出てきた白ローブの三十位の男がトラフィム・オーテンロッゼか。感じ悪いな・・・

睨んでくるし・・・

「こら、トラフィム。そう睨まないことだ。彼は私の最初の友人だよ」

「つつ！！・・・はい。分かりました」

「・・・何だろう。ただの警戒が憎悪を含んで一層激しくなったんだが。」

「で、最後の彼がグランスルグ・ブラックモア。一度死合いをしてね。その後しばらくして死にかけた彼を拾ったんだ。魔術師でね、研究に付き合ってもらっている」

すると、大きな鳥が変身し、半人半鳥の亜人になったかと思うと、

「グランスルグ・ブラックモアだ。以後宜しく」

アラ スタがグランスルグ、と。・・・正直、今の形態ガッチマンにしか見えんのだが。ネタなのか・・・？これで『科学忍法火の鳥だ！』とかいうものならどうしていいのか分からない。

しかし正体はガッチ マン・・・ではなく魔術師なのか。ということとは魔術がある世界・・・に今俺はいるらしい。真祖 ヴァンパイアなんていうオカルトじみた存在が居ることで覚悟はしていたが・・・。イエ がいたことで前いた世界とは近い世界ということは確認していたけど、どうやら『近くて遠い、しかし絶対に違う』世界ということか・・・。

「そして彼が最初の真祖。私の友人、リシュアン＝ブリュンスタッドだ。グランは知っているとおもぅがね」

「ん・・・ああ、リシュアン＝ブリュンスタッドだ。宜しく」

朱い月に紹介されて、その流れであいさつする。朱い月には悪いが、正直この三人とはかかわり合いたくない。一人は会った時から睨んできて、一人は目がキラッキラの殺る気満々。拳句の果てに一番まともそうなのがガッチ マン。

・・・うん、さっさと退散しよう。

「ああ・・・悪いけど、疲れてるからこの辺で。研究頑張ってる」

「ん・・・君はお疲れだったね。引き留めて悪かったな。じゃあまた」

朱い月にことわって、すでに勝手知るこの城の自室に寝るために向かう。ようやく柔らかいベッドで寝られる・・・最近硬い石の床や木の枝とかだったもんなあ・・・

そうして、これからの至福のひと時をありがたがっている

「待ちたまえ」

ちっきの白ローブ、もといたラフィムが声をかけてきた。

七話 三従者（後書き）

まいどまいど・・・

月曜日に更新する、とっておきながら、火曜になってしまいました。

いや、本当にすいません。

見捨てないでほしいです。

そんなわけで、お話としましては朱い月に仕えた三人の死徒の登場でした。

は・・・話し方がわかんっ！！！！

以前のあとがきでも述べたように、死徒27祖はこの小説では定義が難解なので、独自解釈をさせていただきます。

故に、まだこのときは『死徒27祖』という冠位は出て来ません。来ないでしょう。来ないでくださいお願いします。

だって『死徒』27祖』なのに、“真祖”の朱い月が第三席に座

っているんですよ？どうなっているのかわかりません。

正直力量不足です。申し訳ありません。

次の更新としましては、来週月曜日が海の日で休み。

故に、某友情・努力・勝利の漫画雑誌的には土曜更新なんでしょうが・・・

私のネット環境では土曜更新が見込めません。故に、今週金曜ないしは、遅くとも来週火曜には更新できるように努力したいと思いません。

今度は締切守れるように・・・頑張ります。

PS・今日、大学に向かう途中徒歩のおじさんを追い抜かしたのですが、そのおじさんが着ていたシャツのバックプリントが

明日は『水』曜日

でした。

火曜日しか着れないシャツに需要はあるんでしょうか？

八話 トラフィム・オーテンロッゼ（前書き）

kamayan30様、感想ありがとうございました。

以前に感想をくださった

通りすがり様

you様

マリイ愛してるううう！！様

狐唄様

遅くなってすみません。感想ありがとうございました。

金曜日更新です。海の日やっふい。

今回は主人公しゃべりません。ええ、一言も。

では、どござー！

八話 トライフイム・オーテンロッゼ

私が主、ブリュンスタッド様と出会ったのは今から数年前になる。

5歳の時に賊のせいで親をなくした私は、生きていくことが困難になり途方にくれていた。助けてくれる人はおらず、食べるものもない。家にあつたものは悉く略奪され、もはやのたれ死ぬのを待つ他なかった。

そんな時、空腹で動けなくなり死にかけて私を救ってくれた人が居た。魔法使いと名乗ったその人は、何も無いところから神秘を生み出し、その力で私を生かしてくれた。それが私と『魔術』の出会い。十年程その人と行動を共にし、その人が使っていた『魔術』に触れ、『この力があればどこだってやっていける、自分のやりたいことができる』と子供心に思い、必死にその人に教えを請うたのは、今もなお私の記憶に色あせずに残っている。

その人と別れた後、私は自分の魔術を追い求め始めた。材料からなにから全て一人で集め、神秘を研究した。毎日が楽しかった。時には人を救ったし、自分の我がままを通したこともあった。あれほどまでに充実していた日々を送っていた魔術師はそうはいないだろう。

そうしてさらに魔術を追い求めること約十年

忘れもしない、あの日になった。

その頃の私は魔術師としてそれなりに成功していた。神秘を追求し、力を欲しながらも魔術師の悲願である。「への到達に明け暮れていた。『自分の力も相当付いてきた』と、自信をもって言えるくらいに私は成長していた……。はずだった。

旅を続ける中で宿をとろうと立ち寄った町。異変に気がつくのにそれほど時間はかからなかった。人が人を襲っている。それも町のいたるところで。目に光のない者たちが他人の首を噛み、ある程度したら次へ。噛みちぎっているのではない。啜っているのだ、血を。

「狂っている

」

にわかには信じられない光景だが、ポーっとしているわけにはいかない。まだ生きている人もいる、狂人たちを倒さなければ。それにこんな光景、じっと見ていたいものなどではない。

相手に向かい攻撃の呪文を唱える。空中に書かれたルーン文字から魔弾が発射される。一体を倒してふと見ると、先ほど襲われた人は再び立ち上がったが、その目に光はなかった（・・・）。なんということだ。このままではマズイ、早期決着をしなければ・・・！

ただひたすら力をふるう。正義の味方を気取るつもりなどない。ただ、自分のために。救うのではなく、このような光景を見ていたくないだけ。元凶はなんなのだ。見つけ次第ぶち殺してやる。

人を殺した、という後ろめたさはすぐに消えた。相手は知能が低下し、残ったのは血をすする欲望だけのバケモノと割り切った。

「もうすぐだ・・・もうすぐ終わる・・・」

殲滅はあらかた終わった。今相手している個体を抜いて、後は片手で数えるくらいだろう。もう一息

「私の召使達に何をしているのかね？」

突然声をかけられた。脳内に纏わりつくようなドロリとした声。振り返るとそこには一人の男。

やばいやばいやばい！あれは決して戦ってはいけないものだ。直感が告げている。先ほどまでの狂人と、この男は比べ物にならないと動けない。不要に動けば殺される。濃厚な死のイメージが纏わりついてくる。

「私は今食事中なのだよ。あまり邪魔をしないでもらいたい」

「食事・・・だと・・・？」

恐怖を振り払い、かすれる声で尋ねる。もし自分が思っていることが正しいのなら・・・

「血だよ！幻想種たる真祖のこの私の糧になるのだ。人間共も本望であるっ？？」

・・・異変の原因はコイツだ！ゴミを見るような眼で町の人たちを見て、それこそ人間を食料、家畜扱い。真祖だか何だか知らないが、何様のつもりだ。こいつは気にいらぬ！

震える膝を必死に抑える。否、先ほどの光景の発端が目の前のコイツであると分かった瞬間、震えは止まっていた。さっきまで感じていた実力差も忘れて怒りに身を任せ、自分が持てるだけの魔力を右手に込める。出し惜しみは無い！

「くらえっ！！」

『ゴウッッ！』

魔力によって生み出された光の渦がバケモノを飲み込む。油断していたあいつはろくにガードもとっていなかった。完全にきまつたから、もう後の心配はいらぬだろう。いきなり最大火力で攻めてやった。

だが、現実は無常だった。後のことを一切無視した私の攻撃は、奴に傷つけることすら叶わなかった。自分の攻撃が全く

効いていないのを確認したと思ったその時、奴がその口角を釣り上げたかと思うと、

『ザシユッッ』

「なっ……」

……わけが分からなかった。なぜ自分の胸から手が生えているのだろう。

『ガハッ……』

生ぬるい液体が口までせりあがってきて、鉄味の嫌悪感からたまらず吐きだした。

「ククク……お笑い草ですね、魔術師……私の邪魔をしたあなたの血など要りません。そのまま無残に果てるがいい」

後ろから声がそんな声が聞こえてきたかと思うと、胸から手が引き抜かれた。そのままなす術なく崩れ落ちる。

身体から流れ出る血は留まることを知らない。たちまち自分の周りの地面は赤く染まった。息苦しく、足には力が入らない。今目の前にいる存在は決して許せるものではないが、あれほどまで感じた殺気、自分の渾身の一撃を難なく防いだ実力、そのどれを取っても自分が相手出来るものではなかったのによやく気がついた。自分が今まで信じてきたもの、培ってきたものが何一つ通用しなかった。

(何をやっていたのだ私は・・・)

見て見ぬふりは出来なかった。しかし今まさに死のうとしている。なんでもできると思っていた魔術も意味をなさない。自分が気の向くままに生きる為に身に付けたものは、子供のころのような状態にならないようにつけた力は、正しい選択ではなかったのだ。

そんな絶望に身を染めている時、

「・・・お前か、私に泥を塗るおろか者は」

「な・・・何故貴様がここに・・・私たちを捨てたお前が一体何の用だ！貴様が私たちを放つたのだろう？ならばその後私が何をしようとして貴様には関わりないはずだ！」

「言つたろう？貴様の行いは看過できん。それに、そこに転がっておるものには面白いものを見せてもらったからな」

声がる方の目の端に、いつの間にか人が立っていた。後ろ姿しか見えないが、全身から神々しさがにじみでている。

その輝きに、自分の身体の痛みさえ気にならないほどに魅了された。神秘を追求してきた自分だが、何を勘違いしていたのだろうか。そんなものアレの前では見聞にも等しい。

「くっ……どこまでも身勝手な奴め……！だがまあいい！私の最終目的は貴様を殺すこと！それがただ早くなっただけのことよ！私は貴様 生みの親 を許さない！」

「………いいことは……それだけか？」

「な………に………?」

「言いたいことはそれだけか、と聞いているのだ」

「っ！無論!!行くぞ、王よ！」

「そうか……」

次の瞬間、全ては終わっていた。一瞬の衝突のあとその場にいたのは、首を狙った一撃を寸でところで止めている元凶と、右腕を、肘まで相手の身体に埋め込んでいる『王』と呼ばれた人物だった。

「お前が抱いている感情ももつともだろう。私は確かにお前を生み

出し、そして自由にしたと言えは聞こえはいいが、お前たちからしたら捨てたも同然。殺さなかったのは、私に命について教えてくれた者が居るからだ。だが、私の都合で振り回したのは事実。お前のようなものの考えは甘んじて受けるとする。私の業は私が受け止める」

私が求めていたものがここにあった。何人にも、どのような状況にも負けない力と意志。さらにはこの世のものかと思まがうほどの神々しさ。理想を体現したかのような人物だった。

なぜ・・・！もう少し早く出会っていれば・・・。だがもう遅い。血は未だ流れ続け、息はもう絶え絶えだ。そしてゆっくりとその目を閉じ

「おっと。君にはもう少し生きてもらおうよ。興味深い力だったからね。人ではなくなるが・・・悪いが君の意志はない」

そんな声が、最後に聞こえてきた。

「生きて……る？」

目が覚めると、見知らぬ部屋だった。自分は何故こんなところに居るのだろうか？たしか自分は……

『ズキンッ』

「グ……あつ……！」

頭が痛い。それに呼応するように身体も痛み始める。全身の血が沸騰するような感覚。痛いし熱い。

・・・朦朧とする頭で考える。目を閉じる前までの状況を必死に思い出す。自分は死ぬ寸前だったはずだ。ならば何故生きているんだろうか。痛みはつらいものがあるが同時に生きているというたしかな証拠である。

それともまさか、ここはすでに地獄でこれからこの痛みが続くのだろうk「おや・・・まさかもう目覚めるとは。適正があったにしろ少し早すぎるな・・・。まだ痛むだろうよ、なまじ力がある分拒否反応が強いからな。もう一口飲んで休むがよい」

そこにはあの人が立っていた。自分の新たな目標であり憧れ。もう二度と会うことのできない自分の不運さを思わず呪わせた存在。王と呼ばれたその方は、初めて会った時と同様の神々しさを放っていた。

そしておもむろに自分の手首を切ったかと思うと、その腕より流れる血を私の口に落とした。口の中から全身に広がって行く『ナニカ』を感じながら、私は無性に休息を訴える体に身を任せた。

目が覚めると、見知らぬ部屋だった。とりあえず今の状況を確認する。見知らぬ部屋、見知らぬ天井、高価そうなベッド。なにかセリフを言う機会を逃した気がするが、あまり気にしてられない。部屋を出る。長い廊下のようなのだが、これほど大きな住居は見ることがない。本当にここはどこなんだろうか……？

「人の家を勝手にうろつくとは……あまり穏やかじゃあないね？」

「なっ……」

いつの間にか後ろに彼が立っていた。考え事は確かにしていたが、周りへの警戒は解いていなかったはずだ。なんせ今身につけているものは布のみ。部屋を一度見まわしたが、自分の荷物やマントはなかった。魔術を行使しようにも、媒体と十分な魔力がないから不可能、つまりは丸腰。

いくら懂れているからって向こうが穏やかに応じてくれるかどうか

なんて分からない。殺気はまだ感じられないが、先ほどの言葉だとこの人は怒っていらっしやる様子。さて・・・どうしたものか・・・

「考え事は終わったかね・・・？さつきはあのようなことを言ったが、取り立てて君をどうこうしようとするつもりはない。せっかく死徒にまでして助けたのに、殺してしまっただけは意味がない。出歩いていたことも・・・まあ前例があることだし・・・（あの部屋で寝ると探検でもしたくなるんだろうか・・・ブツブツ）」

目の前の人物は、こちらに敵対の意志がないことを告げてきた。しかし何かをせびられるだろう。自分の命は彼に救われたらしい。魔術師の基本は等価交換だ。自分は命につり合うものは命しかないと思っっている。それほどのもの（命）の対価に何を要求されるのだろうか。

気になる単語が聞こえてきたが、それよりも自分の運命は実験材料かなにかか・・・そんな予想される自分の暗い未来を想像している私の目の前で、一人勝手に自分の世界に入っていくブリュンスタッドさん。

「は・・・はあ・・・」

なんて生返事してしまった私はきつと悪くないと思う。そ、それよりも……!

「あの……私の処遇は……」

「ん？君はすでに私のモノだ。あの宙から出した力、あれを私に教えてもらいたい」

どうなるんでしょうか？と続けようとして遮られた。命の対価として請求されたのは魔術を教えること。どうやらこの方は魔術を知らないらしい。

「ま、魔術ですか……？」

「あれは魔術と呼ぶのか。……理解した。そうだ、それを教えてほしい」

願ってもないことだ。すでに私は魔術師としての秘蔵を守るつもりはない。魔術を教えることでこの方のそばに居られるのなら、この方と同じトコロにいけるのなら……!

「はい、分かりました。我が知識、貴方様に預けましょう。我が名はトラフィム・オーテンロッゼと申します」

迷いは、ない。

「そうか・・・私は朱い月のブリュンスタッドだ。存分にその力を発揮するがいい。ここは我が千年城ブリュンスタッド、歓迎するぞ
トラフィムよ」

これが、我が主との生活の始まりであった。

主従関係を結んだあの後、いろいろな説明を受けた。衝撃を受けた

のはやはり自分が人では無くなったこと、ブリュンスタッド様より数段階高位の種族であることだった。

魔術師の時から人とは逸脱した存在なのは自覚していたからそこは良かったのだが、問題はもう二度と光の中を歩けなくなったということと、肉体の保全の為に血を飲み続けなければならないことだった。自分が町を襲っていたあの狂った男と同じ存在になったことについては流石に眉をしかめたが、「自分を強く持てばああはならない」と言われた。

すでに人間とは違うこの身だが、世界を支配して王としてふるまい、人間を家畜同然に扱えるほど自分が偉くなったとは思えない。自分は自分だ。真祖と呼ばれるあいつらは基本的に性格が悪いのだろう。ブリュンスタッド様の求めた条件を満たせなかったから捨てられたと言って、ひがんだり自棄になったり。

代わりに永遠の自由を手に入れられたのだから、等価交換としては充分ではないだろうか。・・・気に入らない。自分がこの世で一番偉くなったかのように振る舞う真祖共が気に入らない。人はお前たちの玩具ではない。この気持ちがあるうちは、私は血に落ちることはないだろう。・・・いつか、絶対滅ぼしてやるぞ真祖。

この世にいる真祖はただ一人、ブリュンスタッド様さえいればいいのだから。

ブリュンスタッド様が高位の種族は逆に納得してしまった。だが、高位すぎて逆にその命が危ういのだとか。世界の抑止力を受けるらしい。それから逃れるために生み出されたのが真祖たち。だが、そのことについてブリュンスタッド様は自ら後始末をつけていた。

そう、悪いのは生み出したブリュンスタッド様ではなく暴走する真祖共なのだ。私が目を付けられたのはルーンの魔術。ブリュンスタッド様は魔術の神秘で研究をさらに進めようとしたのだった。・・・ならばこの知識は惜しげもない。存分に使っていただきたい。

一度、完全体を生み出したらしい。リシユアンというその個体は、最初にして現段階で最高傑作だった。しかし、その肉体に宿った魂がブリュンスタッド様の転生を妨げた。そ奴は他の真祖と違い我が主に敬意を払い、数年間共にあったそうだ。

その中で我が主とそ奴は友と呼び合う仲間になったそうだが、数年前に城から去ったようだ。・・・正直信じられない。我が主が自分の生み出した、いわば下僕にも等しいただの真祖を、友と認めたいのだから。

それからの生活は幸せだった。日の光の下は歩けなくなったが、それでも満ち足りた日々だった。自分の魔術の研究の成果を惜しげも

なく伝え、ブリュンスタッド様と共に研究をし、たまに魔王狩りをする。途中メレム・ソロモンとグランスルグ・ブラックモアという我が主の従者が増えた。

メレムの方は・・・従者としての在り方が許せん。ブラックモアは・・・鳥だ。一度鶏をバカにしたら死闘にまで発展した。城の一部を壊したら我が主に怒られたのは、いい思い出だろう。そんな奴らと魔術でのサポートをしながら、我が主と研究を続けていた。

そして今日、侵入者と思つて迎撃に出てみればそ奴がリシユアンだった。多くの真祖たちの中で『ブリュンスタッド』を名乗ることを許された唯一の存在。

・・・気に入らない。我が主と瓜二つの容姿、敬意を払わない砕けた口調、我が主を呼び捨てにし、互いに友と呼び合う。ただの真祖が・・・。

・・・百歩どころか一億歩譲り、我が主を友と呼ぶのは許そう。ブリュンスタッド様も容認しているから。だがしかし。しかし、だ・・・。

なぜ友と呼ぶのならブリュンスタッド様の研究を手伝わないのか？

なぜ完全体ならブリュンスタッド様に全てを捧げないのか？

なぜブリュンスタッド様が生き続ける為に協力しないのか？

そう

だから、

「待ちたまえ」

こいつは真祖のなかで一番気に入らないのだ。

八話 トラフィム・オーテンロッゼ（後書き）

なんという・・・主人公出ないのに一番文字数多い。

今回はトラフィムさんのお話。正直いいです。ほぼ全て捏造です。オリジナル話です。

トラフィムさんの性格は、「頭は悪いがバカではない」ということで・・・

・・・表現しきれませんでした。型月ファンの皆様すいません。

次回更新につきましては、再来週月曜・・・努力目標です。すいません。正直わかりません。気長に待っててください。

感想、お待ちしております。

九話 心のかたち、人のかたち（前書き）

お久しぶりです。すぶれえです。

本当に、遅れてすみません。

では、このくまにしよう・・・さびぞー！

九話 心のかたち、人のかたち

「待ちたまえ」

・・・キレテモイデスカ？

白ローブに呼び止められた。何なんだコイツ。俺の安眠を妨害する気なのか。あの暖かくも柔らかい女性の柔肌のような包容力をもつベツドへ行くのを妨げようというのか。

「何だ。くだらん用だったら殴るぞ」

「私に従え」

「・・・は？」

「私に従えと言っているのだ、真祖」

「いや、意味分からのんだけど」

いきなり何言い出すんだ、コイツは。何故コイツの言いなりにならねばならんだ。あれか？『ウホッ』の人なのか？ならばこの顔か。朱い月の代わりにそっくりさんの俺で満足するんだなそうに違いない！

「なぜ従わない！貴様は我が主がどうなってもいいのか！貴様がその身体を差し出せば主の研究もさらに進むのだ！」

・・・なるほど。コイツは未だに成果が出せていない朱い月をほっとしてのうのと旅に出ている俺が気に食わないわけだ。確かにこのままじゃあいつは世界から排除される運命にある。だけど・・・

「・・・ああ、そういうことね。別にあいつに直接頼まれたわけじゃねえし、むしろ魔王狩りの方をあいつに頼まれたんだしな。それにあいつならどうにかしそうだ。魔術師のお前らも手伝ってんだろ？ならそれでいいじゃん」

そう、別に俺は必要ないと思っっている。俺をサンプルとして使いた
いなら初めて出会った時に問答無用で襲いかかってきただろうし、
今までだってそうするチャンスはいくらでもあったはずだ。わざわざ
俺の状況説明や特訓なんてしてくれるわけがない。

「魔王など！我が主の命の方が何倍も大事に決まっておろう！」

「だ〜から！あいつに頼まれたって言うてんだろ！バカなのか、
お前？」「くっ・・・たしかに『命』をイノチと読まずメイと読めば
そうなるが」メタやめろ！・・・俺はやれることをやってる。
それでいいだろ。今だってお前の独断だろ？危なくなったら自分で
言いに來るって、アイツ」

「やはり・・・貴様とは相容れないようだな・・・」

「甚だ不本意だがそれだけは同感だ」

.....

.....

.....

.....

「……やめだ。もう話は終わりか？俺は眠いんだ」

「……貴様の顔などこれ以上見たくもない。早々に消えるがいい、真祖」

一触即発、睨みあう真祖と死徒。しかしそののち両者ともなく殺気を霧散させた。お互いがお互いをここで消すことはデメリットの方が大きいと理解していたからだ。

リシュアンにとって目の前の白ローブは、魔術によって朱い月を確かにサポートしている存在であり、『抑止力』によって朱い月が消えることは望んでいない。それになにしる今のリシュアンは……眠い。いくらチートボディとはいえ、遠征がえりに死徒と戦いたくない。

トラフイムは目の前の奴が唯一の対等足りうる存在として自身の主が気にかけているのを知っているし、目の前のが死ぬと魔王狩りに今度は自分たちが出なければならなくなる。そうなってしまうえば、不必要に時間をロスしてしまう。

さらに　　これが一番大きい理由だが、城内で戦えば主に怒られるから。表に出ればいい、と思うかもしれないが悲しいかな、血が上ってそこまで頭が働かなかった。

「ねむ・・・あいつ、最後まで妨害しやがって・・・」

『ドフッ』

何カ月ぶりに自室へ戻ってきたリシュアンは、病人のようにベッドへと飛び込んだ。そのまま布団の気持ちよさにまどろむ。魔王狩りの遠征、従者三人衆との邂逅、トラフィムとの問答により疲れていたのは無理ないだろう。

それに魔王達による人狩りで、旅に出ていた当初は出来ていた、宿を取るという問題以前に、吸血鬼の噂のせいで町になかなか近付けなくなってしまうた。故に、最近はや硬い地面の上や木の上で寝ることしかなかった。

本来睡眠がほとんど必要ないチートボディをもち、朱い月の一週間以上不眠不休の戦闘特訓という名のいじめを受けたこともあるリシユアンだが、基本的に規則正しく夜は眠っている。こちら辺は人間であったころの名残だろうか。

「あいつが消えるはずがない……。あいつは俺よりも、リミッタの外れた魔王よりも強いんだ。誰にも、世界にも負けはしないさ。……」

トラフィムの心配を真っ向から打ち砕くその言葉は誰に充てたものか。つぶやくその言葉は小さく消え、後に部屋には小さく寝息が聞こえるだけだった。

当初の予定では、次の魔王狩りまで少し時間をおくことにしていた。何しろ命がけだ。あせって倒しに行つて、やられてしまえば元も子もないし、ゲームのようにリセットボタンがあるわけでもない。

でも帰ってきてから次の日からのあの空気には、耐えられなかった。

『キッ』

白ローブが絶えず睨みつけてきたり、

「死合しようよ！」

ガキンチヨが勝負を仕掛けてきたりするにも関わらず、

『プイッ』

ストップパー役だと信じていたガツチャマンは我関せず。はあ……。。

「待つてよおおおおおっ!!」

「ちいくしよおおおおおっ!!」

うざったい。こんなところに居たくない。何なんだこいつら。今はあのがキンチョに追いかけてまわされてる。休んで体調整えるには、なんにせよがキンチョの申し出は断らなきゃなんのに、休んでいるはずなのに今現在進行形であの無邪気なボーヤから逃げ回って体力使わされている。こんなんじゃ話しにならん。

というわけで、自分の部屋にこもって居よう。俺の部屋は鍵がかか
る。扉を壊して朱い月に怒られるような真似までして俺に関わろう
とはしないだろう。一度こもってしまえばこっちのもんだ!フハハ
ハハハッ!!

・・・なんて思っていた時期が俺にもありました。

「遅かったな」

目の前には俺のベッドに座ってふんぞりかえっている白ローブ。なんで居るの……？仕事しろよ。

「出ていけ。ここは俺の部屋だ。さっさと朱い月のところにも行け」

「そもいかん。貴様が全ての魔王を倒した暁には、その身を我が主にささげ、研究に身をけずると誓うまではな」

……そんな口約束を何故しなきゃならんだ。だいたい魔王なんてのは元々吸血衝動に落ちた真祖だ。つまりそれが居なくなるのは皆が皆凄く血が嫌いで頑張っただけで飲まないうようにしている真祖しか居なくなっただけ、真祖そのものが消えた時だ。そんな血が嫌いな真祖はほとんどいないから、いつか飲まれるか、その前に封印として眠ることになる。

真祖が消えるってことは存在がなくなっただけのことであり、それはつまり朱い月が研究をしなくてもよくなったということだ。

その・・・つまりは。

コイツが言っていることは意味がないのだ。

(バカなのか・・・？こんなサポートで大丈夫なのか・・・アイツ？)

こんな頭の弱そうなやつがサポートで研究が果たして進んでいるの
だろうか？激しく不安になる。コイツに何言っても無駄だろうから
黙っているが。適当に了承して追いつるのがベターだろう。

「分かったからどけ。ここは俺の部屋だ」

「言ったな？ならばここに滞在している間サンプルとして血を貰おう。
本来なら全身、と言いたいところだが、その程度にしておいて
やろう」

そう言うなり奴は俺の頸動脈を手刀で狙ってきた。ちくしょう！裏
目った！また逃げるしかねえじゃねえか！俺の後ろはドア、行くし
かねえ！

「散!!」

『ボタンッ』

ダッシュ!!

「あっ!見つけた!」

廊下に出るなり、さっき撒いたガキンチョまで追ってきた。ちくし
よおおおおおっ!!

・
・
・
・
・

・
・
・
・
・

・
・
・
・
・

・
・
・
・
・

・
・

・

「はあ……はあ……」

『ボタン！ガチャッ』

なんとかトラフィムとメレムを撒いて、再び俺の部屋に戻ってきた。今度はあいつらが入ってくる前に鍵をキッチンとかけたから大丈夫だろう。もう安心だ。これでようやくあのベッドで寝られる。妨げる輩は居ない！さあ、ベッドよ。お前のそのフワフワな生地を

「お疲れのようだな」

「なんでいるのおおおおおおおっ！？」

「そういきりたつな。私は君に聞いてみたいことがあってね。君の活動時間は我々とは魔逆の日中と聞いているから、この機会を逃せばいつ会えるかわからんからね。トラフィムとメレムも居るし……」

「

そういいながら達観したように遠くを見つめるグランスルグ。どこか哀愁を漂わせるその姿に俺はコイツの苦勞を感じ取った。

「そうか・・・お前も苦勞してるんだな・・・。俺、お前のことは好きになれそうだ」

「分かってくれるか・・・。あの二人はどうもこう、な・・・。我が主に仕えるその忠心が暴走気味で・・・」

「そうか・・・いや、まあ、頑張れとしかいえないんだが・・・」

「分かっている。この気苦勞を分かってくれるだけで私は満足だ」

「・・・」

そのまま沈黙が流れる。だがその空気が気まずいものではない。同じ思いを体験した者同士共感したからこそ、あえて言葉で語る必要もない。俺はそんなことを考えていた。きっとコイツも同じだろう。

だが、このまま黙っていたんではコイツが俺の部屋に来た意味がない。そろそろ話してもらおうか。

「それで？俺に聞きたいことってなんだ？」

「ん……そうだな。それを私は聞きに来たのだった」

そう言い、居ずまいを正すグランスルグ。自然とこちらの背筋も伸びる。

「……なぜ、君は魔王狩りをしているのだい？」

真剣な口調で問いかけられた。朱い月に頼まれたから、なんて回答は求められていない。

『なぜ俺は他の真祖と同様に独立して好き勝手に暮さないのか？』

グランスルグはそう聞いてきている。

……なぜ？そうだ。なぜ俺はこんな危険なことを続けようとしているのだろう。つい最近まで俺は普通の学生だったはずだ。日本と言う平和な国で、のんびりと変わり映えのない生活をしていたはず

だ。戦闘なんてない、命の危険なんて早々にない暮らしで、特に武道などで身体を鍛えていたわけでも、喧嘩に明け暮れていたわけでもない。

そんな俺が、どうして刀なんか持って、凶暴化した手のつけられないような魔王相手に戦っているのか。漫画の主人公や二次小説の主人公みたいに自分から戦いに飛び込んでいくような真似をしているのか。そもそも俺は死にたくなかったから、死ぬのが怖かったから、目覚めて間もないころ、知らない土地で一人でも生きていけるように朱い月に修行に付き合ってもらっていただけだ。

決して今みたいな力の使い方をしようと身につけたものではない。死にたくないから身に付けたのに、どうして死に行くようなことをしているのか。

この間の戦闘だって本来なら負けて死んでたはずだ。こうして生きていることすら奇跡に近い。なぜまた同じようなことをしようとしているのか……。

「その様子だと、君も良く自分のことが分かっていたようだね。まあ、気持ちの整理がいたら理由を聞かせてもらおうよ。じゃ、また」

そうして、グランスルグは出て行った。……厄介な問いかけをし

ていったものだ。

・
・
・
・
・

・
・
・
・
・

・
・
・
・

・
・
・

・
・

・

・ ・ ・ むずかしいことは良く分からん。それこそ自分の気持ちでさえもあいまいだ。それでもわかっているのは、自分の今の一番は死にたくないって気持ちと、朱い月が大切な友達だったことだ。

・・・ああなんだ、簡単なことだ。もつと強くなって、アイツと肩を並べられるようになるだけだ。
そうすれば俺は死なない。アイツも死なない。俺は自分のやりたいようにやる。たぶん俺が朱い月に抱いている感情は子が親を思うそれとほぼ同じだろう。

あいつに貰ったこの身体が、この身体に俺が宿ったことで退屈していた日常から抜け出したこの心が、アイツを親と、友と、主と、そう呼んで慕っている。

ならば、その気持ち赶赴くままに行動するのが人じゃないだろうか？

4日後の日中、城の前では一人の主とその従者が向き合っていた。

「もう行くのかい？」

「ああ。十分休んだし、魔王が暴れてるのが情報で入ってきている。次の魔王狩りに行くよ。そのまま世界をまわってくる。長期になるかも知れんが、不死の俺たちにとっては関係ないだろう。お前のことだから心配ないと思うが・・・元気だな」

「そうか・・・すまないね。君は一度決めたことは曲げないだろうから止めないけど・・・近くに寄った時は顔を見せてくれ・・・君こそ元気で」

「誰に言ってる。これはお前が作った身体だぞ。並大抵のことではビクともしんよ」

「違う。ではない」

朱い月にかげられた言葉に、手を挙げて返す。短い滞在だった・・・。そしてすまない、君に・・・こんなに出発を急いだ理由を告げなくて・・・。そう、それは・・・

(君の従者たちの空気に、どうしても馴染めなかったから・・・！)

なんて、半ば冗談めいた別れ。共に永遠を生きる者。人ならばその身が朽ち果てるほどの時を会わないだろうというのに、この時俺とアイツは共に再び会うことを信じて疑わなかった。

そして

これが俺と朱い月の最後の会話だった。

九話 心のかたち、人のかたち（後書き）

再度お詫びを。

本当に遅れてすみません。

言い訳は試験のせい、ということでも・・・。

これから、夏季休業になります。

大学から更新している身としては、非常にめんどくさいです。更新
できません。

そういうわけで、これからもっと更新が遅くなると思います。

ですが、忘れることはありませんので。

気長に待っていただければ幸いです。

感想お待ちしています。

十話 勧誘、不穏な影（前書き）

こんにちは。また日数があいてしまいました。

活動報告にも書きましたが、70000PV並びに14000ユ
ーク、総合評価を666いただきました。

ここまで評価をいただけるとは思っていなかったので、すごうれ
しいです。

これからもがんばります。

では、閑話と言おうか、つなぎと言おうか・・・あまり進みはあり
ませんが、小休止。

そんな十話です。どうぞ。

十話 勧誘、不穏な影

「ここまでだ……。お前は少しやり過ぎた。もう寝ておけ」

「ちい……。何故だ！それほどの力を持ち得ながら、何故人などという下等種から隠れているのだ！我ら上位種の方がこの世界を支配するにふさわしいだろう！」

「……。別に俺は自分が人より優れているとは思わん。お前のこともな……。問答は終わりだ。じゃあな」

「くっ……。ま、待て！やめっ……。！」

『ザシユッ！』

・・・あれから数十年が過ぎた。魔王はほとんどヨーロッパを中心に分布して死都を造って勢力を伸ばしているから、必然的に俺が周るのはヨーロッパになる。何人か倒しているうちに経験も付いてきて、堕ちたばかりの初期の魔王なら討伐も楽にできるようになってきた。あの、初戦闘で響いてきた声は、あれから一度も聞いていない。

・・・この数十年で、いったい何人の魔王を倒したことだろうか。魔王が減らないということは、まだ朱い月の研究は終わっていないのだろう。それでも、最近は討伐した後は少し余裕があって、観光も兼ねながらの旅になっている。

ついこの間はヴェスヴィオ火山の噴火でポンペイが地に埋もれ、ローマにコロッセウムが出来たりした。

というか、生身でライオンやクマと戦うってどうよ？ 『死ぬまですっと』ってどんな無理ゲーだ。俺みたいにチートボディじゃあるまいに。

そう言えばライオン、良く連れて来れたな・・・クマもだが。

ちなみに俺にも勧誘が来た。何度も激しい戦闘をしているせいでロブはところどころほつれたり、破れたりしているからな。だが、これも勝手に持ち出したとはいえ、アイツから貰ったものだ。

いくらボロくなるうとも、手放す気はない。

そんな見てくれのせいで、金に困っている乞食だと思ったんだろうが、とりあえず断つといた。だるいし。

「平和だ・・・」

そう、平和なのだ。ここ数年は魔王を発見次第消しているので、吸血鬼の噂が広がりにくい。一つの町の住民が丸々消えても、はり病などとして処理されがちである。そんなわけで、俺も悠悠街中を歩けるようになっていた。

最近は堂々と剣闘士たちによる見世物や、競馬の原型とも言えるレースを見にいたり、町の奴らの食事会に招かれたりしたこともあった。・・・あれ？俺遊んでばかりじゃね？

だが、いいことばかりではなかった。やっていることは仲間殺し。やはり、真祖からは目を付けられていた。この間だって・・・

「君が《断罪者》か」

町を物色しながら歩いていたら、急に話しかけられた。一目見て分かる。目の前の存在は自分と正しく同族である、と。しかし、目の前の存在からも世界とのリンクが感じられることから、吸血衝動には落ちていないようだ。

・・・初めてじゃないか？純粋な『世界の精霊たる真祖』を見たのは。向こうから会いに来る、というのも今までなかったことだ。今まで魔王ばつか相手してて、真祖にはこっちからも近づいたことなかったしな。

なんにせよ、吸血衝動に耐え続けているまともなものも居るようで安心はしたが・・・聞き逃せない単語が聞こえちまった。

「なんだ・・・？その厨二臭い二つ名は・・・」

「《断罪者》リシユアン＝ブリュンスタッド。王によって初めて生み出された真祖であり、真祖の吸血鬼の中でもあの（・・・）王に付き従い、東洋剣を持って魔王並びに死者の殲滅にあたる。そして、我らの中でも吸血衝動が無い唯一の存在。・・・違うかね？」

なんてこつたい。こちらのことは調べ尽してあるらしい。だが、ならば何故こちらに出向いてきたのだろうか。

普段、真祖は己の強靱な力の大半を使って自身の吸血衝動を抑えている。よって年月が過ぎることに蓄積されていくソレは、いずれ自身の持つ力を越えるまでになってしまう。そうなった時、それが星の精霊たる真祖の『寿命』だ。

だが、この身体には吸血衝動が存在しない。故に、この身は正に不老不死であると共に、自身の力を無駄なところで使う必要がない。まあ、出力は星によって抑えられざるをえないのだが。

では魔王はどうか。こちらは吸血衝動にのまれた存在だ。『堕ちた』彼らは、星とのリンクが切れ、生命力の供給を失う代わりに、力の解放と血による生命力の強化を得る。吸血衝動に使っていた力を存分に振るうことができるので、同スペックながらハンデのある真祖では勝つことができない。

故に勝つことができるのは、星と契約した朱い月か、この俺しかないというわけだ。

・・・向こうもそれを分かっているはず。ならば、敵対したいというわけではないだろうが・・・あの厨二臭い二つ名は今辞めさせておかないと、後で取り返しのつかないことになりそうだ。

「合っているよ・・・。俺がリシユアンⅡブリュンスタッドだ。で・・・なんだ？大層な

二つ名付けやがって。その報告や世間話をしに来たわけじゃないんだろう？」

「いやはや。分かっていたがそこまで邪険に扱われるとはね。もう少し社交性を持った方がいいんじゃないのかな？」

・・・余計な御世話だ、と声を大にして言いたい。少なくとも、目の前の男が朱い月にたいして良い印象を抱いていないのはさっきのこいつの言い方で分かっている。

だがまあ、朱い月が、自らが生み出した真祖にやられるということはないだろう。アイツは俺よりも強い。

真祖が自身の『王』を嫌おうと、その存在を崩すことは出来ない。

ならば。唯一対抗できる可能性のある俺を引っ張り出したら？

そんな勧誘だろうか。・・・気が変わった。話を聞こう。

「話を聞いてくれるようだね。・・・君は魔王の討伐を王の命で行っている。それは正しいね？」

少しだけ警戒を解いて話しかけられる体制を取ると、すぐさま話しかけてきた。そうは言ってもものうのと過ごしているだけではないらしい。油断は禁物・・・ということか。

「ああ、そつだ」

最初はそうだったし、今もそうである。ただ、元人間ということもあって、魔王達に蹂躪されている姿は我慢がならない部分もある。今は観光のついで、と化しているが・・・わざわざコイツに言う必要はない。

「ならば王の命令に、真祖の討伐というのも含められているのかな？」

「な・・・んだと？」

「ばかな。そんなこと俺はあいつに頼まれてなんかいないし、そもそも俺は真祖に会ったのはこれが初めてだ。」

「だが実際、我らの派閥の何人かが討伐されているのだよ。魔王は自身の領地を動くことはほとんど無いし、君の噂も出回ってる。彼らは人間を蹂躪して地力を付けるので忙しい。王は命の研究でかかりつきりだし・・・こうなると疑わしい者たちで君ぐらいしか真祖を討伐出来る力を持ったものが居ないのだよ」

「なるほどな・・・。理にはかかってはいるが、それはハズレだ。お前らとは別に敵対するつもりはない。そちらがぶつかってくるというのなら別だが・・・」

「そうかい。ということは、私たちの仲間になってくれる可能性も

あるということかな？」

そうして、目の前の真祖はにこやかに話しかけてくる。顔に張り付いた笑顔がうそくさい。

仲間……。さっきは派閥という単語も聞けたことだし、真祖同士で同盟でも結んでいるのかも知れない。吸血衝動があるとはいえ、自身に強大な力がある真祖なら、群れることはないんじゃないかと思っていたが……。どうやら違うらしい。

「君の思っている通り、真祖同士でも協力関係にある者もいる。私もその一人だ。我らとしては是非君にも入ってもらいたいのだが……。どうだろうか？」

……。どういうことだ。急に勧誘されたぞ。真祖の会……。か。だが、俺の身体は異常だ。真祖にも魔王にも当てはまらない。一番近いのは朱い月だろう。

そして、真祖・魔王たちは一部を除いて、総じて朱い月を嫌っている。俺がそこに入るのは不可能だろう。

「嬉しい申し出だが、断らせてもらおう。俺はまだやりたいことがあるんでな」

「王と敵対する危険性を考えているのかい？なら心配はいらないよ。我らは保守的だからね！どうだろう、入ってはくれないだろうか？」

今度は笑顔をやめて嘆願してきた。・・・最初からこう頼めばいいのに。

だが、まだ勘違いしている。真祖が朱い月と敵対なんか絶対にするだろうさ。というか、今がほぼ冷戦状態じゃないか。理由はそれだけじゃない。過去に討伐した魔王のなかには、俺の襲撃を喜んで迎えた奴もいた。

吸血衝動のない、完全体（俺）の血を飲むことで、自らもソレ（完全な不老不死）に近づこうとする魂胆で、俺を殺して、そのまま保管して生け捕ろうとする魔王もいた。

真祖だって、出来るならば吸血衝動とオサラバしたいはず。いずれにしても、俺が孤立して狙われるのも時間の問題だ。

「悪いが気持ちは変わらない。これまで通り不干涉とすることで落ち着いてくれ」

「・・・君は自分がどれだけ危うい立場に居るか分かっているのかい？」

穩便に済ませようと思つたら、どうやら奴の期待した回答じゃなかつたらしい。見る、そんなに睨んじやって。お兄さん、目つきの悪い人は嫌いだな。

「朱い月は生み出した真祖を、自分に適性がないことを知ると世界に送り出す。その姿勢は多くの真祖の反感を買い、それに反発して魔王になる者もいるほどだ。その朱い月の最高傑作にして、真祖の希望である君が王に付き従っているのが、我々には考えられないのだよ！なぜ、一度捨てられた身なのにもかかわらず、王に対抗できる唯一の力を持ち得ながら、アイツと共にあるのかね！？」

言っていることは分かるんだがな・・・納得は出来ないわ。それに、俺一度も捨てられてないし。

「・・・そうさ。君のその考えが我らの恐怖をさらに煽る。創造主である王はなにか我らの身体に仕掛けているかもしれないし、君は我らを単独で相手取ることが出来るだろう。君と王の二人同時に対しては我らはなすすべもない。これに恐怖せずどうすればいいのだ！・・・我らは考えたのだよ。王と容姿の似る君はそれだけで嫌悪する真祖もいるが、その特異な身体には我らの絶望に対する希望がある！君のその特異な血をいただく代わりに仲間を招き、見返りに魔王狩りにも付き合おう、と・・・以上が今更になつて私が君に接触した理由だよ」

なんとまあ……。随分と人間臭い精霊様だ。気持ちは分かるがな。
・・・猛獣は檻に入れるか鎖につなぐのが一番人にとって安心できる。

だがその……。魔王は吸血衝動に耐えられなくなったんだから、俺の血を真祖共が吸えば、それだけで魔王減るんじゃない？

ただ確証がないし、中毒性で断続的に吸われるようになっても困る。
・・・随分と分の悪い賭けだ。

「そうかい。だが断る。今まで通りでいい。団体行動に縛られるのはもうこりこりだ」

ここでも世間体を気にしなきゃならんのか。こんなんじゃ転生前と変わりない。『派閥』とやらに顔をだしたらいろいろ言われそうだし、今までの自由な暮らしでいい。

「そうか……。交渉は決裂、ということだね？」

「そんな殺気を出しなさんや。それともここ（街中）でドンパチやるつもりかい？」

「ククク・・・人間好きの君がここで派手にやると？それこそ君の本意ではないだろう？」

「・・・なぜ俺が人好きだと？」

「魔王狩りの後、必ず君は死者を死都から外に出さないように一つ残らず消しているじゃないか？小さいのは1000から、大きいのは10000単位の規模まで、死者の消し漏らしがない。確固たる信念でもない限り、早々出来るものじゃないよ」

「・・・俺はそんなに出来た存在じゃない。死者だって、剣の腕を落とさない為に狩り続けているだけだ。人が好き・・・というのは自分が元々そうだから・・・というからかな・・・。」

「まあ・・・気が変わるのを我らは待っているよ。（面白い情報もあることだし・・・）ではね、断罪者」

そうして、厨二の二つ名を残して真祖との邂逅は終わった。最後にそれを強調していくなんて・・・本当に入ってもらおう気あるのか？俺嫌だつて言ったはずなのにな・・・あれ、言っていない？

真祖の派閥うんぬんも気になったが、一番気になったのは『真祖を打倒しうる存在がいる』ということだ。そいつ魔王も全部倒してくれないかなあ・・・？一度会ってみて、話の分かる奴だったら分担作業でもいいなあ・・・

『ピシリッ』

なんて怠けたこと考えていたら、伊都之尾張之剣の鞘にひびが入った。

(ちっ・・・らしくない・・・)

同じアイツから貰ったものでも、ローブが破れても気にはならなかったのに、なぜか・・・そのことが無性に心をざわつかせた。

十話 勧誘、不穏な影（後書き）

短めです、すいません。

前回と今回で、だんだん心も人外に慣れていくリシユアン君をえがいたつもり・・・なんですけど。

どこまで伝わっていることでしょうか。文章力のなさに泣けてきます。

やっと、あいつの存在をほのめかすことができました。次回にでも出てくるんじゃないでしょうか。

みなさんお待ちかね？のあいつです。

なんとか投稿できるようにしますが・・・何分夏休みがあって無いようなもので・・・（^^）；

・ レポート書くふりして小説書いてるんで。単位が・・・単位があ・・・

次回がいつか分からない不安定作ですが

そんなんでも思いついた感想なんかありましたら。

お待ちしております。

十一話 王の消失（前書き）

こんにちは。11話投稿します。ここら辺から、型月世界に対する自己解釈、設定捻じ曲げが入ってきます。

そつというのが許せん！という方は回れ右を推奨します。

まあ・・・そんな警告をするということは、やっと原作設定に具体的にすることができた、ということぞ。

長かったのか、短かったのか。

あ、これ終わったらまたオリ話に戻るんだ・・・（ ン

十一話 王の消失

ブリュンスタッド城の一室。主の居ない部屋には、トライフム・オーテンロツゼが月明かりの中で立っていた。

「やはり、お一人で行くのですね……。貴方様はいつもそうだった。私がどのように尽くしても、決して最後の境目は通させない。・・悔しいが、あ奴と私の魔術にはかなりの差がある。我が主ならそれをも乗り越えられると信じているが、万が一……。いや。従者が主を信じずしてどうする。待とう、我が主の帰りを。我が主が巷で噂の宝石術者を倒して帰還するまで、この城は私が守ろう」

その時、部屋が闇に染まった。

「ちいつ・・・！」

『バツ！』

『ズガガガガガッ！』

『キュイイイイイン

キイイイイイイイイインツツツツ！！！！！！！！』

輝く小さな玉から放たれる雷と、相手の手に握られた装飾剣から繰り出される目もくらむような光の奔流。それをギリギリ横っ跳びで避ける金髪の男。

朱い月は生まれて初めて後悔し、また純粹に驚いていた。

ただの数十年しか生きられない、自分と比べて遥かに矮小である『人間』という存在に、初めて自身の危機を感じていた。

自身の創った真祖はおろか、魔王すらも軽く捻ったこともあった。唯一の友と認め、またスペックで言えば自身に迫るほどの最高傑作

であるリシュアンにも、ここまでの実力差が拮抗するほど追いつかれてはいない。

「どうした！それが最強の真祖の力なのか！？ E S l a s s t
f r e i , E i l e s a l v e ! 《解放、一斉射撃！》」

七色に光る宝石剣。振られた軌跡を、黄金の光の斬撃が奔る。

「くっ……！なめるなあっ！」

（魔術……人が生み出した究極の力が……。私の何十分の一にも満たない時間と力しか持ち得ないが、ここまでその力を増幅し、あまつさえ《タイプ・ムーン》の私と張り合えるとは。私に挑戦状をたたきつけてきただけあるっ！）

魔術については、朱い月は聞いていたし、見もしていた。

その力を持ってトライフムやブラックモアは自身の研究に付き合っていたわけであるし、神秘を追求する魔術によって研究が進んだ部分もある。

しかし、この男の魔術は自身の従者2人のものとは全く別物であった。従者2人を責めているわけではないが、『魔術』と言うものが、彼ら程度のモノだとすると容易に対処することができると思っ
た。

ならば、今まさに直面しているこの状況は一体どういうことか。

朱い月の失敗は、従者2人のモノだけで『魔術』を分かった気になっていた、ということだろう。城にこもっていたから仕方のないことかもしれないが、あまりにも情報源が少なすぎた。

さらに上の神秘、相対しているこの男が使う『魔法』を知らないのも当然だと言える。

宝石で解放された属性魔術に加え、相手の振るう装飾剣からは、人が持ちえる魔力を越える、魔法によって呼びだされた魔力波が途切れることがない。

宝石によって引き起こされる爆発的な力はまだ対処できる。
しかし、それを湯水のように使われていては流石の朱い月もたまたま
ない。

トラフィムの数倍、ただの人間ならば一生かかっても一度には生み出せないような力を、何度も目の前の男が使うことを『魔術』は可能にしていた。

さらに、朱い月が知りえない魔術より上の神秘によってもたらされる装飾剣の一撃は、絶対種たる彼の攻撃と同等の威力を放っていた。

未知の力との遭遇で、朱い月は追い込まれていたのである。

（これは・・・トラフィム達を連れて来なくて正解だったな・・・。相手が一人で挑んできているのに、こちらが複数でかかるほど落ちぶれてはいない。

彼らなら、私の言葉を無視しても介入してきただろうからな・・・。リシユアンには・・・もつと駄目だな。

アイツとは互いに友と呼び合うが、私はアイツの親だ。子に無様な様はみせられんよ・・・）

自身の危機が迫るのにも関わらず、朱い月はひどく落ち着いていた。

過去の歴史の中で、自分とここまで張り合えるものが居ただろうか？
月では絶対的な力を振るった朱い月。それは地球に降り立ってから
今に至るまで変わりはなかった。

王たる自分が尻尾を巻いて逃げるわけにはいけない。

アルテミット・ワンである自身は負けてはならない。

決闘をたたきつけてきた相手に、複数でかかるなどもってのほか。

御託はいらない。

る『月落とし』。
世界と同化することで発動する空想具現化。
マイブル・ファンタズム

ここで少し考えて欲しい。

恐竜絶滅の原因とされる隕石は直径約10?。対して、月そのものの直径はその350倍、約3500?である。たった10?の

(それにしてはかなりの大きさだが)、月に対してはかなり小さい隕石が衝突したおかげで地球全土の気候が変わってしまった。

ならば、月が落ちてきた時はどうなるか?気候が変わるところの話ではない。

この星に多大なダメージ(・・・)が出るだろう。それだけの質量・エネルギーを持った、大気圏から落ちてくる隕石・・・としては遥かに大きい『天体』が、ものすごいスピードで一人の人間に向かって落ちてくるのだ。

これには流石の魔法使いも落ち着いてはいられない。

「まさか・・・月を丸ごと落としてくるとはっ・・・!!流石の私でもここまで規格外ではないぞ!間に合うか・・・っ!」

魔法使いの声が荒がる。宝石をしまい、両の手で持った《宝石剣ゼ
ルレッチ》を下段にかまえる。

「Es lässt frei, Eilesalve! 《解放、
一斉射撃!》」

第二魔法《並行世界の運用》によって並行世界から呼びだされた何
十もの魔力波が、第二魔法の一種である多重次元屈折現象^{キヌア・ゼルレッチ}によつて、
幾重の光の刃が全く同時に月を切り刻む。

「Gebuhr, Zweihanner! 《次弾、接続!》」

無数の亀裂が走りながらも、なおも月は止まることなく、魔法使い
を飲み込もうと迫る。

魔法使いは並行世界から魔力を吸い上げ、月を一撃で破壊できるだ
けの攻撃にかかる。

月が速いか、魔力装填が速いか

・・・しかしここで、黙ってられないモノがあった。

そう、月が落ちれば自身に被害が周ってくる『世界』である。もはや朱い月のこの行為を見逃せはしない。

元々、朱い月のブリュンスタッドと世界の仲には、両者の思惑と野望が混ざり合った複雑な関係であった。

表向きは、世界が朱い月に住みかを提供する代わりに、世界は『精霊』、いわば使い勝手のいい『駒』を朱い月に用意させよう、といったような関係であった。

そんな表向きの関係とは別に

朱い月は自らの領地を捨て新たに地球を我がものとしようとし、

世界は朱い月を使うだけ使って、いずれ朱い月が創った世界自身の『駒』を抑止力として送り込み、朱い月を自身から排除

するつもりだった。

そんな

危ういバランスの上に成り立った関係は

たった今

崩壊した。

・・・キケン、ヤリスギ
モウ、イラナイ・・・！！

『スッ』

「Eins, zwei. Randverschwinden
! 《接続、解放! 大斬撃!》」

七色に煌めく宝石剣が大上段から振り下ろされる。

「なっ! くっ・・・お前(世界)はいつも最後に邪魔をするっ!」

そしてひとときわ大きな黄金の一撃が、無数の罫が入った
月を、朱い月ごと飲みこんだ。

「ハアツ・・・ハアツ・・・並行世界の運用に、キシユア・ゼルレッチ多重次元屈折現象の併用・・・。流石に身体が悲鳴をあげておる・・・。しかし、一瞬月の落ちるスピードが遅くならんかったらまずかった。あ奴も予定外のことだったみたいだったしn・・・。っ！」

『ガプッ』

魔法使いは最後まで言葉を言うことを許されなかった。

瀕死。

まさにこの言葉がふさわしい状態の吸血鬼に、気がついたら首筋を噛まれていた。

「き・・・貴様・・・！」

「ただでは消えんよ……！この身はアルテミット・ワン……真祖の吸血鬼！今は……この……くらいしか……出来んが……吸血衝動という……呪い位は……残させてもらっぞ……人間……」

朱い月はただで消えるつもりはなかった。

月落としてよって自身の危機を感じた世界によって一方的に生命リンクを切られ、高速回復がなくなっている。

自身の肉体が消えつつある中で、目の前の存在に血を送り込み、死徒にした。これでこの魔法使いは日の下を歩けなくなり、吸血衝動を背負って過ごすことになる。

（後は……これでうまくいけば……リシユアン。少し休むが、置き土産で我慢してくれ。

君とはもう一度会えるだろうか……。次会うときは姿が変わっているかもしれないが……。

私の転生体とも言える存在だ・・・すぐに気付いてほしいな・・・)

さらに最後の力を振り絞り、千年城ブリュンスタッドを中心にした『深層意識に朱い月という行動理念をもつ』真祖を生み出す、固有^{リアリティ}ニマルブル結界を発生させた。

これこそが、朱い月のブリュンスタッドが見出した、ある一定の研究の成果である。

世界がその存在を黙認したのは、世界の精霊 が永続的に必要だったからだろう。

現在の寿命のある真祖のみでは・・・なにかと不安らしい。

(命・・・か。君に言われても正直あまりピンと来なかったけど・・・
・今なら少しその大切さが分かる気がするよ・・・)

たしかに、自身の破滅につながった目の前の男は憎く、世界に対しては今壊してやりたいくらいだ。ただその憎悪よりも、今はリシユアン＝ブリュンスタッド という、自分の息子であり、作品であり、友である存在を残せたことに、朱い月はある種の達成感を感じていた。

今はまだ未熟だが、自身と同等かそれ以上のスペックを誇るその存在。

常に一人だった朱い月にとって、修行をしてほしいと言われ、十年という短い期間だがずっとそばに人が居たあの時間は、朱い月の生涯の中で、何よりも暖かいものだった。

彼ほどの実力なら、永遠に自分と共に居られるだろう。

孤独の寂しさを知ってしまったから、もう一人には戻れない。

それに、いつかは自分も固有結界の効果で甦ることができるだろう。

そうすれば、今度は二人、常にそばで互いに笑い合うことが

(いつかまた、その日まで・・・・・・・・・・)

そうして、
朱い月のブリュンスタッド
は金色の粒子
となって消えていった。

十一話 王の消失（後書き）

十一話です。朱い月が死にました。これでようやく物語が動き出しそうです。

作中のドイツ語は Fate から。しかし、パソコンのスペックが低いのが、完全ではありません。

以前感想にもいただきましたが、今作の朱い月は魔術について一定の知識がある設定です。

トラフイムと、グランスルグは魔術師上がりの死徒で、グランスルグとは一度戦ったという仲なのに、まったく魔術について知らなかったのはおかしいと思ったからです。

ウルトラじいに関しては、30歳後半から40歳ぐらいを想像しています。身体能力がハイスペックの朱い月に6〜70のじいさんが勝つのはさすがに想像できません。

型付設定にも、「全盛期からは老け込んだ」的な描写があるので、少しくらい若くてもいいんじゃないかね？ということですよ。

まあなんやかんやあってトドメ刺したのは世界とじい。

世界が朱い月を切り捨てたのにはもう一つ理由を考えたり考えなかつたり……

気が付く人もいるんじゃないでしょうか。

ではこの辺で。感想お待ちしております。

十二話 復讐・・・月の咎（前書き）

お騒がせいたしました。すづねえです。

まずは前回の投稿後にコメントを下さった
ゆう様、SILVER様、有り難うございました。

残念ながら、記録は吹き飛んだままでしたが、いい機会だと思って
書き直しています。

そんな第一号がこちら、十二話です。

さらなる報告といたしましたは、
100000PV、20000ユニーク突破いたしました。

本当に、感謝の極みです。こんなに多くに方々に読んでいただいて、
幸せです。

これからがんばります！

では、十二話です。どうぞ。

十二話 復讐・・・月の咎

真祖の王、 朱い月のブリュンスタッド が死んだ

諸国漫遊中のリシユアン「ブリュンスタッドにそんな知らせを届けたのは、朱い月が死に至った原因の一つでもある『世界』であった。

「な…っ…………冗談…だろ…？」

信じられなかった。自分よりはるかに強く、星の絶対種の称号たるアルテミット・ワンをもつ、あの王が負けるとは思わなかった。しかも数の暴力によってではなく、一対一の純粋な力比べで負けたと言っではないか。

それだけの力を持ったものがこの地球上にいるとは。核兵器ぶち込んでも生きて居られそうなアイツを殺せるバケモノが居るなんて思いもしなかった。

…今考えると、確かにその存在はほのめかされていた部分がある。前に来た真祖の勧誘のとき、『真祖を打倒し得る存在がいる』と言っていたし、事実、被害にあっているとも言っていた。

「そうか…。交渉は決裂、ということだね？」

「そんな殺気を出しなさんや。それともここ（街中）でドンパチやるつもりかい？」

「ククク…人間好きの君がここで派手にやると？それこそ君の本意ではないだろう？」

「…なぜ俺が人好きだと？」

「魔王狩りの後、必ず君は死者を死都から外に出さないように一つ残らず消しているじゃないか？小さいのは100から、大きいのは1000単位の規模まで、死者の消し漏らしがない。確固たる信念

でもない限り、早々出来るものじゃないよ」

・
・
・

「まあ…気が変わるのを我らは待っているよ。(面白い情報もあることだし…)ではね、断罪者」

そっだ。

今考えればあの時すぐに引きさがったあの真祖の態度も釈然としな
い。この身体の特異性は真祖にとって喉から手が出るほど欲しいも
のはずなのに、実力行使すらして来なかった。

あの時すでに、俺が朱い月という後ろ盾を無くすと知っていた
？

…今なら分かる。不自然すぎる。それに、あの後割れた『鞘』。
あの時感じた不快感を無視しなければ……！

目の前が真っ暗になる。後悔して、後悔して、それでも衝動が治まることはない。
ただ、激情に身を任せる。

「あ……あ……ああああああああああああああああああああ
つつつつ……！」

想いの限り叫ぶ。
後悔してもしきれない部分を昇華させるかのように叫ぶ。

……だが、どんなに叫んでももう遅い。どんなに悔やんでも、この手からこぼしてしまった命はかえってこない。

どうして、アイツが殺されなければならなかったのか？

誰が殺したのか？

何のために殺したのか？

少なくとも真祖を狩っていた奴と関わりはないはずだ。

ならば、なぜ殺したのか。なぜ殺されたのか。

だが……

「復讐だ……！」

今はそんなこと、どうだっていい。

何も悪いことをしていない。真祖はアイツが生きようとした結果に過ぎない。死ぬのは怖い。

…そうさ。誰だって死ぬのは怖い。

それはこの人外になった俺も、最強種だった朱い月も変わらない。

『生きたい』と思うことが悪い、なんてことがあっていいはずない。

親を殺された悲しさか…友を殺された悔しさか…。

ただ、内から溢れでるどす黒い衝動に身を任せて、真祖は宝石魔術師に復讐を決行する。

ある森林の中で、俺は一人の男を見つめていた。白いローブに吸血種たる紅い瞳。俺が探し求めた復讐の相手だ。どうやらかなり早く死徒として覚醒に至ったらしい。

一度は目の前の男が、そのまま物言わぬ獣に成り下がる可能性も考えたが、すぐに打ち消した。アイツを打ち破るほどの男が死徒の資質を持っていないはずがなかったからだ。

現に今、光を避けてはいるが、悠々と歩いているではないか。

「どうした？ さっさと出て来んか。何か用があるんじゃない？」

不意に立ち止まり、男はこちらを向いて言ってくる。まあ、気配を隠すつもりはないし、不意打ちするつもりもない。堂々と、それであるが、最大の憎悪をたたきつけながら男の目の前に入る。

「さつきから…何の用じゃ、吸血鬼。その顔見るに…ほっ？」

…俺の顔は朱い月に酷似している。髪の毛に一房白銀の髪が混じっている。他は初見では見分けが付きにくい。そこから、何かを読み取ったようだ。

…どうとでも想像しろ。多分考えていることは同じだろうよ。貴様だって、その可能性を考えなかったわけではあるまい？

だが、いきなり斬りかかったりはしない。コイツには聞いておかなければならないことがある。八つ裂きはその後だ。怒りを無理やり押さえつけ、声を絞り出す。

「何故…朱い月を殺した…？」

その問いかけに、

「やはりあ奴の手のものか。そんなもの、特に有りはせぬ。しいて言つならば、『ワシが気に喰わんかったから』じゃな」

目の前の男は当然のように、その言葉を口にした。

「な……っ……?」

今日の前の はなんと言ったのか ?

「気に、喰わなかったから ?」

憎悪で頭が真っ赤になる。

そんな理由で、アイツは殺されなければならなかったのか?
こんな子供じみた奴にアイツは負けたというのか ?

「そうじゃ。真祖を生み出す理由は分かったが、失敗したのなら世に放たずに殺せばいいのじゃ。それをあ奴は、自分の力を誇示するかのように、真祖を世に送り出した。それがワシは気に喰わんかった。ただそれだけのことよ」

そう、目の前の男は口にする。

どいつもこいつも分かっていない。

この男も、

真祖たちも、

何一つ、アイツのことを理解していない　　！

『どのように生まれてきても、命は大切なもの。生まれたものは自由生きる権利がある　　！』

過去の修行の中で、俺がアイツに言った言葉。それをアイツは理解してくれた。

だからアイツは真祖に選択肢を与えた。　　千年城に留まるのもよし、世界に出るのもよし。そうやって自由を与えた。

それなのに、

真祖はそれを「自分たちは捨てられた」と言い、

目の前の男は「力の誇示だ」と言う　　！

…勝手に勘違いして、子供じみた理由でアイツを殺しやがった。

「ん？どうじゃ、真祖。満足したかの？」

殺して…やる
！

「人間風情があああああっ！」

展開は一方的だった。

怒りに飲まれたリシユアンに、朱い月を打倒したゼルレツチを倒すことなど不可能だった。

真祖の中でも屈指の身体能力を持っていても、それを使いこなさなければ意味はない。ただ大振りになった刀など、それほど脅威ではなかった。

「くそおつ！ 当たれええええ！」

確かに振りは速い。だが、それだけだ。隙が大きすぎるし、その後振られる軌跡の予測も簡単だった。いくらゼルレツチが『戦士』でないとしても、簡単に避けられる。

それが、さらなるリシユアンの焦りと怒りを引き起こしていた。

「やれやれ…。そろそろ終いにするかの…」

初めの数分は真祖に付き合っていたゼルレツチだったが、そう言うところのあまりにもお粗末な復讐劇を終わらせにかかる。

『ヒュン

』

アクションは、ただ突っ込んでくるリシユアンに向かって宝石を投げつけただけ。

『ブシャアアアアアッ!』

しかし、次の瞬間リシュアンの四肢からは、夥しい量の鮮血があふれ出し始めた。

やられた

そう思った瞬間に、頭が冷えた。だが、もう遅い。感情に身を任せ
ては絶対に勝てぬ相手だと理解していたはずなのに、気がついたら
四肢が切り刻まれている状態だ。

なんと言う

無様

「ちく…しよ…!」

復讐ができなかった悔しさよりも、自分の今の状態に情けなさを感
じた。これでは自身を最高傑作だと言ってくれた朱い月に申し訳が
立たない。

このままでは気が済まない。男には、友と同じだけの苦しみを味わわせてやらねばならないというのに。

この状態では、反撃どころか、一歩も動けない。

一体どうすれば良いというのだろうか…

このまま終わるわけにはいかないが、だがしかし

・ ・ ・ ・ ・

なにかが聞こえてくる。内から溢れる衝動と共に。

チカラヲ・・・

ニクイノダロウ・・・？

コノママヤラレルノカ・・・？
チカラ「黙れ」・・・！

 ヴルコラクと戦って以来、聞かなかった声。
それがまた、頭の中に響いてくる。

∴ あの時気がつかなかったが、今なら分かる。

これは、自分と非常に似通っているが、その実全く別物だ。この衝動に突き動かされれば、確かにあの時のように爆発的な力を得て、目の前の男を打倒しうるかもしれない。それは確かに今の自分にとって甘美な響きだろう。

しかし、自分はこの衝動に吞まれるわけにはいかない。
なぜなら、男を倒したのが自分であって自分でない存在になってしまっからだ。

だから、自分の意志を強く持つために叫ぶ。

「黙れ！」

あの男を倒すのは自分でなければならない。
あの男に絶望を味わわせるのは自分でなければならない。

故に、声をかき消すように叫んだ。

「何に怒鳴っているのか知らぬが・・・終わりにさせてもらおうぞ」
だがしかし。そうこうしている内に、男が目の前に迫っていた。

(これまでか…)

最期を覚悟したが、声に反抗したことを、悔やみはしなかった。
悔いは、冷静に戦えなかった自分自身についてののみ。

「氣を失ったか…。まったく、最後まで良く分からん奴じゃったの
う…」

ゼルレッチは自分の命を狙ってきた真祖を、殺しはしなかった。

それはただの気まぐれであっただろうか。

朱い月に勝負を挑もうと思ったのは、確かに『気に入らない』という自分本位な理由であった。しかし、そのことに対して特に何も思ったりはしない。それは自分のなかで『あたり前』な事なのだから。

当然、それについて反発してくる　　今回みたいな　　輩も出てくるだろうとは思っていた。

それはそれで、当然なことだと思っている。自分と他のヒト全てが同じ考えを持つことなどあり得ないのだから。

だが、それでも人は世間を気にする。考えが合わないのを知り得ながら、周りの人間と合わせようとす。

悪を成すことを『人に嫌われたくないから』という理由で糾弾し、『集団からつまはじきにされたくない』と言って善を成そうとする。

人に『意志』など、有って無いようなものだ。

しかし、この真祖はどうだろうか。善も、悪も、世間体もない。この男が同族から嫌われている事を、ゼルレッチは知っていた。

ただ、自分の気持ちにまっすぐで、その通りに行動する。

世界の精霊たる真祖という『完璧たろうとする』上位種のはずなのに、『不完全な』人間よりも、よっぽど人間らしい。

ゼルレッチは、この真祖のそついう精霊らしからぬ『不完全さ』を、面白いと思ったのだった。

故に、手をかけることはしなかった。しかし、これほどの存在をやすやす見逃すのは余りにももったいない。

「首輪でも・・・付けておこうかのう・・・」

そついつて、ゼルレッチは真祖を自分の手足とするように魔術を施そうとする。それは倒れている真祖に対する呪いとも取れた。

『バチィッ!』

だが、いざ魔術をかけようとすると、ゼルレッチの手はナニカによって弾かれた。

まるで、これは私のモノだと言わんばかりに。

「…なるほどのう。確かにワシは勝てんようじゃ…。それにしてもまったく…本当によく分からん存在じゃのう…。」

それに、『親を追い詰める原因となったのが、自分自身であった』と、こ奴が知りおったらどうするのかのう…。

まあ殺したのはわしじゃが…それすらも仕組まれたことなのか…。
さて…。」

宝石翁は何かを感じ取った後、吸血鬼に魔術もかけず、命を奪いもせず、ただそこから立ち去った。

十二話 復讐・・・月の咎（後書き）

十二話です。いかがだったでしょうか。

本来は、ここまでじじいとリシユアン君ごパワーバランスは悪くありません。

ただ、リシユアン君が冷静に戦えれば・・・の話ですが。

今回はむごたらしく負けていただきました。

ちなみに、朱い月にはリシユアン君最終形態でも勝てない仕様になっています。

これは私の勝手なイメージです。「朱い月 最強」という。

ウルトラじじいは死徒化後も老けていつてる様ですし。

「あかいあくま」や「一番悪い人」が出てくる時代には、じじいを抜けるようにはなるんでないでしょうか。

今回はデータ復旧中の十三話です。

ついにあの人が再登場です。お待たせいたしました。

早いとこ、アルク爆誕まで行きたいんですけどねえ・・・。

ちょっとやりたいことやって、終わりにしようと思います。

感想、お待ちしています。是非、今からやることの感想もいただき

たいです。ではまた次回。

目覚めたりシユアンが向かったのは、友との思い出の地。

そこで出会った一人の少女。

友の忘れ形見をめくり、かつて同じ主を慕ったものと激突する。

「名前、教えてくれるかな？」

「…名前…ない…」

「その子をどうするつもりだ！」

「償ってもらおうのさ！責任をな！」

「貴様のせいであのお方は亡くなられたのだ！」

「それは逃げだろう！貴様も本当は分かっているはずだ！」

十三話 『朱い月の残したモノ』

十三話 朱い月の残したもの（前書き）

遅れてしまい、申しわけありません。

すぶれえです。

ネット環境が本当に整わなくて…。

何話かストックはあるんですが、投稿できない。

はがゆい…

今回は、例の事故によって消えた話です。

心機一転してかなり作り変えました。

よろしく願います。

十三話 朱い月の残したもの

「うっ…」

結果的に言つと、俺は生きていた。

木々がなぎ倒されているところを見ると、あの後そのまま放置され
たらしい。

魔術によって裂かれた四肢は、星の生命供給の元に回復していた。
今は何事もなかったかのように白い素肌をさらしている。

「はあ…」

ため息の一つでも吐きたくなるというものだ。いつもなら、戦闘後
は生きている事に感謝し、又一つ強くなることに喜んでいた。

だが、流石に今回は違う。あんなもの戦闘でも何でもない。命を取

つてくれと言わんばかりに、ただ闇雲に突っかかって行っただけだ。命を取られなかったのは憐れまれたからか、取るに足らない矮小な存在だと思われたに違いない。

「…情けない」

時間をおいた今、いろいろとこみあげてくるものがある。

今思い返しても、恥ずかしさで嫌になるほど無様にやられた。それでも分かったことがある。

半ば自滅に近い形で一方的にやられはしたが、あのじじいの実力は本物だった。

それに、戦闘に応じてきた時点で『世界が嘘をついている』という可能性も消えた。アイツとあのじじいは確かに戦ったのだろう。

「…そして、負けたアイツは、消えたのか……」

実感がわかない。一撃で戦闘不能状態にさせられたが、朱い月より一枚も二枚も勝っている、とは到底思えなかった。せいぜい互角がいい処だろう。

…未練がましいようだが、アイツが負けたなんてまだ信じられないのだ。死体を見たわけでもなく、消える瞬間も見たわけでもない。

「まあ…確認する方法は有るにはあるんだが…」

そう、確認する方法がある。

だが、非常にめんどくさい展開になるのが目に見えているのだ。

しかし、他に方法もない。

「しゃあないか……………」

起き上がって、吹き飛んでいた剣を拾う。

思い返してみれば、この剣もアイツから貰ったものだった。

初めて戦闘で使った時は上手く使いこなせなかった、剣。
それでも、初戦闘の最後はしっかりと扱えたし、その後の戦いの中
でも何度も命を救ってくれた剣。

「行くか」

そこは、アイツと初めて出会った処。

アイツと長く暮らした土地。

いろいろな思い出の詰まった城。

「千年城ブリュンスタッドへ」

どこかの険しい山の中、きりたった崖の上にそれは在った。

主を失っても尚、その城は変わらぬ荘厳さで来訪者を迎える。

千年城ブリュンスタッドは、何も変わらない姿でリシュアンの前に現れた。

「…変わっていないな」

結果良かったことであるし、望みは叶ったのだが…

なんというか…拍子抜けだ。

最悪の場合、城が消えている可能性も考えてはいたのだ。そうでもなくとも、所謂『お約束』に従えば、主が倒された後の城というモノは荒廃するものだ。

ただ、城は健在であった。これは嬉しい誤算だ。

『アイツがいた証』がここに有る。

それだけでも、少しばかり救われたような気持ちになるのだから不思議である。

「 入るか
」

そうして真っ先に目指すのは、アイツの私室。

・
・
・
・
・
・

・
・
・
・
・
・
・

「……………」

『ジイ』

「……………」

何故か、アイツの部屋に少女と犬がいた。

何が起こった……

どうしてこうなった。

朱い月は何をやっていたんだ。

(しかし…コイツは……)

目の前の少女を見る。肉体年齢は14〜15くらいだろうか。しかし、真祖は生まれた時から青年体でいる種族だ。

いわば、『肉体の成長』が無い。俺もこの世界で初めて気がついたときは今の大人の体だったからな。

そういう点では、まだこの子は見かけによらず生まれてからまだ間もないのかも知れない。何というか、異様に存在が希薄と言おうか…こっちを見てくるだけで無表情のまま一言も話さないし、自我がはつきりしていない様な。

……そう、まるで人形のようなのである。

「……………? ……いつもと…違う…? ダレ…?」

考え事をしていたら、向こうから話しかけてきた。

「一応喋ることは出来るようだ。表情は未だ動かないが。」

「俺の名前は、リシユアン＝ブリュンスタッド。君の名前を聞いてもいいかな？」

「一応こちらからも話しかけてみる。」

「……?……」

しかし、少女は動かない。ただ、黙ってこちらを見上げてくるだけだ。もしかして聞こえなかったのだろうか?ならば、もう一度話しかけてみようとして

「俺の名m『グルルルルルル……』……」

遮られた。白銀の巨体を持つ彼女の護衛によって。

先ほどまでは少女の脇にたたずんで俺とのやりとりを見守っていたのだが、今は牙をむいて、彼女を守るように少女の前に立っている。

「…プラム……」

少女が白犬に話しかけると、白犬は殺意をむき出しにしていよいよ戦闘準備を整えた。

やはり、この犬は少女を守っているのだろう。

だが、その殺意がこちらに向いていないのにはすぐに気がついた。

どこか別の方へ…扉？

この守護者がここまで殺意をむき出しにする相手は一体どのような奴なのか。この状況で呑気なことだが、少し気になる。その相手はもう間もなくあの扉から入ってくるのだろう。

そうして

『ガチャッ』

ついにその相手が

「よくものこの帰って来られたものだな、真祖よ」

お前かよ……。

ワソコよ、お前となら友達になれそうだぜ……。

入ってきたのは、トラフィルムだった。白いロープに、隠そうともしないこちらへの敵対心。

こいつも、何一つ変わっていない。

朱い月がいたという証明が、ここにも有る。

「…その反応……やはりアイツは死んだんだな……」

「そつだ…真祖、貴様のせいだな！」

俺が朱い月の研究に関わらなかつたからだろうか。いざとなれば、アイツは俺を呼び寄せただろうから、そんなことをアイツが思っていたとは思えない。

ゼルレッチが朱い月を倒そうと思ったのは、『気に入らなかつた』という子供じみた理由だから、真祖を生み出したアイツとは遅かれ早かれぶつかっていたはずである。

そうなると、避けられない出来事だったのかもしれない。勝敗は分からないが。

「貴様が早々に適合出来ていれば…貴様が主の研究に尽力していれば、こんな事にはならなかつたのだ！」

適合問題に関しては、もうどうしようもない。

何故この真祖の身体に、《俺》という魂が入ったのかは、300年生きてきたが分からない。

だが、憑依してしまったのだ。

自らの望まないところで、無意識下で行われたことを、どう認識すればいいのか。

研究は、言わずもがな。アイツが望んでいれば、俺はこんなに自由に世界を旅することもなかった。

「適合は…出来なかったのだから仕方ないだろう。そもそも、初めて創り出した俺が適合出来たなら、アイツはそんなに苦労していない。神秘を追求するお前たち魔術師二人がついていても、理想には至らなかつたんだから。研究の方もだ。アイツが本当に俺を必要とするのなら、俺はアイツのそばに居たさ」

普段はここで終わるはず。だが、俺はまだ言葉を続ける。

「それに…アイツが戦ってた日、お前、一体何してたんだ？まあ、置いて行かれたんだろうが…余りにもお粗末すぎるよ。後から追いかける、とまでは言わんが、せめて同じ種類のヒトとして何か言うことができたんじゃないのか？アイツを倒せるほどの実力なら、お前らだって聞いたことあるだろうよ。何にもしなかつたくせに、すべて俺のせいになれるのは心外だね」

「クツ……我が主は一人で出て行かれたのだ…その気概をくんだま
で……」

「なら、それは俺にも言える。アイツが自由にさせてくれた。魔王
狩りという『お願い』は有ったがな。それに従っただけだ。お前に
研究どころ言われる筋合いはない」

「…ちいっ……消える。どこへでも消えてしまえ。二度と、主のこ
の城へ近づぐことを許さん。その面を二度と私の前にさらすなよ」

「そうかい…ならば、出ていくとしよう。もう、会うこともないだ
ろうな」

争いにならなかつたのは僥倖だ。舌戦で勝った時は、そのまま突っ
込んでくるかと思っただが、どうやらここを壊したくない思いは一緒
らしい。

これ以上、長居は無用だ。出て行こう。

「早く行け。私はその小娘に用があるのでな」

「……何？どうするつもりだ」

「取ってもらうのさ、責任をな！その小娘は貴様と同じさ。適合できなかつた出来そこないの器だよ！」

腹いせかよ…ばかばかしい。ガキか。

「…その子は俺が預かる。殺すことは許さん。退け」

「貴様……何処までもカンの触る奴だな…」

「甚だ不本意ではあるが…その意見には賛成だ」

「どうあつても相容れない…ならばここで貴様も殺してやるっ」

「はっ…ただの研究者風情が……粹がるな」

剣は使わない。目の前の存在は、まがいなりにも朱い月を支えた存在であるし、何より必要ない。

この身は真祖。

朱い月が生み出した最高傑作。

そして魔王討伐による死線を何度もくぐった経験。

生憎と、何年も籠りっぱなしだった研究者風情にやられるほど弱くはない。

そうして、ただ思い描くように自分の爪を鋭く、硬く、長く、変形させる。

そして、

「くくらえっ!」

『バツ!』

トラフィムが攻撃してきたのに合わせて、

『ズシヤッ!』

駆け抜けながら、その手刀で一閃した。

差は歴然。

おそらくトラフィムには何が起こったか分からなかっただろう。気がついたら、自分の胸が紅く染まっていた状態である。

(たわいのない……)

これが魔術師ならば、ゼルレツチはもう別次元だ。朱い月が魔術師をなめてかかったのは、絶対にこいつらの弱さが原因の一端であることは間違いないだろう。

……ふつふつと、怒りが沸き起こってくる。

なんだよ。俺だけのせいみたいに言いやがって。自分だって、責任有るじゃないか。

早く出よう。後ろにいる少女と一緒に。

なんだかんだ言っつて、アイツがいた証であるトラフィルムは殺せない。アイツを伝え聞きではなく、本当のアイツを知る少ないヒトだからだ。

ならば今、コイツが一番悔しがる事をやれるくらいしか怒りを抑える方法が無い。

「この子は俺が連れていく。俺が育てる。貴様の思い通りにはせんよ」

「ちい……ま……待て……え……っ」

「顔をみたくないのはお互い様だろう？早々に立ち去るとするぞ。じゃあな」

始まりは一人の王

かつて一人の王に従いし者は

付き従う有り方で互いを嫌悪し合う。

王が死した後、

王に従いし王の子と

王の従者は互いに争う。

そは互いに主を想うが故のすれ違い

そして王の子と従者の争いは、

これより1000年もの間続くこととなる

十三話 朱い月の残したもの（後書き）

今回はトラフィムとの戦いでした。後はアルト様が時系列的には初登場です。

アルト様との出会いです。

ただそれだけです。

それだけのためにこの話を書きました。

ではまた次回。いつになるかわかりませんが…

次回を待っててください。投げ出すことはないと約束します。

十四話 妹（前書き）

14話です。

今回は、少し趣向を変えてみました。

時系列は、一番最新です。

リシュアンと、アルト様が過去を振り返っています。

では、さようなら。

十四話 妹

「はあ……」

いつもの習慣で、俺は千年城の上で月を見ていた。澄んだ夜の空気も相まって、ここに来ると日常の嫌なことを忘れることができる。

夜が好きなこついう自分は、やはり元がヒトとはいえ今は闇の人間なんだと実感する。

アイツと……否あの子と出会った時はまだ、自分はまだ昼の人間だったと思っていたのだが……。何時の間にか変わっていたんだろ
うか。

「ほらフィナ。やっぱりお兄様はここにいたでしょう？だから言う
たじゃない」

「そうだね……。やはり絵になる。美少年しか興味がなかったけど、

美青年もいいね。ああ・・・なんて僕は愚かだったのか！少し熟れ過ぎていくからといって偏見を持っていた！こんなにも美青年も素晴らしいのに！」

「ったく・・・私のお兄様相手にサカってんじやないわよ！」

「お前ら・・・」

静かでいい空気が台無しだ。それとフィナ、二度と俺の後ろに立つな。どことは言わんが怖気がはしったぞ。

「そ、そんな・・・！」

なにが『そ、そんな・・・！』だ。身の危険を感じてんだよ。やっちまえ、アルト。

「沈んでなさいっ！」

『...』

「あべしっ！」

よくやったアルト。撫でてやるじ。

「えへへへ」

それにしても・・・

「アルト、どうしたんだ？お前がここに来るのは大体一人じゃないか。どうしてフィナを連れてきたんだ？」

フィナ・ヴラド・スヴェルデン、死徒二十七祖序列第八位であり、《白騎士》と称される。我が妹アルトにいつの間にか付き従い、いつの間にか千年城に住んでいた。今までは美少年専門に吸血していたようだが・・・今趣味が変わったようだ。ある意味・・・俺の天敵かもしれない。

今ここには居ないもう一人の騎士のリイゾもそうだが、フィナがここ（屋根上）に来ることはほとんどない。というか、俺がここに来る時は四〜五時間くらい経ってからアルトが来て二人で時間を過ごす、ということが多い。

「あのね、フィナがどうしてもあの話を聞きたいんだって。私だけの話じゃないから、話そうかどうかお兄様にも聞こうと思って」

要件は、この間からしきりにフィナが興味を持っていたことだとい
う。

「俺とアルトの出会いねえ・・・そんなん聞いて楽しいのか？まあ話してやってもいいんじゃないか？アルトは嫌なのかい？」

「いえ、別にそういうわけではないですが・・・お兄様がいいのならどちらでも」

そうして、こちらを見上げてくるアルト。ふむ、小首をかしげながらの上目づかい。百点だ。

今日は気分がいい。月も浮かんでいることだし。

「そうか・・・。まあ、たまには昔話もいいだろう」

「本当かい！？いやーありがたしい！」

復活はええな、フィナ。

「嬉しいのは分かったから、少し静かにしてる。．．．さてと。まずは俺が城を飛び出したところから話すかな．．．」

今でこそかなり性格も明るくなってきて、向こうから話しかけてくれるようになってきたが、最初はひどかった。

彼女と城内で出会って、一番初めに俺は名前を聞いたが、彼女は答えてくれなかった。しかしその理由はすぐに理解できた。それが分かったのはトラフィムとの戦いの後、城から少し離れたところで、

俺は連れてきた少女に話しかけた時である。

「さっきはごたごたしていたから、改めて名乗ろう。俺の名はリシユアン。リシユアン＝ブリュンスタッド。朱い月に生み出された最初の眷族だ。君とは・・・兄妹になるのかな？朱い月が居なくなっってしまったから、俺と一緒に来てほしいんだが・・・。とりあえずまずは、君の名前を教えてくださいませんか？」

「名前・・・？無い・・・あのヒト、イラナイって・・・」

・・・全く、なんてことだ。道理で目の前の少女の個性と言おうか、感情と言おうかが欠落した印象を受ける。そこにいるのに、気配が薄い、まるで人形のようなだ。

（名前を与えない・・・俺の時もそうだったが・・・いらんとは言われなかった。流石にやり過ぎだぞ・・・器として期待していたんだろうが・・・）

『名前』というものは、その人個人を決定づけるものに非常に大切なものである。朱い月は名前を付けないことで、リシユアンの時に失敗した精神の問題を解決しようとした。名前を付けないことで、自我を希薄にしようとしたのである。故に、今になっても彼女の心には感情が宿っていなかった。

「そうか……。じゃあ、俺が君に名前を付けよう。嫌かな？」

しゃがんで彼女と視線を合わせるようにして話しかける。『自分は彼女を見ている』と相手に理解させるのが大切だと思ったからだ。

「……分からない……」

「……ん。それでも、いつか名前の大切さが分かる時が来るよ。それに、いつまでも『君』なんかじゃ不便だ。……そうだね。アルトルージュ。君はこれから、アルトルージュ＝ブリュンスタッドと名乗りなさい」

少女の姿を見る。俺が出会った今までの吸血種に無い、腰まで伸びた漆黒の髪。黒い前髪の間から見える紅い瞳は吸血種の証。黒地の服にワインレッドのチョーカー。この少女を色で例えるならば、黒と紅だろう。だから、紅を表すルージュを名前に入れた。ブリュンスタッドは、血の繋がりは無いものの、この子は自分の妹という意識の表れ。

「そう……。私はこれから……アルトルージュ……と言えばいいのね……」

納得してくれたらしい。まあこの子の容姿で名前負けすることはな

いだろつ。

「納得してくれたようだなによりだ。さて、これからなんだが、俺は嫌われ者でね。もうあの城に戻れないんだが、良いだろつか？」

「別に・・・構わないわ・・・あそこには何も・・・無いもの・・・」

それは安心だ。トラフィムとあんな別れ方をしたのに、すぐに城に戻るわけにはいかない。俺と一緒に来たくない、と言われるようなものならどうしようかと思ったものだ。

「そうか。じゃあ、一緒に行こうか、アルト。お前もそれでいいかな？」

そうして、俺は尋ねる。ずっと、少女のそばで事の成り行きを見守っていた白銀の巨体。こちらに敵意はないが、一応聞いておかねばならないだろつ。

「・・・この子はプライミッツ・マードー。・・・プラム、いい？」

「ワフッ」

ただの犬に一瞬見えたぞ……。モフモフしたかったのは秘密だ。

「へえ、姫様は最初そんなだったんだねえ。今からじゃ想像もつかないよ」

「あの人のせいよ。おかげで兄様にこの名前を貰うまでほとんど何にも感じなかったんだから。まるで人形よ。だから私はあの人が嫌いな」

「そう言うな。俺だってアイツがやったことはあんまり良くないことだったって思ってる。でもアイツだって必死だったんだし、そのおかげで俺はアルトと出会えた。今はそれでいいと思ってるよ」

「分かっています。でも・・・」

デモもストもない。だからそんなに唇とがらすな。頬膨らますな。かわいいだけだから。

「プライミッツは最初から姫様に付いていたんだね」

そうそう。あのワンコは最初っからアルトのそばにいたからな。初めは噛みつかれないかビクビクしてたもんだ。

だが、なぜアルトのそばにいたんだろうな？

「知らないわ。気づいたら私のそばにいたんだもの」

ワンコ、お前何処からわいて出た。

「それもいいんだが、そろそろ続きを話してくれないかな？」

分かったよ、続きだ。

そんなわけで二人と一匹でいろいろなところを旅していたんだが、これが最初は凄く大変だった。俺たちは基本野宿だから、風呂や布団なんてあるはずもない。一番つらかったのは、精神的には生まれただばかりとはいえ、肉体的には十四歳ぐらいのアルトの身体を水浴びした時に洗う破目になった時。

まともな石鹸などないが、あんなもの油とアルカリの塊。獲物の肉を焼いた時に燃料の残りかすに落ちた肉の脂を使えば何とかなる。

流石に女の子だし、体や髪は綺麗にしたいだろう、という理由で使わせてあげようとしたのだが……

「……洗って……?」

「は……?」

「体……洗って……？」

おいおい、何をおっしゃるアルトさん。俺にロリコンになれと申すのか。これでも俺は精神年齢200年以上の大人だぞ。14歳の体を見ることすら犯罪なのに、その体を洗うなどもつてのほか。ロリコン越えてペドになる。

だが……体は洗わねばならない。やる……しかない。そう、まだアルトは生まれたばかりなんだ幼いんだ幼女なんだ………俺もっと危ない人だ……。

結局、いつかは通らねばならない道、ということまで3時間の葛藤の末にアルトの水浴びを手伝いました。

「ふあああああああつ！」

アルトが顔を真つ赤にして身もだえしている。ふふふ・・・苦しめ苦しめ。あの時の俺の精神ダメージは深刻だったのだからな！

「ふおおおおおおおつ！」

フィナが顔から真つ赤な液体出して身もだえしてる。・・・お前はとうした。美少年専門じゃなかったのか。

「いや・・・姫様の体を洗うことになって顔を真つ赤にしている君を想像して・・・！」

俺が原因か。その豊かな妄想力は文字通り死を招くぞ。今もお前、鼻から生命力垂れ流しなんだから。

「に、にに兄様！そんな昔のことを話さないでください！恥ずかしい・・・」

頬を赤らめ、もじもじ。いじりたくなるなあ我が妹よ！

「そんなこと言ったってお前・・・ホントのことだし・・・初めはお前が言ってきたんだからな？」

「しょうが無いじゃないですか！あの時はほとんど何にも知らなかったんですし！それに、その後から私、水につかったことなんてありません！」

「少しピリツとするってお前が言いだしたからな。あの後からしばらくの間、濡れタオルで体をふいてやってたのは俺だが」

「ふあああああああつ！」

アルト、撃沈。

「まだないのかい！もっと聞きたいよ！」

ホモ、お前は少し黙ってる。今話してやるから。

世界を見るため、アルトの心を育てるために、珍しいもの、新しいものを求めて新しい土地へ。そのたんびアルトは迷子になった。そして町の中心で俺を泣きながら呼ぶのだ。

・・・そんなことをしながら、俺が城を飛び出してから数百年が過ぎた。流石にこの頃になると、大切な人を無くした悲しみも薄れてくる。あのときから城には帰ったことはなく、あの三人とは確執が続いている状態だ。

アルトを引き連れながらも、未だに俺は魔王狩りを続けていた。朱い月が消えたことよって、真祖はもう生まれなくなったかに思われたが、真祖は自分たちで朱い月が残した固有結界を使い、未だに同族を増やし続けている。だから、魔王の数も中々減っていかない。必ずどこかの魔王を倒すと、吸血衝動に負けて新しく堕ちる存在が居る。

ただそれでも、このところはゆっくり続けている。倒す必要が無い、と思えるが、この身は魔王を倒し過ぎた。

それ故に今、俺は特に魔王達にこの特異性のおかげで狙われている。

俺にひつついてきているアルトにも迷惑をかけていた。俺と共に行動し、『ブリュンスタッド』を名乗る彼女は、それだけで十分狙われる存在だった。俺のせいで狙われているかと思うと、凄く申し訳なくなってくる。

「私は兄様に救われたのです。兄様と一緒にいれて私は幸せですよ」

そんな時彼女はいつもそう言って、最近は良く見せてくれるようになった笑顔をくれるのだが。やはり責任は感じていた。

まあ、真祖にはまとめてかかって来られなければ早々にやられたりはない。

しかし堕ちてから時間をおいた魔王ほど強くなる。やがては抜かれるかもしれない危険性を考えると、早々にたたくのがベストだろう。ということ、今は主に自分と妹の為に、俺は魔王狩りを続けていたのだった。

「兄様、次はどこに行くのですか？」

あの日出会った彼女と共に。

流石に魔王狩りには危ないので外で待つてもらおうのだが、死者狩りには付き合ってもらっていた。真祖の王たる『ブリュンスタッド』を名乗るのであれば、流石に自衛手段ぐらいは持つてもらわないと困る。

いきなり実戦は危険かもしれないが、真祖に成り立てだった俺が劣せず倒せたことから、これぐらいは大丈夫だろうと考えた。

いざとなれば俺やプラムがいるだろうから大丈夫だろう、と考えて。

だが、まあ。そうはいつでも彼女と旅するようになってから約300年。そろそろ別れなければならぬ。なぜなら人間には感知されていないが、真祖も魔王も、自分の領地を持っているからだ。アルトも、持ち前のスペックの高さを生かして、並みの真祖なら倒せるようになった。周期的に力がおちる不安定さは残したままだが。

そろそろアルトにも、領地を持つてもらわねばなるまい。

「というわけで、お別れだ、アルト」

「ふえ……？……そ、そんな……ひつく……ぐずつ……」

ああもう俺のバカ。

「別にアルトが嫌いになつたわけじゃない。むしろ好きさ、俺の大切な妹だからな。だけど、そろそろアルトも強くなってきたし、自分の領地を持つてもらいたいんだ。真祖、魔王には自分の領地がある。俺の場合は朱い月のところだったけれど。実質今はトラフィムのものだ。アルトには申し訳ないんだけど、俺達が帰るところを作ってほしいんだ」

「……………えぐつ……………兄様……………分かりました。ですが……………」

絶対、私のところに帰ってきてくださいね……！」

アルト自身、俺に付いてきたいのだろう。だが、同時に領地の重要さも理解している。そしてうぬぼれではなく、心から俺を信頼してくれているのだ。ホントに、俺にはもったいない妹だ。

だから俺は心をこめて、このいとしい妹に誓う。

「約束する。』どこへ行こうとも、どんな目に会おうとも、リシュアン＝ブリュンスタッドはアルトルージュ＝ブリュンスタッドのところへ必ず戻る』と」

「……はいっ！約束です……！」

そうして頬を流れる涙を拭うことなく、アルトは俺に向かってほほ笑んだ。

その笑顔は、彼女が人形だった頃からは信じられないほど、美しいものであった。

「プラム。アルトを頼む。御覧の通り、泣き虫な奴だからな。君が、支えてやってくれ」

少女の守護者は何も言わない。

だが、アルトの隣に座っているその姿が、どんな言葉よりも頼もしい答えだった。

「これが、お前とリイズが来る前の話。この後しばらく世界を周った後、アルトの千年城に戻ったらお前たちがいたわけ。OK?」

「ああ、うん。実に良い話だったよ！満足さ。ところで、姫様にした誓いは僕にはしてくれないのかい?」

『ドゲシッ!』

「この……!変態騎士があ!せつかくの良い話をぶち壊して……
!もう終わったんだから下……行きなさい!」

『ズゴツ!』

うん、アルトさん。いやね、確かにすごく良かった雰囲気はアレはぶち壊してくれたよ?だけどね?スカートでハイキックはお兄さん駄目だと思うんだ。

「はっ……!はっはっはっ……」

その恥じらいがあるなら大丈夫。かわいいから。

「……コホンッ!……昔話も、悪くありませんね……」

「ああ。そうだな。大切なアルトとの約束もしっかり思い出せたこ

「とだし」

「あの時私、捨てられたと思ったんですよ？ひどいんですから、兄様は」

「すまない……。そしてありがとう。俺の我がまを聞いてくれて」

「いいえ……。でも、兄様の帰るところはココです。その為に私は頑張ったんですから」

「そうだな……。アルトが居る、ココが俺の帰るところだ」

「千年城を具現化出来た時は、本当にうれしかったんですよ？能力的に不安定な私でも、王の資質があると、ブリュンスタッドの名をもつ兄様の妹で居られるとわかったんですから」

『千年城ブリュンスタッド』マイプル・ファンタズムを空想具現化によって創り出せる、というのが王族たる『ブリュンスタッド』を名乗れるステータスらしい。試したことはないが、力だけで言えば俺はアルトを越えているので、その資質を有していることになる。

アルトにとって、それはとても大切なことだったらしい。別に彼女にその資質がなくなるとも、俺はアルトの兄のつもりだったかな。

「あ、兄様。そういえばですね・・・」

（本当に、成長したな・・・）

出会った時とは同じ人物とは思えないほど心が成長し、今も熱心に話しかけてくるアルトに、嬉しさを感じながら、彼女の言葉に耳を傾けた。

十四話 妹（後書き）

趣向を変えてみました。

いかがでしょうか。

今回は感想をぜひいただきたいです。

よろしくお願いします。

十五話 死徒二十七祖（前書き）

こんばんは。

十五話です。眠いので、寝ます。

十五話 死徒二十七祖

その組織はリシュアン・ブリュンスタッドとほぼ時を同じくして生まれた。

始まりは一人の聖人君子。リシュアンが人々にまぎれて、その最期を見届けた、かのキリストである。

一人の弟子の裏切りによって彼の命はついでたが、その意思は残りの弟子たちが受け継ぎ、神の教えは未だに後世に伝えられている。

そんな彼らが布教の為に、または信仰の場として設けたのが教会である。聖人の考えに同調し、神を信仰するものは皆教会に集まり、志を共にする者と仲間意識を作りあげていった。

初めは、神の教えを受け、神を信仰しているだけで良かった。それはとても幸せなことなのだから。彼らは神の愛を説き、貧しい者、病める者を救済しているだけで良かったのだ。

しかし、彼らは気がついてしまった。

この世界には、神聖な神を神秘の技で汚すこと、人を殺めること、世を惑わせること、そして、世界を運行している神の摂理を歪めること、そういったことを仕出かす存在が居るということ。

それらは彼らにとって許せない存在であり、神の教えから外れた『異端』である。当然それらは彼らにとって殲滅対象であり、撲滅されるべき存在だ。

その中でも特に『吸血鬼』と呼ばれる存在たち。それらは彼らでは太刀打ちできないほどの強大な力を有していた。

吸血鬼の牙や爪は骨肉を切り裂き、拳を振るわれただけでも人間の体など簡単に吹き飛んでしまうのだから。

故に、教会に属する人間は力を欲した。強大な力を持つ異端と、互角に渡り合うのではなく、確実に殺せるだけの力を。

初めはただ無力な人間の集団だけだった。しかし、彼らはイデオロギーを共有し合う仲間である。『信仰』という唯一無二の絆で固められたその強靱な結束力により、何世代か時間はかかったものの、ついには『異端』を撲滅できるだけの力をもつこととなったのだ。た。

漸く、教会の悲願が叶う

教会に属する人間は、そう思ったに違いない。

「以上で、教会所属の異端殲滅を目的とした『埋葬機関』設立、並びに特S級討伐対象『死徒二十七祖』認定の会議を終了する」

大聖堂の奥にある会議室には、いずれも相当な地位にいる司教が集まっていた。彼らが議論していたのは、教会の切り札たりえる存在の『埋葬機関』という戦闘機関を発足させるためである。絶大な戦闘力を持ちえる『異端』に対して、武力を持つてその存在を排除するために設立された、実働部隊である。

そして埋葬機関発足と共に、定められたのが『死徒二十七祖』と呼ばれる埋葬機関の最大にして最終の殲滅目標であった。

その多くは最古参にして最強の死徒たちが認定を受けていた。いずれもその気になれば人間を蹂躪できる者たちである。

死徒二十七祖の中にはトラフイム、グランスルグ、メレムの朱い月に仕えた従者三人や、アルトルージュとプライミッツ・マードー、さらには魔法によって神を汚すとされ、また吸血種となったゼルレツチも名を連ねていた。

会議を終え、司教たちは思い思いの事を口にする。

「終わったか…しかし、ようやくこれで本格的に異端を排除できそうであるな」

「ああ…埋葬機関の連中には存分に働いてもらおうか…」

「しかしあの『断罪者』を二十七祖に入れるのはどうかと思うがな。奴は異端を排除している側だろう」

「それでも奴が異端であることは間違いない。いずれは排除しなければならぬ者だ」

「うむ…。だが、ようやくこれで始まったな」

「ああ、全てはこれからだ」

『死徒二十七祖序列第三位
スタッド』

リシュアン＝ブリュン

大陸において、これまで300年以上もの長い間蹂躪され続けた人間が、ようやく死徒に対して反撃を始めた頃、海を隔てた島では少数の国が領土を奪いあっていた。

王たちの中には、『自らが統一を図らん』と息巻く者、『民を、平穏を守る』と侵略を防ぐ者、様々な者がいたが、皆一様にして侵略

戦争を繰り広げていたのである。

しかし、此処に来て戦火は無くなりつつあった。

侵略戦争が、統一が終わったのではない。原因不明の流行り病のせいで戦争を続けられなくなったのだった。

民が死んでしまったら、戦力はどうすればいいのか。この時代、職業軍人はいない。歩兵は普段、農業などに勤しむ普通の人間だ。兵糧の問題もある。

王たちにとって唯一良かったことは、他国も同等の流行り病が出て攻め込められる心配がないことだろう。どの国も無事な所はなく、戦争を続けられる国が一つもなかったからである。

王たちは皆、原因究明に尽力していた。

そして、此処にも。

一つの城があった。それは絢爛豪華などではなく、少しばかり大き
いだけの城であった。それは国が寂れているのではなく、王がそれ
を望んだからであった。民と同じ視点に立つ王に、付き従うものは
多かった。

御世辞にも豪華とは言えない執務室のなかで、王は流行り病に頭を
悩ませていた。一度かかると二度と治らない、恐ろしい病だという。
原因も解らず、対処のしようがない。そもそも、患者がほとんど見
つからないのだから。皆、かかると煙のように消えてしまうのだ。

情報も、感染を免れた村人が夜遅く帰ったところ、狂化して幽鬼の
ようになつた隣人を見て慌てて逃げ出した、というモノ位だ。

その報告後すぐ、王は調査団を派遣したが村人は一人としておらず、
手がかりも残されていなかった。

(全く……何が起こっているのだ……)

王の心労は重なる。

現状では、あの選定の剣を抜いた時に誓つた守るべき民を見殺しに
しているも同然だからだ。

その時、ノックの音が聞こえた。

「入れ」

またしても良くない報告だとは思つたが、聞かざるを得ない。

扉を開けて入ってきたのは、従者の騎士であった。

「失礼いたします。王、また村が一つ消えました。村民全員が『狂死病』です」

（またか…犠牲者は増える一方…：私はどうすれば…）

「分かった。報告はそれだけか？」

何気なく訊いた。騎士はそのまま引き下がるだけだろうと王は思っていた。そこには希望など無い。

しかし、次に騎士は王がずっと待ち望んでいた事を言うのだった。

「いえ…。どうやらマーリン様が、元凶を見つけられたようです」

それは王にとって一筋の希望だった。思わず興奮したように叫ぶ。

「真か！？すぐに円卓の騎士らとマーリンを集める！話はそろってから聞く！」

すぐさま王の命によって円卓の騎士らは参上した。本来12席の円

卓も、空席がチラホラ見える。戦争が一時中断しているからと言って、辺境の警戒は怠れないからだ。

集まれる全員が集合したのを確認してから、王が口を開く。

「よくぞ急な呼び出しにも関わらず集まってくれた。礼を言う。皆を呼んだのは他にもない。最近民を苦しめている『狂死病』についてだ。今日、また村が犠牲になってしまったが…原因が見つかった」

「なっ…！」

「本当ですか、王！」

その言葉でざわめく騎士たち。円卓に男たちも、この報告は驚くべきものであったようだ。そして始めは重かった空気が幾分か和らいで、しばしの間喧騒が訪れた。

「静まれ…。詳しくはマーリンが話してくれる。マーリン、頼む」

「はい、ここに。まず初めに言っておきます。此度の狂死病…流行り病などではありませんせぬ」

「な…ばかな！では一体何が原因と申すのだ！」

騎士の一人が声を荒げる。

「落ち着かれよ、アグラヴェイン卿。皆様方は『吸血鬼』と呼ばれるものをご存じですか？」

「たしか…人の生き血を吸い、その力は強大で、日光に弱いバケモノ…であつたかな？」

「その通りです、王。狂死病の原因は、このブリテンに巢食う吸血鬼の仕業で御座います。吸血鬼が人の生き血をすすする時、人は眷族へと、バケモノへと成り下がるのです」

「そうだったのか…」

王のつぶやきには安心感が滲んでいた。なんせ、今までは手掛かりすらなかったのだ。それが、今の情報で解決まで道筋がたつた。あの大魔術師のことだ。もう吸血鬼の住みかをも突き止めているに違いない。そのバケモノさえ倒せば、この狂死病にも終止符が打てる。

「王！今すぐに討伐いたしましょう！我らの国、民草をこれ以上そ奴の好き勝手には出来ません！」

そう言つて、先ほど口を出したアグラヴェイン卿が興奮したように立ち上がる。その他の円卓に座る騎士たちも皆鷹揚に頷く。すぐには信じられない様な突拍子もない事実でも、大魔術師と称されるマーリンの言葉を疑う者はいない。

なぜなら、騎士たちはもつと身近に神秘を体験しているのだから。彼らが仕える王は、先代の王が死んだ後、次代の王を決めるとされ

る選定の剣を抜き放った時に肉体の成長を止めたのだ。

そして王が持つ聖剣は約束された勝利をもたらし、聖剣の鞘は何人たりとも王を傷つけることを出来はしなかった。

故に、すぐにマーリンの言うことを信じた。そして、国に害をもたらすものを滅ぼさんと意気込んだ。

今の王と、自分たち円卓の騎士が居れば負けはない

それは、驕りではなく自信であった。

「マーリン、場所は把握しているのだろうか？」

「はい、幸か不幸か我が国の辺境で御座います」

王の心は決まった。このまま放置していたら、一番早くに侵略されるのは自分の国だろう。

「ならば、出るぞ！アグラヴェイン卿、ランスロット卿、モルドレット卿、ケイ卿は私と共に来い！マーリン、案内を頼む。残りの者は国を頼むぞ。以上だ、準備をしる」

「……………御意」……………

そうして、王と騎士たちは吸血鬼の討伐に向かう。

「どうだ…？見つきりそうか？」

「いや、我が目標ははるか先にある。届くまで先は長いだろう。しかし、此処は居心地がよい。しばらく居させていただく。」

「ふ…勝手にしろ。だが、此処にいる間はこちらに従ってもらおうぞ。」

「それが混沌につながるのならば。」

「次は…海渡って離島か……これ終わったらアルトのところに戻るうかねえ…100年位経ってるし。」

久しぶりに妹の顔が見たい。そしてプラムをモフモフしたい。

しかし…100年か…。

「怒られそうだな」

断罪者が目指すのも離島であった。

十五話 死徒二十七祖（後書き）

少しばかり短めです。感想返信できなくて申し訳ありません。

今回はあの人が。

次回はあの人が、そして久々に戦闘描写、です。

だんだんと、原作キャラが出せたらいいなと思います。

十六話 プリテンの戦い（前書き）

すいません。

本当すいません。

一か月放置プレイしてしまいました。

まじすいません。

やっとネット環境がどうにかなったので…

あげます。

十六話 ブリテンの戦い

ヨーロッパ、つまりはユーラシア大陸から北西の方角に、海を隔てて島がある。

後にイギリス、正式名称『グレートブリテン及び北アイルランド連合王国』と称される事になるその島は、国名に示されたように昔から人々に『ブリテン』と呼ばれてきた。

そんな絶海の孤島に目を付けた者がいた。教会が埋葬機関なるものを発足させ、本腰をいれて異端排除に乗り出した為、すぐには教会の手が及ばないこの島へと一時避難した一人の魔王である。名を、ティベリウス・ウーンデットという。

この魔王は他の同族とは少し異なった考えの持ち主であった。無論、『精霊種たる自分たちが星の支配者である』という根底は変わらない。しかし、ティベウスは『支配してから』の事も考えていたのである。

支配者になるには魔王同士の権力争いにも勝利しなければならないのだ。

現状、魔王となった自分に敵は多い。

異端排除の力をもった家畜（人間）はどうとでもなるが、それでも目の上をずっと飛び回られる羽虫はうざったいものである。

同族も、『魔王が魔王を倒した』という前例がないだけで、決して自分を滅ぼしにからないと決まったわけではない。（メリットが余りにも少ないだけで、やろうと思えばもちろん可能）

それに、あの『断罪者』がいる。

今の自分では、太刀打ちできないだろう。過去に彼の特異性を求めて、捕獲に乗り出した魔王が返り討ちに有っているのを知っている。

それすらの障害をも乗り越えて、星の支配者になるならば、まずは領地を増やし、眷族を増やし、力を蓄えるのが先決だろう。

まずは自身のテリトリーの異端排除が先決の教会は、海を隔てた此処（島）に手を出してくるのも後であろうし、人間にしては力を持った存在がそこらにいる。

彼らを配下にできれば、いよいよ自分の力は盤石となるだろう。

この魔王にとって、ブリテンは非常に居心地のいいところだったのだ。

唯一の懸案材料は、行動が自由であり、そして神出鬼没な『断罪者』リシユアン・ブリュンスタッド位のものだろうか。

計画は上手く行った。魔術師上がりの死徒を一人眷族にし、途中誰の手も加えられていないこの島に、一番初めに乗り込むことができた。自身が吸血はしたのはごく少数。幸いどの地域でも人間たちは領土戦争を繰り返していたから、全く気がつかれなかった。

だんだんと、それでもゆっくりと勢力を伸ばしていったおかげで戦争の混乱も相まって、ようやく異変に気がついてきたところだ。

気がついたら全部政略されていた…とまでは行かないが、この分ならこの島の大半を自分が元凶だと気がつかれる前に掌握できそうである。

大陸と比べては格段に小さな島ではあるが、それでも、海を隔てた島丸一つが自分の領土だということは非常に心強い。決して捨てたものではないはずだ。

そしてこの島にすむ家畜（人間）のなかにいる一握りの力を持った存在。家畜（人間）に反抗されるなど有るはずもない。すぐに掌握できる。

あれらの存在ならば、死徒として自分の配下でやっていけるだろう。来る魔王の中の王を決める戦いにおいて、眷族である死徒の数は重要になってくるはず。今優秀な『駒』を手に入れておいて損はない。

「ただまあ、今は目の前の羽虫を握りつぶさねばなるまいて」

教会の本部の大聖堂の地下に、新設された埋葬機関の本部はあった。

「報告いたします。第五席がブリテンに向かいました。おそらくは異端狩りの為かと」

「そうか…あのバカが…」

埋葬機関第一位ナルバレックは独断専行をする部下にあきれ返った。この間、まずは地盤を固めるために教会周囲の地域の異端を排除する、と決めただけの部下のこの行動。

異端排除を目的とし、強大な力を有するのが大前提で最大条件の人選なのだから、性格など二の次となり、当然のごとく私の強い者しかいないこの集団を、まとめ上げられるとは初めから思っていない。

しかしながら、いきなり魔王
幻想種に挑むほど愚かではないと思っていた。

「いかなされますか？今からですと手遅れかも知れませんが、一応呼びもどすことも可能ですか」

「捨て置け」

ナルバレックは言葉を吐き捨てた。

身勝手な奴のことなど知ったことではない。かなりの確率である男は死ぬだろう。

帰ってきたらそれはそれで自分たち、埋葬機関の力が魔王にすら通じるものであると証明できるわけである。

「はっ。それでは」

靴音をたてながら、部下が下がっていく。

ナルバレックは、第五席が生き残ることなどほとんどないと思っている。

自分たちはまだ魔王には及ばない。

よしんば倒したとしても、野心むき出しのあの男は、魔王の有るところ必ず現れるあの断罪者に突っかかって死ぬだろう。

無論、いつかは追いつき追い越すつもりではあるが、魔王よりも強いとされるあの真祖には自分たちはまだ敵わないのだ。

ナルバレックは、自身の力量を正確に読み取っていた。

テイベリウスの前には一人の男がいた。埋葬機関の第五位である。

テイベリウスにとってこれほど早く教会が出てくることは予想外では有ったが、それでも十分に修正の効く範囲内で有った。

魔王の居城にて、二人は相対する。月明かりもなく、部屋を照らすのは燭台の小さな明かりのみであった。初めに口を開いたのは、好物が目の前に出された犬のように今にも飛びかかるとしている代行者であった。

「真祖：いや、魔王か？」

「いかにも」

第五位は喜んだ。これで自分がコイツを殺せば名が挙がる。第五席に甘んじてなどおらず、埋葬機関トップに座ることができる。

男は負けることなど一切考えていなかった。
こちらには異端、それも吸血鬼には絶大な効力を発揮する手札があるのだから。

黒鍵 吸血鬼の『浄化』に用いる為に生み出された『節理の鍵』たる概念武装。

【人は『死』に、『昇天』し、神の裁きを受ける】
そう言った概念を、『不死』という概念によって守られる吸血鬼に『上書き』することでその不死性を消滅させてしまえるのだ。

人が生み出した究極の対吸血鬼用の決戦兵器だと言えよう。吸血鬼は武器に触れることすら許されないのだから。男の口は卑しく歪んでいた。欲望にあふれたまま口を開く。

「じゃあもう…ヤっちまっても良いよなあ！」

「名乗ることすらせぬか…まるでケモノだな…」

代行者がそのケモノの様な目を爛々と光らせ、魔王に飛びかかるうとしていた時に、不意に闇から第三者が現れた。

「主よ、私は出んぞ」

大柄な壮年の男性。髪は白く、首から下は黒いローブで覆われてい

る。目は吸血種を示す紅であった。ティベリウスの眷族の死徒である。

「黙れ。貴様はどこかへ行っている」

戦闘に入ろうと気持ちが昂っていたのに水を差され、怒りをぶつけるティベリウス。死徒はそれを聞くや口角を上げ、闇に溶け込んだ。そして、死徒の登場で驚いたのは代行者である。

「なっ…！十位のネロ・カオス…だとっ！ククク…これは運がいい！」

死徒二十七祖序列第十位ネロ・カオス。ネロ・カオスは教会がつけた名であり、人間であった時の名はフォアブロ・ロワイン。本来ならば万全の状態でかからねばならない相手だが、有ろうことか、この場にそのような大物が揃っている事に代行者はそれすらも自身のチャンスだと認識した。

「そうか…」

ネロ・カオスはそのまま闇に溶け込んだ。しかし、落ち込んでいるわけではない。むしろ逆だと言える。

自身の神秘の追求の過程の中で、死徒になることは必要であった。だが、死徒になったおかげで血を送り込まれた魔王が自身の主となってしまうのだ。

これはネロ・カオスにとって由々しき事態であった。死徒として目覚めてから、自分の言動が操作されている感覚がどこかにあった。本当は向かいたくもなかったこの島に、主に呼ばれたせいでこなければならなかったし、吸血してもあの魔王に大半を持っていかれてしまい、自分の手元に血はほとんど残らない。

故に、ネロ・カオスはこの主従の呪縛から抜け出したかったのだ。表向きは素直に付き従うふりをし、じつくりと魔王の性格などを掴んだ。今戦いの前で姿を見せたのも、あえて主の機嫌を損ねることによって自分が戦わなくてもいいように仕向ける為である。

あわよくば相討ちを

都合のいい願いだが、どちらが勝っても戦いが終わった後の弱っているところを叩けばいいのだ。

魔王と代行者、そして死徒。

この場にいる中で、一番この状況を喜んでいるのはネロ・カオスかもしれない。

戦闘の始まりは代行者だった。

「シッ

「！

懐から黒鍵の『柄』をそれぞれ指の間に挟んで三本取りだす。それと同時に、聖書を触媒として細身の『刃』を構成する。それは斬り合うようには創られていない、投擲用の剣。瞬時に作りあげたソレを、間髪いれずに打ち出す。

「ほう…っ！」

代行者のその人間離れた動きを、テイベリウスの目は正確に捉えていた。そして、創られたモノが自分にとって非常に危険であるということも。本能が、自分の不死性が無くなるという死への恐怖に反応していた。

だが、その目は動きを捉えている（……）のだ。警戒こそすれ、必要以上に怖がる必要はない。避けることなど容易なのだから。

そして、一気に肉薄する。

「なっ…っ！」

ばかな。

代行者が目の前の方の光景を認識するのにかかる時間を要した。まさかあんなに簡単に避けられるとは微塵にも思っていなかったのだ。かなりのスピードで放ったソレは、避けられたとしてもギリギリでそれを次々と打ち出すことでそのうち吸血鬼にとっては最悪の相性とも言える黒鍵の威力に成すべくもなくなったのを、じわじわと追い詰めていくことしか想像していなかった。圧倒的強者をなぶって行くことに喜びを見出し、そこに快楽を見出していたと考えてもいい。男の妄想の中で、男は必ず捕食者の立場であった。

だが、今はどうなのだろうか。

避けられたシヨックで生み出した大きすぎる隙の間に、たちまち接敵を許し今にも攻撃されそうである。流石に代行者も、白兵戦に持ちこまれては魔王に勝てるとは思っていない。

『ドフッ！』

「ガッ…ハッ……！」

そもそも勝てるはずがないのだ。あまりにも地力が違いすぎる。強化の魔術が有ったとしても気休めにしかならないだろう。それほどまでに強大な腕力より放たれた一撃は、代行者の生命活動に支障をきたすのに充分であった。

「ちい…！」

殴られた腹を押さえながら、必死に距離を取る。すかさず詰める魔王。この幻想種に、驕りはなかった。そうして消えていった者たちを知っているからだ。

「くっ…ナメる…なあ……っ！」

しかし、一瞬の猶予が出来た。その刹那の時を逃さず、代行者は必殺の武器を生み出す。

「ムッ…」

出そうとした手を、ティベリウスは思わず引っ込めた。その隙に大

きく距離を取る代行者。

「ムウ…触れられぬとなると…やはり厄介なモノよな」

自分の手を見ながら、そうつぶやくテイベリウス。これだから早々に片付けたかったのだ、とこぼしたその姿は、一瞬自分の世界に入っていた。

その隙に、黒鍵が魔王を襲う。それはまるで『勝者は自分だ』と言うような怒涛の攻撃だった。

「ズドドドドドドドドドッ！…！」

「はあ…はあ…」

息が切れる。自分が持つほとんどの黒鍵を打ち出した。後には、剣山のように地面に刺さる無数の黒鍵しか見えていない。一撃一撃が必殺を誇るのだから、あの剣軍の前ではもう立ってはいられない。立ってはいられないはずなのだ。だから、

「よくもやってくれたのう…だが打ち止めか…」

頬と左腕が怪我しているだけで、立っている奴は一体何だというのか。思わず力なくペタンと座り込む。

「腕一本だ。誇るがよい」

そうして近づいてくるナニカ。代行者は思う。なんなのだこの状態は。自分は捕食者だったはずだ。だが今の自分はどうか。ライオン

の前にだされた無力なウサギのようではないか。

コツ…コツ…と次第に近づいてくる足音。

「うわああああああ！！」

最後の黒鍵を近づけまいと投げつける。魔王がそれを難なく避けたのを見たのが、代行者が見た最後の光景であった。

十六話 プリテンの戦い（後書き）

前回原作キャラを出すとか言っときながらまたモブのみです。

書きたいこと書いてたら長くなってしまいました。

次は出てきます。はい。

魔王の名前は、いつもながら世界史資料集から抜粋。

次はすぐに出します。

十七話 下剋上(前書き)

最新話あげます。

すぐにごでも。

ねっ造設定がありますがご了承ください。

十七話 下剋上

「クハハハ…」

魔王相手に腕一本を使用不能にさせた。人間にしては期待を大きく上回るかなりの働きをしてくれた事に、闇の中で静かに戦いの行方を見ていたネロ・カオスは一人静かにほくそえんでいた。

「何を笑っている。その不快な笑い声を今すぐやめろ」

しかし、どうやら五感が人間より遙かに発達した魔王には聞こえてしまったらしい。背を向けたまま、首だけこちらを向いた状態で睨んでいる。

「ああ…これは失礼したな。私はもう戻ってもよいか？」

「…いけすかん奴だ。好きにするがいい」

そうして背を向けて歩き始めるテイベリウス。しかし、戻るとは言ったものの、ネロ・カオスにそんな気はさらさらない。主が片腕を負傷しているこの好機を、みすみす逃す手はないからだ。

（往け…！）

その発せられた意思を体現が如く、ネロ・カオスの影から具現化したオオカミは魔王の左側から襲いかかった。

「…なんのつもりだ？」

テイベリウスが右腕でオオカミを撃退し、そのまま振り向く。鋭い眼光は、明らかに殺意が含まれていた。

「分かっているのだろうか？もう貴様を主と呼ぶつもりはさらさら無いということを」

ただの人ならば泡を吹いて失神するようなプレッシャーの中で、ネロ・カオスはあくまで自然体で立っていた。この男の中で、今の状態は全て計算の内。こうなったネロは強かった。

「刃向かう気が…大きく出たな。ただの学者風情が、先の予想も出らんらしい」

普通死徒になったものは、例外はあるにしてもほとんどの場合『気が大きく』なる。つまり、ヒトの身であったころからは考えられないほどの強大な力を手に入れたおかげで『自分は何でもできる』と思いつむのがほとんどなのだ。自分が眷族にした男はこれまでそのようなことはなかったが、此処に来て思いこんだらしい（……）。それを打ち破り、力関係でも自分が主だと認めてこそ…真に自分の眷族だと言えるのだ。魔王は臨戦態勢を取る。

「先が見えていないのは…果たしてどちらか…」

それに呼応するように、ネロ・カオスは両の腕を横に広げる。…まるで自分が強者だと言わんばかりに。

「無論…貴様の方だ!!」

ティベリウスがそう告げるや否や…戦闘が開始された。

先手はティベリウスがとつた。その強靱な脚力で一気にネロ・カオスの視界から消え、瞬時に背後に回り込んだ。

その一連の動作を、ネロ・カオスは確かに捉えることは出来なかった。しかし、背後に回り込まれ死角にいたはずの魔王の攻撃を、確かに顕在させた魔物で迎撃していた。

「ちい…っ！」

まさかの反撃に、本体への攻撃を中止せざるを得なかったティベリウスは思わず舌打ちをする。

「残念だったな…。それがたとえ吸血種の脚力によるものであっても私に奇襲は通用しない」

「なるほど…ただ単なる反抗では無かつたらしいな…。死徒という劣化する肉体の修復の為に取り込んだ魔獣を使い魔として使役、360度の警戒網を敷いているのか…。確かに死角なんぞ存在しまい」

冷静に分析を開始する魔王。死徒が魔獣を取り込むことはよくあることだ。いくら死徒が不老不死とは言え、その肉体は不完全であり

次第に劣化していく。

絶えず劣化する肉体を保全するために必要な遺伝子情報を接種するのに効率がいいのが他者からの吸血行為である。しかし、主が居る場合、死徒は接種した血を魔王に持っていかれてしまうのだ。それを補うために、生命力の高い魔獣を取り込むのだ。

「その通りだ。それでも私に挑むか」

「ふざけるなよ…ただの手下だった屑が……」

「たわけが」

下に見ていた者に刃向かわれる怒りに燃える魔王と、すでに主は越えたとする死徒。

魔王は膝を曲げて構えをとり、ネロの胸が黒い煙で覆われる。

「その身を痴れ！」

ネロの号令と共に、ネロの体内から無数の黒獣が飛び出した。

ティベリウスの攻撃は理不尽きわまるものであった。

初めに飛びかかった獣は頭を潰され、首を飛ばされ、胴を切断される。口を広げたモノは顎から裂かれ、飛びかかったモノは腹をぶち抜かれた。

そんな中でもネロ・カオスは表情を崩さない。ただ、内から獣を顕

在させる。

「まだ続けるか……。貴様程度が使役する使い魔などでは何匹だろうとこの私を倒すことは出来ん。それでもまだ続けるのならば

」

ティベリウスは言葉を切り、突進する。それは愚直なまでに直線の動き。しかし、それを遮るものはない。否、ネロから出でた獣たちが遮ろうとしているがどれ一つとして歩みを止められるモノはなかった。

「又ウッ！」

そうして、ティベリウスはとうとうネロ・カオスの元へとたどり着く。

「貴様本体を仕留めるまでよ」

『ザシユウウウウ！』

ティベリウスの爪が、ネロ・カオスを真っ二つにぶった切った。

「……壊してしまったか。修復には少々時間がかかるようだな……。それまでに朝にならねば良いがな」

つぶやく。そして考える。これで新たに眷族を増やさねばならないと。ネロの場合、初めからおとなしかったので掘っておいた部分もあるが、やはり常々誰が主か教育する必要があると。幸い、素材はこのブリテン島に大量にある。ならば、次に移ろうかと思考を持っていく。

「この程度か…?」

…それは小さく、しかしながらはつきりと魔王の耳に残った。聞こえてくるはずのない声。

『ヌルリ…』

そう血の音をたてながら、ネロ・カオスは半身の身で立ちあがった。

「…その姿になろうと立ちあがるとはな。生命力だけは有るようだ」
テイベリウスは特に驚きはしない。なぜなら高速回復こそ吸血種の十八番なのだから。

「しかしもう一度!」

『ズドッ!』

「頭を潰せば終わる…」

残ったのは、頭を吹き飛ばされたネロの半身。その身体からは黒い粘り気のある液体が絶えず出ている。いつの間にか、倒されてカチチの失った獣たちが、同じく黒い液体となって、ネロの半身に集まっていた。

今や、ネロの半身とティベリウスはネロから出た黒い液体に囲まれていた。

そして

黒い液体が人型を形作り

「半身になるのが、頭を吹き飛ばそうが関係ない。私は此処にいる」
ネロ・カオスは顕在した。

「なっ…!!」

振り向いた魔王が見たのは、壊したはずのネロ・カオスが傷一つなく立っているところと、その前で自らに牙を剥けている巨大なサメであった。

『ギシヤアアアアアア!!』

サメが迫ってくる。とっさに腕を振り上げようとしたが、腕は動くことはなかった。

何時もならばネロは周囲に使い魔を放つて監視させている。しかし、ティベリウスとの戦いではそのような余裕などなかった。大きな音を何度もたてていたのだから誰かが来てもおかしくないし、外の状態が分からないのならばなおさらだ。

しかし、そこに空気の読めないの一人。

「……………ああ、すまん。悪いが来ちゃった」

柱の陰から、リシユアン・ブリュンスタッドが現れた。

床はそこかしこが抉れ、あたりには血が飛散している。惨劇の後の部屋で一人中央で笑う白い肌の大柄な男。

なんなんだこの状況。

リシユアン・ブリュンスタッドがブリテン島のティベリウスとネロ・カオスの居城についた時の心境である。

初めは理解は出来ずに、なんとなくお邪魔しちゃ悪いな〜と思い影に隠れていたが、よっぽど嬉しかったのかリシユアンが欲しがって

いた情報の大半を言ってくれた。

「一応あそこで笑っていたのは自分が求めてきた魔王ではないらしい。ならばどうするか。」

「死徒と相對するのは何気に初めてである。これ以上敵を作りたくもなかったが、考えているうちにこちらに向かってきてしまっている。こうなってはしょうがない。」

「……ああ、すまん。悪いが来ちまった」

「なっ……！」

明らかに驚いているネロ・カオス。リシユアンはそれに若干の気まぐさを覚えながらも、ネロに向かって問いかける。

「俺は此処の魔王を狙ってきたんだが……どうやらあんたが倒したらしいな。それであってるか？」

「だとしたらどうするのだ。私を殺すか？最強の真祖よ」

自分がやってきたのがそんなにも計算外であったのか。明らかに慌てているのが隠し切れていない。今の受け答えで、自分の目的であった魔王を目の前の死徒に倒されたのを知ったリシユアンは、この

死徒と戦うかどうか迷う。別に倒す理由は無いし、むやみに敵を増やしたくない。

「俺と敵対するのならば。でなければ…」

「ちい！」

そういうや否や、ネロの中から獣が飛び出した。

「結局こうなるのかよっ！」

そう愚痴りながらも、リシユアンは素早く抜刀した。犬、オオカミの類は総じて腹が弱点である。ネロの使い魔たちの懐に潜り込んで一気に切り裂く。

切られた獣は、黒い液体となり地面に落ちていく。

「……………」

リシユアンは一瞬チラ、と自分の愛刀に目をやりながらもそのまま一気に駆け抜ける。途中幾匹かの獣をなぎ払ったが、獣たちは総じて力が落ちているのか動きが鈍っていた。そのような状態では、リシユアンを止められはしない。

「ハアアッ！」

こんなものか、と思いつつも一気に刀の間合いに肉薄したリシユアンは、ネロを右肩から袈裟切りにした。抵抗することなく崩れ去る

ネロ・カオス。

(…あっけなさすぎる)

さつきから腑に落ちないのはそれだ。確かに連戦で疲れている部分もあるだろうが、それにしてもさつきの獣たちや、ネロ本人でさえも中身の無いスツカスカのような感じなのだ。斬ったところで余りにも手ごたえが無さ過ぎる。

「…やはり密度が足りんか……」

そう言いつつ、地面に撒き散った黒い液体からネロが再び顕在する。それがつぶやいた言葉にリシユアンは疑問を覚える。

「密度…?」

「最強の真祖でも一目では分からぬか。その金色の眼を凝らしてよく視るがいい」

「……」

言われた通りにリシユアンはその魔眼を凝らし、ネロの内部を視る。

「っ!」

「視えたようだな…我が体内に内包されたケモノ達の混沌が

「

…なるほど、つまり

「

リシユアンの頭に嫌な予感が浮かぶ。もし自分の考えが正しければ、目の前の死徒はとんでもない生命力を持ったバケモノになる。果たして自分が殺し切れるかどうかすら危うい。

「そうだ。私を滅ぼすつもりであるならば、一瞬にして我が世界の全てのケモノの命を滅ぼすつもりでなくてはならん」

「くっ…」

予想が当たった。いや、当たってしまったと考えるべきか。数えきれなかったが、ネロの体内には少なくとも数百の命が詰まっていた。今のネロ・カオスを一度に殺せるほどの火力をリシユアンは有していない。いささか面倒なことになって来てしまった。

(どうする…。今のアイツを一度に殺し切れるほどの破壊力を俺は持っていない。となると)

考えをまとめる。相手は一度に『消滅』させなければ復活する。しかし、この場合行っているのは高速回復ではない。なぜなら、ネロ・カオスは先ほど切り口からではなく流れ出た体液から復活してみせた。そう、まるで粘土みたいに。

そして奴の言動から分かること それは、復活にエネルギーを消費しているということだ。

ならば、これから取る方法は一つ。相手を一撃で消滅させられるほどまでに弱らせればいい。すなわち、何度も殺していけばその内限界が来ると言う事だ。

そこを持てる最大の火力で叩く。

途方もない作業だが、これならばなんとかイケるだろう。

そうしてリシュアンは居合いの姿勢を取る。全身をバネにし、今にも飛び出さんと力を溜める。

「その様子…気がついたようだな。貴様に殺されて、こちらも苦し
い頃合いだ。このまま引かせていただくこう」

「な…待て！」

「心配いらん。我が着族を幾度も切り裂いた…この借りは必ず返さ
せてもらう」

しかし、急にネロは消え去った。あのままだったら長期戦は免れな
かったが、殺しきることは出来ただろう。自分がそれに気がついた
と、ネロが知ってからの引き際は見事にしてやられた。確かにあそ
こがベストのタイミングであっただろう。

「それにしても…」

今まで力押しの手相手しか戦ったことがなかったリシュアンにとって、
『技』をもった相手との初戦闘であった。

（なんだったんだ…アレ……）

言われるまま見たネロの内部。真っ黒な空間とそこで見た無数の眼。
正直言っていくら死徒でも容量オーバーだ。それだけの存在を内に
秘めていられる…

「あれも…魔術なんか…？」

まだまだ知らないことばかりだ。今回はすぐに倒すまでの算段がついたが、また同じようにトリッキーな戦術の相手にして戦って、臨機応変に対応できるのかは凄く不安である。

かといって、魔術を教わるうにも魔術師に知り合い（・・・）なんていない。

「やっぱり経験か…」

こればかりはどうしようもないのか。経験を積む以外に方法が思い浮かばない。やはり、それに限るのだろう。いろんな事を経験して、不思議な物事をもっと見て。

そうしたら、もっと心に余裕と自信ができるのか。

見たこともない事象にも、冷静に対応できるだけの分析力が身に付くのか。

「こんなんじゃアイツに顔向けできないな…。今の俺を見たらアイツはなんて言うかな…。いや、そもそもアイツも情報不足でやられたんだっけ…ハハツ…似たモン同士か…」

自嘲めいた笑い。久しく友の事を思い出すことが無くなったのを感じる。それほどまでに今が充実しているかと言えば…そうとは言い切れないのが難点だが。それでも、朱い月のことは今後も絶対に自分には忘れないのだと思う。

目をつぶれば、今もまだ腑が居ない自分を叱責するアイツが出てくるのだから。

そんな、安らぎの時間はすぐに終わる。

『バンツ！』と扉を開く音が聞こえ、鎧を纏った人間が大量になだれ込んできた。そしてたちまちの内に取り囲まれる。手に持った槍の穂先をリシユアンに突きつけながら。

なにが起こったのか状況把握に苦心するリシユアンに、一人が言い放った。

「貴様か！我らの島に狂死病を広めた原因は！」

「え……？」

十七話 下剋上（後書き）

腹ペコ王様は一言だけ。

正直ヒロインにしようか迷っています。

十八話 悪夢（前書き）

こんばんは。

ほぼ月刊になりつつあります。

マズイ！！

後、前話を修正しました。

自分が本当に書きたかったものをもう一度見直す機会を与えていただきました。

感想を寄せていただいた皆様、本当にありがとうございます。

それでは、十八話です。

十八話 悪夢

血塗られた壁

抉られた床

魔導師マーリンによって導かれた王と騎士、その配下の兵士たちを待ち受けていたのは、騒然たる現場であった。立ちこめる臭気に歴戦の勇士たちである騎士たちは顔をしかめ、吐き気がこみあげてくる兵士も出るほどの有様。

その中で、一人の姿があつた。

腰まで届く絹の様な金色の髪、それに似合わないボロボロのコート。見たことのない形状の剣を携えている男。

（目的の人物だ

！）

そう軍の人間の考えは一致していた。すかさず取り囲むように動く男は途中で気がついたようだが、特に何も動きを見せずに取り囲まれた。

（なんなんだこいつは…）

兵の一人は考える。凶器を四方八方逃げ道が無い状態で向けられて、どうしてこうも落ち着いていられるのだろうか。

この騒然な状況を生み出したのが目の前の男なら、自分たちは本当

に勝てるのかと。
そもそも、この男が人間であるのか

と。

「貴様か！我らの島に狂死病を広めた原因は！」

兵を引き連れた王、アーサー・ペンドラゴンは兵の包囲陣をかき分けて、元凶と思しき人物の間に立つ。その手に握られたのは聖剣エクスカリバー。切っ先を向け、自分の民を恐怖に陥れた者かを問いただす。

とは言え、十中八九アーサー王は目の前の男が元凶だと信じて疑わなかった。男の眼は吸血種の証である紅に光っていたのだから。

「え…？」

しかし、男の口から出たのは素直な疑問の声。正直シロだと言いたくなるほどに、まるで状況が分かっているようであった。

王に不安が広がる。もしここで問答無用で斬り捨てて、後でシロだと分かった日には…守るべき民を自らの手で斬ってしまったことになる。その時自分は…どう思うか。きっと悔やんでも悔やみきれないだろう。

「貴様…吸血鬼だろう。我が民を吸血し、喰い漁っていたその行為…我らが見過ぐす道理はない！ここで斬る！」

「……ああ、うん」

一瞬の間をおいて、男は納得したように頷いた。それは、本当に途中まで心当たりが無かったようであり、ようやく合点がいったという風である。

（なんなのだ、この男は…）

王の困惑はますます広がる。明らかに今問い詰められていることを理解した様子。此処までの腹芸ができる人物を、計略や謀事に慣れたアーサー王でも知らない。

（もしか、本当に知らないのではないか…？）

しかし、そうなると今度はこの凄まじい状況のこの場所に一人立っていたのか、という事になる。地面や壁は至るところが抉れ、辺りに飛び散っている血の量からして確実に一人一人は死んでいるこの場所、所在なく立っていたこの男の目的とは一体何だというのか。

（これ、やばいんじゃない…？）

リシユアン＝ブリュンスタッドは必死に頭を働かせていた。突然軍隊と思しき人たちに囲まれ、陣から前に出てきた将軍的な存在に剣先を向けられ問い詰められる。

そこで漸く状況が把握できてきた。
つまり、自分が人間を吸血して襲っていた魔王だと思われる。
今までも吸血種とバレて人間たちに追いかけられたことは有ったが、
ただ自分が吸血種だと言う理由のみであったので、実際には害を及
ぼしていたわけではないので逃げれば良かった。

だが、今の状況はマズイ。自分が人間を襲っていると思われる
から、この身を打ち滅ぼすまでこの人間たちは追ってくるだろう。

しかし、ここでしらばっくれても『ではこんなところで何をしてい
たのか』と聞かれてアウト。

『自分が倒した』と言っても、吸血種を倒すほどの人間ならば何か
しらの噂は広がっているはずだから、即刻バレてこれまたアウト。

というか、自分の紅眼を見られているので人間だというのはかなり
無理がある。真祖とバレているのならば元凶だと思われてしまう。

(救いとしては、魔王狩りをしている自分の事を知っている人物が
いる事なんだが…)

そんな甘い幻想は通用しないだろう。それに、自分がそうだと証明
するものもない。

真祖だと言うことはやめておいた方がいいのは分かるんだが…

(どうしたものか…)

暫しの静寂。それを破ったのは包囲していたのとは別の命を受けた兵士の一声だった。

「へ…陛下！ひ…人が…！人が死んでおりますっ…！」

「なっ…！」

兵士が見たものは、ティベリウスによつて頭を無残に潰された代行者の遺体。重い石の下敷きになったかのように、原型をとどめておらずグチャグチャであった。

余りにも残酷な殺し方に、つい兵士は叫んでしまふ。戦場という人の死体を何度も見る機会の有るところにいても、冷静ではいられないほどの惨たらしい状態であった。

この報告で驚いたのはアーサー王だけではない。リシュアン＝ブリユンスタッドもまた、驚きに目を丸くしていた。

「貴様…やはりそうだったか…。よくもシラをきっていたな…！」

そうして確信をもつて狂死病の原因だと断定した王に、予想外の出来事にあせつたりリシュアンはつい口を滑らせる。

「いや！確かに俺は真祖だg…っ！」

そこから先は言えなかった。アーサー王の聖剣が敵を斬らんと迫ってきたからである。

「ついに本性を現したか…！ここで斬って捨ててくれる！総員、かかれえっ…！」

（しまった！）

リシュアンがそう思うがもう遅い。自分が真祖だとばらしてしまつた今、完全に向こうは敵だと認識してしまつた。四方八方から槍が迫ってくる。

「ちい…！」

真祖の脚力を生かし、槍が迫ってくるギリギリを上方にかわして包囲網を抜ける。

（ああ、もう俺のバカ！）

自分が嫌になるが、気持ちを切り替える。今自分がやること。やらなければならないこと、やりたいことを貫くために。

「な…なんだとっ…！」

「バケモノか…！」

下から聞こえる真祖の人間離れた脚力に驚く声を聞きながら、着地する。

『スタツ』

そこにすかさず無数の槍が刺し込まれる。隅々まで洗練された兵士たちの動きは寸分狂い無く統制されたものであった。

(どつする…！)

一瞬の間に考えをめぐらす。勘違いによって起こった戦闘。防げるものなら犠牲は出したくない。

(命は取りたくない…。ならば…！)

戦闘不能にするのみ。命は取らずに、上手いこと気を失ってもらうなり、足を怪我してもらいたいものだ。過去にやったこともある不殺の行為。一度決めたらもう迷わない。

「ハアッ！」

『ゴウツツツツ！！』

絶妙に加減された拳を地面に突き出す。地面との衝撃、突き出された拳圧、割れた床の破片で兵士が軒並み吹き飛んだ。

「なっ…！」

暴風。アーサー王が見たのは突然吹きすさんだ暴風と、それによつ

て飛ばされる部下たちであった。皆成すすべなく壁や床に叩き付けられている。残ったのは、比較的後ろにいた兵士たちと、円卓の騎士たちであった。

濛々とした煙が晴れそこにいたのは、拳を石の床にクレーターができるほどの威力で打ち込んだ吸血鬼の男。男はその伏せっていた顔をゆっくりと上げ

『ギンツ！』

(っ！)

明らかに先ほどとは違う闘争心の込められた、その紅い視線で体を射抜かれた時に王が感じ取ったのは心臓を鷲掴みにされたような感覚であった。思わず身がすくむ。

(なんなのだ…先ほどとは別人ではないか…！)

「歩兵部隊は下がれ！奴の相手は私と騎士らに任せろ！負傷者を外に運び出せ！」

「王！無事で！」

「ランスロットか…私は大丈夫だ。それよりも…」

「ええ、兵たちには荷が重い相手でしょう。あの怪力…噂に違わない脅威です。相手取れるのは私たち騎士のみでしょう。アグラヴェイン卿、モルドレット卿、ケイ卿も兵に指示を終えました。我ら五人でかかりましょう。あれは人では有りません…獅子のような力を持った人の形をしたバケモノです。私が先行します…王はついて来

てください」

「むっ…」

自分が止められても敵に突っ込んでいく性格を、この騎士は止めても無駄だと判断したのだろう。

『バケモノ相手に騎士道など不要。全員でかからねばこちらがやられる』

そう言外に言い残し、目の前の敵に抜刀して突っ込んでいく騎士の後を王は追った。

「かなり強いのが五人…。これは手加減なんて言ってもらえないな…」

そう呟いている目の前の異形に、五人の円卓の騎士らは戦慄した。彼らは人間たちの中でも卓越した戦闘能力を有する者たちだ。その戦士のカンは、目の前の存在が別次元であると警鐘をひっきりなしに鳴らしている。

その異形…リシユアン＝ブリュンスタッドは腰をおとし、いつでも動けるように構える。

そして

「いくぞ…！」

そのつぶやきと共に、飛び出した。

それは爆音だった。
有りえない跳躍の地面を蹴る音を響かせながら、弾丸のように騎士
たちに向かってくる。

「っ　　、来るぞ…！」

応じて騎士らが各々の剣を握り、駆け抜ける。

みるみる内に縮まる距離の丁度中間地点に、リシユアンは着地する。
しなやかな猫のごとく、体のバネをめいっばいに使い、勢いを吸収
する。

その隙に、落下地点めがけて疾走する三人の騎士たち。

時間をおかずに振られた三筋の光。

それをリシユアンは自身の愛刀で迎え撃った。

部屋全体が振動するほどの衝撃が発生する。

その隙に、残った二人が後方より斬りかかる。

「ちい…！」

それに気がついたリシユアンは騎士たちの剣閃を受け止めていた自
身の剣を上にはね上げ、騎士たちをすかさず蹴りで吹きとばす。

たまらず床を転がる騎士たち。しかし、ここで受け身をとれている
のはやはり熟練の戦士と言ったところか。

後方より迫った二人はそのまま斬り結び、止まること無く駆け抜ける。交差する三つの影。

しかし、五対一という数理上不利な状況でも、リシュアン・ブリュンスタッドはただただ圧倒的であった。まるで巨木のようにその場を動かさず、暴力を振るうかと思いきや、突然みせる猫の様なしなやかで繊細な動き。

その姿は正に完璧な戦士と呼ぶにふさわしいモノであった。

その一撃をまともに食らえばいくら円卓の騎士と言えど致命傷になり得るだろう。それほどまでに真祖の肉体は人間とはかけ離れたものであった。

だが、それでも騎士らはひるむことなく最大の力で押し返す。全身全霊をもってはじき返すのは、そうしなければ互角に渡りあえないからだ。

ジリ貧　　。残された力、体力、全てが違いすぎた。

数で生み出されたリシュアンの際。それを突いたところで真祖には意味が無かった。星のバックアップをうけるその身に肉体的疲労という言葉は無縁だ。

五人いた騎士たちは一人…また一人と崩れ落ちていき、最後に立っていたのはリシュアン・ブリュンスタッドただ一人のみであった。

十八話 悪夢（後書き）

まず初めに。

これがリシュアンだ！

というわけで：真祖の力本領発揮です。

しかし、この話を書いて感じたこと。

情けない心情描写のほうがすらすら書ける。

むしろ、今回みたいな主人公気質の戦闘描写苦手・・・大丈夫なのか・・・。

341

後これだけ遅れた理由として、

月姫やってました。

歌月十夜やってました。

あつたんですよ。売ってたんで買いました。
とりあえず琥珀さんルートまで一通り。

内容をおぼろげながら知っていても泣ける琥珀ルートのクオリティ

の高さ。

後CPでは完全にギャグキャラ扱いのシエルの純真さ。

ヤバス。買ってよかった！

だが、シエル・・・月姫では普通に可愛かったのに・・・。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0546u/>

その身に宿すは月の意思

2011年11月23日00時38分発行